# 切れない絆

国府神紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
切れない絆

【Ｎコード】
Ｎ１９０９Ｆ

【作者名】
国府神紫音

【あらすじ】
九連日向と影はあまり似ていない双子。彼らの平凡だった生活は、ある教師の歪な愛情に迫られたときから歪み始める。兄弟に共通して存在する、不気味な“痣”。そして弟の“中”の“彼”。全てが絡まり合い複雑に縺れる糸は、彼らに何を示すのか…。「ユニークアクセスが９３００人を越えました～。読んでくださる方々、どうもありがとうございますっ＼（＾ｏ＾）／」２００９年２月２４日、第一部完結しました。伏線の回収は第二部になると思います。第二部開始は一切未定ですが、良ければ次回もお相手ください。閲覧、

誠にありがとうございます。

## 第一話：ある日の夕方

「ねぇ、麻理花のことどう思う？」
「は？」
夕焼けに染まる教室に、九連日向はいた。窓の外を見遣る彼の横には、クラスメートである蓮本奈緒の姿がある。
「可愛いでしょ？」
「…そりゃあまあ。何だよいきなり」
怪訝そうな日向には構わず、奈緒は窓を背にして壁に凭れた。いつ見てもその横顔は気だるそうである。
「別に。ただなんとなく訊いてみたかっただけだから」
「ふ～ん」
日向は麻理花のことを思う。奈緒に比べてふっくらとし、何より目を引くのは目の大きさである。化粧の効果でもなく、元から大きいらしい。ぱっちりした目は、微笑むと一本の線になるから不思議だ。少しかかった緩いパーマは、彼女のほんわかした空気にマッチしていると思う。
「ねえ、九連」
「…どうでも良いけど、蓮本、お前いい加減煙草吸うの止めろよ。すげえ香る」
「どうでも良いなら言うな」
奈緒はにべもなかった。日向ははぁ、とため息をつく。
「で、さぼり魔の蓮本が何で放課後になっても居るんだよ」
「別に。ただの気まぐれ」
「お前と話してると、空気と話してる気になるよ…」
「うるさい、弟煩悩兄」
「…何だよ、それ」
奈緒が唇の端に皮肉げな笑みを浮かべる。スカートのポケットに手を伸ばすが、日向の視線に気付いて止めた。

「分からない？影だってあんたと同じ１７の男の子なんだよ。委員会が終わるのを待つ必要あるの？ってこと」
「別に俺の勝手だろ」
日向は思わずムッとして窓の外を見遣った。グラウンドでは、サッカー部が部活に勤しんでいる。帰宅部である日向には関係ない光景。
「そう言えば山城は？いつも一緒にいるのに」
「さぁ。気付いたらいなかった」
然したる感慨もなく奈緒は肩を竦めた。
「あ、兄さん」
双子の弟の声に、日向はドアの方を向いた。双子ではあるが、母方の血が濃く出ている影は父方の血が濃く出ている日向とは余り似ていなかった。体格はほっそりしていて、顔は白く女の子のような中性的なもの。体はあまり頑丈ではなく、幼い頃は度々体調を崩しては寝込んでいた。
「おう、お疲れ」
日向が手を挙げると、影が心底嬉しそうに破顔した。
「お待たせ。あ、蓮本さんもいたんだ」
「気付くの遅」
奈緒は小さく呟くと、鞄を手に取った。
「邪魔しちゃ悪いから行くわ」
「邪魔って何だよ」
「いちいち突っ込まないで。じゃね、影」
「あ、うん。また明日」
影にヒラヒラと手を振りながら、奈緒が教室から出て行く。
「蓮本さんと何話してたの？」
「ただの世間話。うし、俺らも行くぞ。夕飯の材料買って帰らねぇと」
「うん！兄さん、今日は何作るの？」
料理は専ら日向の仕事で、影は主に洗濯・掃除を担当している。指先は器用なものの、味の志向が異なるのか影は料理は苦手なのだっ

た。
「影は何食いたい。…俺が作れるもんにしてくれよ」
「兄さんは大抵のもの作れるからなぁ」
「そうでもない」
日向が作るのは基本的に日本の家庭料理にありがちなおかずばかりである。影が料理が苦手だから日向の腕前を美化している可能性が高い。
「じゃあハンバーグかな」
「…じゃあの意味は分からんが、まぁ今日はハンバーグにするか」
「うん」
影が鞄を持ったのを確認して、日向は歩き出す。影が彼の後を追う。

## 第一話：ある日の夕方（後書き）

お読み頂きありがとうございます。拙い文章ですみません（汗）

## 第二話：出逢い

日向と影よりも一足先に学校を後にした奈緒は、然したる目的もなくただぼんやりと駅までの道を歩いていた。奈緒たちの通う公立月舘高等学校は、住宅街にあるため周囲は民家が立ち並ぶ。遊んだ帰りらしき小学生の少年たちがばたばたと奈緒の横を走り抜けていく。無性に煙草を吸いたくなる。

（こればっかはやめらんないわ）

自嘲しながらも、学校が見えなくなるまでは我慢しようと思う。

（あたしが肺癌か何かで死んだら、九連は悲しんでくれるのだろうか）

ふとそんな思いが浮かんで、奈緒は苦笑する。

（あたしにそんな資格はない。ー姉さんが死ぬのを黙って見ていたあたしに）

今でも夢に見る。視界一面に広がる雪化粧。その中に、両腕を切り落とされた姉がうつ伏せで倒れている。腕を切り落とされた肩からあふれだす血が、白に赤い花を咲かせていた。

『奈緒、あなたは生きてね。大事な人と、生きて…幸せに』

臨終の言葉は、まるで呪詛のように耳から離れない。

（大事な人…か）

さっきまで話していた少年のことを考える。

九連日向。彼とは、中学のときに出逢った。最初は全く興味などなかったのだが、いつのころからか自然と言葉を交わすようになった。きっかけは確か奈緒が上級生に目をつけられ、放課後に呼び出されたことだったと思う。それを知っていたのかはたまた偶然か、暴力を振るわれそうになった奈緒の前に日向が現れたのである。目には目を、歯には歯をの精神で上級生をぶちのめすかと思いかや、日向はめちゃくちゃに叩きのめされた。

『何でやり返さないの。もしかしてただのヘタレ？』

『そんなんじゃ、って痛っ…！』
『我慢しなさい。野郎でしょ』
『すげえ言い方』
『で、そんなんじゃないって？どんななの』
『影が怒るんだよ。喧嘩は駄目だって』
奈緒は思わず日向の頬をつねった。ちょうど切り傷の上だったものだから、日向が痛みに仰け反った。
『な、何すんだよ！』
『あんたが良く分からないこと言うからでしょ。何よ、影って。てか影が喋るかっての』
『喋るよ。人間ーてか弟なんだから』
『弟？影って人名なの？』
珍しい名前もあったものだ。奈緒は呆れる。
『中学生？』
『うん。俺ら双子だから』
奈緒につねられてヒリヒリする箇所を撫でながら、日向は頷く。
『双子ねぇ…。そういやまだ見掛けてないけど、何組なの？』
頬に絆創膏を貼る奈緒の手付きは荒々しい。
『だから痛いって…！』
『我慢しろってのよ』
手当てを終えて消毒液や包帯を片付け始める奈緒を恨めしげに見ながら、日向は奈緒の問いに答える。
『今は家にいるんだ。しばらく熱が下がらなくて』
『ふぅん、体弱いの？』
『俺と違ってね』
何処か自虐的に呟く日向。
（思えば九連は影の体が虚弱なのは自分のせいだと思ってる節がある。何でだろうか）
奈緒がふとそう思った時、携帯が震えた。誰だろう、とディスプレイを見ると、山城麻理花と表示されていた。

「もしもし、奈緒？」
ほんわかした声。知らず奈緒は苦笑していた。
「どうしたの、麻理花」
「今駅前のミスドにいるの。奈緒、一緒に食べない？今安いみたいだし」
「ん～、分かった。行くわ。待ってて」
「うん。待ってる」
奈緒は携帯を閉じると、先程とは違って目的を持って歩き始めた。

## 第三話：揺らぎの片鱗

「そういえば風紀委員会は何だって？」影は２年Ｄ組において風紀委員に所属しており、今日は急遽委員会が開催され影はそれに出席していたのである。
「何か最近学校の周りに不審者が出るんだって。そのことで」
日向は不穏な単語に眉を寄せる。
「不審者？」
「そう。小学生の子が何人か声かけられたんだって。刃物で切りつけられた子もいるって」
影が不安そうに目を伏せる。華奢なせいかそうする影は酷く儚い印象を与える。
「それで、多分明日ちゃんと説明があると思うんだけど、」
影が酷く言いにくそうに口ごもる。
「まさか風紀委員が見回りするとかいう話じゃないだろうな」
「…！」
ビクッと影が肩を震わす。
「う、」
「そうなんだな」
二人の視線の先に、徳丸スーパーが見えてきた。だが日向が足を止めたので、影もそれに倣う。
「影」
「う、うん。三人一組だから、」
「駄目だ」
日向はにべもない。吐き捨てられ、影は喉を詰まらせる。
「で、でも」
「お前は精神的なものが体に影響しやすい。危ないって最初から分かってることをやらせるわけないだろうが」
「だけど、みんなが」

「みんなは関係ない。お前はお前。同じ委員会だからって負う責任まで同じにする必要ないだろ」
「兄さん、」
「他の委員だってそうだ。不審者がいるって言われてるとこを見回りさせるなんて親が聞いたら大問題だろ？」
何だって生徒が見回りなどしないといけないんだ。日向は心底そう思う。
「誰だ、そんなこと言い出したのは」
「み、御鶴城（みつるぎ）先生」
日向がよく思っていない教員の名前を言う影は声を震わせている。
「御鶴城？くそ、面倒なことを」
日向は唇を噛む。何故か日向と御鶴城はことごとく衝突している。自分のせいだよね、と影は思う。体調をしょっちゅう崩している影は、先生によっては目をつけられている。曰く、弛んでいるからだ・兄貴の背中に隠れているからだ、とか。御鶴城もその一人だ。だから日向とも衝突するのだろう。
「とにかく駄目だ。御鶴城が何と言おうと駄目からな。お前が行くくらいなら俺が行く」
強い口調で言い、日向は歩き出す。影はうん、とか細い声で応え、兄に続いた。

## 第四話：予兆

駅前のミスタードーナツは学生服の少年少女たちで混雑していた。店頭の幟に『全品１００円、今日まで！！』とあったから、それに連れたのであろうと奈緒は判断する。麻理花とはしょっちゅう寄っているが、難点が一つ。学生が寄り付きやすいからかそれとも風潮なのか店内全席禁煙なのである。まあ喫煙席があったとしても麻理花が喫煙を許さないだろうけど。

「奈緒～、こっちこっちだよ～」

二階を覗いていると、それに気づいた目の大きな少女が奈緒を呼んだ。うまい具合に窓際の二人席に座っている。

「麻理花、あんた買いすぎ…」

麻理花の前のテーブルには、トレーが三つもあった。そのすべてにドーナツが積まれ、おそらく全種類一品ずつあるだろう。麻理花は何気に大食漢であった。

「奈緒が来るって言ってくれたから奈緒の分も買ったんだよ～？遠慮しないで食べてね」

「…はいはい」

奈緒も椅子に座ると、エンゼルを手に取った。

「あとコーヒーもね。奈緒はブラックだよね」

「これはどうも」

麻理花からコーヒーを受け取り、一口口にする。

「電話したとき奈緒、どこにいたの？」

「学校から駅に向かう途中。どうして？」

「ううん、早く此処に着いたなぁと思って」

「ふぅん。…そういえば九連があんたのこと可愛いって言ってたよ」

途端に麻理花の顔が赤くなる。

「く、九連君が？」

麻理花は九連日向のことを好きなのである。そして恐らく日向は彼

女の気持ちに気付いていないだろう。麻理花に対する態度を見ていれば何となく分かる。
「そう。良かったね」
オールドドーナツを手にする。
「ほ、ホントに九連君がそう言ってくれたの？」
正確には奈緒の麻理花は可愛いでしょ？という問いにうやむやな感じで日向が頷いただけのことなのだが。
「ま、そんなようなことをね」
麻理花はいまだに顔を赤くしている。本当に素直な子だと奈緒は思う。素直過ぎてー苛々する。自分にはないものを持つ相手には憧れるか、嫉妬するか。奈緒は明らかに後者だった。
「麻理花は家に帰ったんだと思ってた。市内をぶらついてたの？」
「うん。ちょっと人と会ってたの」
「ふぅん」
それ以降、二人はしばらく食事に集中した。消化する量は明らかに麻理花が上ではあるが。
「は～、食べた食べた」
満足そうにジュースを啜る。奈緒は微かに胸焼けを感じつつ、携帯に目を遣った。
（…）
メールの欲しくない相手から連絡が来ている。メールを開くと、こんな文面が踊っていた。
【一緒にいる子、可愛いじゃない。紹介してみない？高値で買うわよ？】
（……！）
奈緒は思わず周囲を見回そうとして、止めた。麻理花に変に思われる。
「奈緒、どうかしたの？何だか顔色悪いよ…？」
「そんなことないよ。ていうかあんた食べ過ぎ。この前体重が増えたって大騒ぎしてたのに」

麻理花が再び顔を赤くする。分かりやすいなぁ、と奈緒は苦笑する。
「ちょ、ひどい、人の気にしてることを」
「ほんとに気にしてる？私にはそう見えないけど」
「もうっ、奈緒のバカっ！！」
「ごめんごめん」
奈緒は携帯を閉じた。今は麻理花との会話に集中しよう、と。

## 第五話：兄と弟

「お話されなくて宜しかったのですか？」
「あそこで闖入するのは野暮というものだろう、佳那汰？」
「…そういうもの、ですか」
佳那汰、と呼ばれた黒髪の青年が微かに苦笑する。彼に対する女性が不敵に笑う。
「しかし、どうだった？久しぶりに元恋人の妹に会って」
「変わってませんでした。美緒さんに似ていることも、相変わらず」
女性がふん、と鼻で一笑に伏す。皮肉げに眉を上げ、言う。
「ふん。自分が殺した女の名前をよく口に出来るな」
佳那汰はにっこりと子供のような無邪気な笑みを浮かべた。
「普通でしょう？」
「違いないな」
女性はあっさりと肯定する。
「生と死など僕たちにとってはどちらも同じこと」
歌うように口ずさみ、佳那汰は目を閉じる。
「素晴らしい銀世界に散らばる、あの深紅。今でも僕は覚えてる…」
「ふうん」
「遊子様にもお見せしたかったです」
女性ー芦原遊子が佳那汰の言葉に満足気に頷こうとしたとき、
「にっ、兄さんっ」
少しトーンの高い声が上がった。途端、穏やかだった佳那汰青年の表情が苛立ちに塗り変わる。冷たく他者を寄せ付けないような目で、闖入者を見遣る。
「何の用だー玲治」
闖入者の名前は碧石玲治。佳那汰の実弟。まだ幼さを残す顔立ちをした詰襟姿の少年は、兄ではなく芦原遊子を見ていた。遊子が妖艶な笑みを返すと、玲治は慌てて視線を反らした。そんな弟に、佳那

汰がつかつかと歩み寄る。兄を探していたのだろうに、兄が歩み寄ると弟はその瞳に恐怖を宿した。
「に、兄さん、」
何かを言おうとするのに、少年の口は酷く震えていた。兄から発される酷薄な気配に体がすくむ。グイッと胸倉を掴まれる。
「遊子様といるときは邪魔するなと言っていたよな？僕は」
「兄さん、苦し…」
「どうしてお前はいつもそうなんだ。どうして言うことを聞けない。僕を困らせてそんなに楽しいか」
不穏な空気に周囲がざわつく。煽る者、知らん顔で通り過ぎる者、不安げな者。反応は様々だ。
「じゃ、邪魔なんて…俺はそんなつもり、なくて、ただ、その人と会うのを止めて欲しいだけで」
「貴様に指図される覚えはない！」
佳那汰は苛立った声を上げ、玲治を突き飛ばした。
「いっ、」
尻餅をついて呻く玲治を、佳那汰は汚らわしいものを見るような目で見下ろす。
「兄さっ、あぅっ…！」

まだ言いつのろうとする玲治の右手を、佳那汰は何の躊躇もなく踏みにじった。
「やめっ、痛いっ…」
「痛いのが嫌なら黙れ。そして僕の前から消えろ」
「落ち着きな、佳那汰」
遊子の愉しげな声に、苦痛を訴えていた玲治はビクッと身を震わせた。佳那汰も夢から醒めたかのように目をぱちくりとさせ、玲治の手を踏みつけていた足を退ける。玲治の右手の甲は、赤く腫れていた。
「遊子様」

「落ち着きなよ、佳那汰。ものは使いようだろう？ん？」
邪な笑みに縁取られた遊子の白い顔に、玲治は息すら満足にできなくなる。
「邪魔なら利用すれば良い。ただそれだけではないか？」
遊子がスーツの内ポケットから、白く丸い錠剤が詰まった薬瓶を取り出すと、玲治が完全に怯えきってガタガタと震え始める。遊子が持つ錠剤がなんなのか骨身に染みて知っている、といった風に。
「こんなヤツ、‘これ’で一ころだよ」
グイッと遊子が玲治の顎を掴み上げ、口の中に一粒放り込む。絶対に噛まない、という意志がにじみ出ていたが、呆気なく遊子の手で噛み潰してしまった。途端に体から力が抜け、玲治はへたりこむ。目が霞む、うまく呼吸出来ない。
「兄さ…、助けて、」
弟が伸ばしてきた救いを求める手を、兄は取らなかった。
「にぃ、」
ガクン、と玲治の顔が沈んむ。彼が完全に意識を手放したことに、佳那汰は至極満足そうに微笑んだ。

## 第六話：第一の犠牲者

買い物を終えて家に帰り着いたのは、午後七時に近かった。
「影、風呂洗っといて」
「うん」
影が洗面所に消え、日向はテレビをつけた。ニュースを少しでも良いから観ようと思ったのだが。
「ーっ！？」
画面に映っている場所とテロップを見て、思わず息を詰めた。
「ここは、」
アナウンサーが早口で概要を告げる。
「…亡くなっていたのは、近所の団地に住む乃村正人くん七歳です。正人くんは今日一度学校から帰宅したあとで遊びに出掛けました。しかし、正人くんはこの公園に散歩に来ていた男性によって変わり果てた姿で発見されました」
首から下の男性が画面に映る。恐らく遺体の第一発見者なのだろう。
「ほんとにびっくりしました。しかも知ってる子だったから尚更ねー目を疑いましたよ。腰を抜かしながら必死で救急車を呼びました。まさか自分のまわりでこんなことが起こるなんて、未だに信じられません」
乃村正人。知っている。一度中学生に絡まれているのを助けたことがある。それ以来ひどく懐かれ、時々家に遊びに来ることもあった。その正人が、死んだ。殺された？
「嘘だろ、」
しかも正人がよく遊んでいた近所の公園で。
「！」
背後で突然ドンッと鈍い音がして、日向はハッと我に返った。
「影！」
影がダイニングの入口で踞っていた。顔面は蒼白で、息が荒い。胸

を掻き抱くような体勢。
「おい、大丈夫かっ！？影！」
「…い、さん？」
「苦しいのか？救急車呼ぶか？」
影がふるふると力なく首を横に振る。支えた体が嘘のように熱い。
「…本当？今ニュースで言ってたこと、本当？」
正人は影にも懐いていた。日向を抜いて二人で遊ぶこともあった。
「…影、」
「また、いなくなるんだね…」
ギクッ、と日向の体が強張る。
「影、」
「…みんな、いなくなるんだよね。僕の前から」
そう虚無的に呟き―影は意識を失なった。

## 第七話：強迫観念

「また明日ね～、奈緒」
「ん」
電車帰りの麻理花と駅前で別れ、奈緒は人でごった返す駅前を離れて行く。人気のない路地裏に入って、物憂げな表情でメール画面を開く。
（…遊子は確実にあの場にいた。あたしたちを見ていた）
メールの文面がひどく癪に障る。
（麻理花には絶対に手出しさせない）
姉・美緒の臨終の姿と麻理花の姿が重なって、奈緒は首を左右に振った。メールを削除しようとしたた奈緒だったが、
（…あれは、玲治？）
不意に上げた視線の先に見知った少年がいることに気づく。潰れたらしい商店の軒先に体育座りをし、ガックリと項垂れている。だが、恐らく玲治で間違いないだろうと思う。しかしこんなところで何をしているのだろう。
「…こんなとこで何してるの」
しかし玲治の反応はない。まさかこんな場所で居眠りか。
「こら、玲治！」
肩を掴んで揺さぶると、詰襟に包まれた体がビクッと震えた。
「玲治！」
玲治が緩慢な動作で顔を上げる。
「…玲治？」
何処かぼんやりし、霞がかったような瞳。だらしなく開いた口元。どちらかと言えば不安げな表情をしている玲治らしからぬ様子。嫌な予感がする。
「玲治！」
思わず玲治の頬を平手打ちする。

「！！」
玲治の目に光が戻る。呆然と己の頬を打った者の顔を見上げる。
「な…お、さん？」
「気づいた？」
奈緒は安堵の息をつき、玲治の目の前にしゃがみこんだ。
「何こんなとこで座り込んでんの」
「な、奈緒さん…どうして此処に？」
「…あたしが訊いてるんだけど」
「俺、俺は…兄さんを探していて、」
「兄さんって…佳那汰にぃのこと？」
「兄さんを…見つけて、」
ぶつぶつと呟く玲治を、奈緒は怪訝そうな顔で見る。どうも玲治の様子がおかしい、と危ぶんだところで
「あ、あああああああっ！！」
という玲治の絶叫が響き渡った。ギョッと、奈緒は横にいる少年を見る。少年は頭を抱えて絶叫していた。
「あ、あああああっ！」
「ちょっ、どうしたの！玲治、大丈夫！？」
奈緒が手を触れようとすると、バシッと叩き落とされた。更に玲治らしくない行動に、奈緒は目を白黒させる。
「玲治、」
「…ろした」
「は？」
「俺、あの子を殺した」
「玲治、あんた何言ってんの？」
「奈緒さん、どうしよう、」
荒くなる呼気。顔は嘘のように土気色。救いを求めるように、少年が奈緒に手を伸ばす。
「と、とりあえず落ち着きなさい。どういうことなの、殺したって、誰を？」

「し、知らない男の子。公園で会って、きゅ、急に苛々してきてー気付いたら頭を石で殴ってた」「…」
「俺、自分がどうやってその公園に行ったのかも覚えてなくてーすべてが怖くなって、男の子を放置して逃げた」
俺、逃げたんだ。玲治はそう繰り返し、細い体をガタガタと震わせる。
「…嘘でしょう？」
玲治が人を殺す訳がない。想像すら出来ない。「う、嘘じゃないよ。確かに、この手で…」
「…」
まさか、と思う。
以前同じ屋敷で暮らしていたとき、一度だけこういうことがあった。殺人云々ではないが、見ず知らずの他人を暴行しようとしていたーそのときも光の無い目はぼんやりと淀んでいた。普段大人しい少年の強行に、周りの人間はまるで強い何かに操られているような感じだと口さがなく言っていたが、ー本当に？
「…佳那汰にぃと何かあった？」
「…え？」
「その…、男の子を殺す前に佳那汰にぃに会わなかった？…もしくは、芦原遊子に」
「何が、言いたいの」
「…玲治、あんただって気付いてるんじゃないの？自分があいつらにとってどういう存在なのか。あんたが思ってるほど、佳那汰にぃは、」
「に、兄さんを悪く言わないでよ！」
いきなり玲治が奈緒に牙を剥いた。だが全く迫力はなく、奈緒は全く恐怖しない。平然と続ける。
「あんたが佳那汰にぃを尊敬してるのは分かってる。虐待の嵐の中であんたを守ってくれたのは、佳那汰にぃだけだったから」
「そ、そうだよ！兄さんだって丈夫じゃなかったのに、俺を守るた

めにいつだって身を挺してくれてたんだ…！兄さんがいなかったら、俺は、俺はきっと死んでた。だから、俺は兄さんに恩返しをしないといけない。兄さんの力にならなきゃ、兄さんが喜んでくれることをしなきゃ、」

「玲治、」

「…そうだよ、俺は兄さんが喜んでくれるなら何だってするんだ。兄さんが笑ってくれるなら、」

奈緒は強迫観念にも似た玲治の兄へ対する想いに一種の恐怖を覚えた。腕に鳥肌が立つ。

「人だって、殺すよ」

にやり、と玲治が笑う。奈緒が絶句しているのを横目に見て、玲治がふふっと艶やかに笑う。血色を取り戻した唇の色が、まるで血の色のようだと思った。

## 第八話：拒絶

ー殺せ。
（嫌、）
ーお前と同じ存在は二つもいらない、お前の手で“あれ”を殺せ。
（嫌だ、嫌…）
ー殺せ。殺せ。殺すんだ！
（嫌だって言ってるじゃないかっ！！）

「っ！！」
影は飛び起きた。その拍子に寝汗がパッと飛び散る。
「はっ、はっ、…はぁ、」
酷く嫌な夢を見ていた気がする。
「…、僕は、」
部屋の中は真っ暗。ということは、今は夜か。どうして自分は布団の中にいるのか。
「…そうだ、確か僕は、」
倒れたんだ。知ってる仲の良い男の子が、殺されたって聞いて。ずっと前にもあった同じことも、思い出して…。
「うっ、」
激しい吐き気に襲われ、影は身を硬くする。口元を冷たすぎる手で押さえ、堪える。
「…兄、さん」
あの時も崩れそうになった影を支えてくれた。
ー何時だって僕は兄さんに迷惑をかけてる…。やっぱり僕なんて居ないほうが良いんだ…。そんな暗い想いにとらわれたとき、部屋のドアがゆっくりと開いた。
「影、起きたのか？」
「兄さん、」

ためらいがちに部屋を覗いた日向だったが、影が気持ち悪げにしているのを見て慌てた様子で部屋に入って来た。
「影、大丈夫か。気持ち悪いのか！？」
「…大丈夫、」
「大丈夫って…。こんなに震えてるのに、」
日向が気遣わしげに伸ばした手を、
「大丈夫だってば！！」
影は払い除けた。暗い部屋の中で、日向の顔が強張る。
「影、」
「大丈夫だから、ー放っておいてよ…」
日向の傷付いた顔を見るのが嫌で、影は顔を逸らした。闇の中で時が制止した感じ。「…悪い」
努めて平静でいようとしていることが明確に感じられる口調で日向は言う。
「飯食べれそうだったら、用意だけはしとくから」
日向が部屋から出ていく。それでも影は、立てた膝にうめている顔を上げようとはしなかった。

## 第九話：玲治と梓

詩堂梓は人を探していた。
「…何処に行ったのよ、玲治」
クラスメートでもあり、恋人でもある碧石玲治を探している。今日は常に思い詰めた顔をして、放課後梓が気付いたときには既に教室にはいなかった。すぐにでも玲治を探したかったが、梓はクラス委員。運悪く放課後に会議があったため、身動きできなかったのである。会議が終わったのは六時前。今は七時半だから、梓は一時間半も走り回っていたことになる。
ーまた、お兄さんと何かあったんだ…。お兄さんと何かあるたび、玲治は周りが見えなくなる。
普段は大人しく苛つくほど他者の目を意識する玲治が、兄である碧石佳那汰のことになると我を忘れる。そして玲治は精神的に不安定で、揺らぎ易い。
「玲治？」
梓がようやく玲治らしき人物を見付けた時、彼は一人ではなかった。制服からするに、高校生だ。しかも女生徒。彼女はひどく困っているようで、項垂れた玲治の後頭部を突っ立って見下ろしている。誰だろう、と不審に思いつつも玲治のことが心配で堪らない梓は声を上げて彼らに走り寄った。
「玲治っ！！」
「！」
反応したのは女子高生の方だ。弾かれたように顔を上げ、梓を見る。気だるそうな雰囲気の人だった。
「…誰？」
ぶっきらぼうな言い方だが、不思議と嫌悪感は感じなかった。何処かで会ったことがある気がしたが…。
「あなたこそ誰ですか。…玲治に何か」

「玲治の知り合い？」
「…クラスメートです」
そう、と頷き
「あたしは蓮本奈緒ー玲治とは遠い親戚になる」
蓮本奈緒。玲治から聞いたことがあるような、ないような。
「…私は詩堂梓です」
「しどう…。珍しい名前だね」
「詩歌の詩にお堂の堂で詩堂です、ー珍しいとはよく言われます」
「・・・・玲治を探してたの？」
「はい。・・・・・今日は朝から様子がおかしかったから、心配で。玲治、どうかしたんですか」
梓の問いに、奈緒という女子高生が頬を歪めた。どうやら笑ったらしかった。何がおかしいのだろうと梓は少し苛立ちを感じた。
「・・・・あたしにも良く分からないんだよ。あたしも偶然此処に座り込んでる玲治に気付いてね。話し掛けたんだけど、どうも要領を得ないことしか言わなくてね」
「・・・・・」
梓は座り込んでいる少年に眼を落とした。梓の声にも一切反応しない。濁った眼に浮かぶ透明な液体が一滴落ちてズボンに小さな丸い染みを作った。「玲治」
ピクッと少年の肩が小さく震える。
「帰ろう」
奈緒の視線を横に感じながら、梓はしゃがみ込んだ。そっと玲治の頬に触れると、驚くほど冷たかった。本当に血が通っている人間のものだろうかと一瞬不安になる。
「玲治」
「触らないで」
「・・・・・・え？」
「俺に触らないで。・・・・汚いから」
やっと反応が返ってきたと思ったのに、玲治が発した言葉は梓の心

臓を高く跳ね上がらせた。言われていることの真意が掴めず、思わず頬にやった自分の手を汚らしいものに思ってしまった。パッと放す。
「ご、ごめん」
「・・・・違う、汚いのは梓の手じゃないんだ」
苦しげに発された声に、梓は目を細めた。
「どういうこと？」
「俺、人殺しだから、」
「っ！？」
奈緒を見ると、彼女は既に玲治から聞いていたのか、全く驚いた顔をしていなかった。目が合うと、奈緒は肩を竦めた。彼女も玲治の真意が分かっていないのか。
「どういうこと？ちゃんと説明してくれないと分からない、」
「玲治君、こんなところにいたのか」
第三者の男の声に、梓の言葉は中途で遮られた。思わずムッとして声のした方向を見ると、二十代半ばくらいの長身の男が立っていた。眼鏡の下の瞳がじっと座り込んでいる玲治を見ており、奈緒や梓のことは全く眼中にない様子だった。
「誰、あんた」
奈緒の誰何の声に、男は応えない。颯爽と三人の輪の中に突入してくると、玲治の胸倉をグイッと掴んで無理矢理彼を立たせた。玲治が苦しげに呼吸を乱す。
「ちょ、乱暴は、」
男を止めようと伸ばしかけた手をあっさり男の片手に掴まれ、
「っ！？」
気付いたときには地面に叩きつけられていた。梓は目を白黒させた。自分に何が起こったのか理解できなかった。だがこのままでは玲治が連れて行かれることだけは理解できていた。
「やめ・・・、梓に酷いことする・・・・・・な」
「何もしないさ。手を出されない限りね」

にこやかに言い、彼は玲治を引き摺るようにして歩き出す。
「あんた、遊子の関係者？」
奈緒が訊く。奈緒は男に手を出す気は一切ないようで、右側に体重をかけた格好で腕を組んでいた。男の視線が奈緒に向く。奈緒が唇の端を吊上げ、不敵な笑みを浮かべた。静かな声で言う。
「・・・・・あんた、遊子に薬を呑まされたね」
確信的な問い。男は応えない。
「遊子に伝えておいて。・・・・・麻理花に手を出したら承知しないって」
「・・・分かった。伝えておこう。蓮本奈緒」
「よろしくね」
奈緒は玲治を見る。玲治の苦痛に歪んだ目が合う。
「・・・・・・頑張るのよ」
その一言で奈緒が何を言いたいのか把握したのか、玲治が微かに笑みを浮かべて頷いた。
「奈緒さん、も」
「当然」
男に引き摺られる形で玲治が姿を消す。
「大丈夫？詩堂さん」
「す、すみません」
奈緒に引っ張られ、梓は立ち上がった。
「・・・・・蓮本さん、今の人は」
「あたしも良くは知らない。でも、あたしと玲治の知っている人間なのは間違いないと思う」
妙な言い方だな、と梓は不思議に思う。要するに深い知り合いではないと言うこと？
「どうして玲治を助けようとしなかったんですか」
梓が最も知りたいのはそれだった。何故引き摺られて行く玲治を奈緒は助けようとしなかったのか連れて行かれるのが当然というかのようにあっさりと彼と男を見送っていた。

「・・・・・・・あたしや詩堂さんじゃあ此処から玲治を動かすことが出来ないからだよ」
動かすことが出来ない。はっきりと断言されて、思わずカッとなった。
「そんなこと・・・っ！」
「出来なかったでしょう」
グッと梓は詰まる。確かに玲治が言っていることを半分も理解できていなかった。図星だった。
「それに今すぐ殺される云々じゃないようだったし。玲治はさっきの男の手でちゃんと屋敷に連れ帰られるはずだよ。・・・ずっと此処に座り込まれているより良いじゃない」
奈緒の言うことは最もで、梓は反論出来ない。
「・・・・・・これでようやくあたしも帰れる」
ぼそっと呟くと、奈緒がのろのろとした動作で歩き出す。
「あ、あのっ」
「玲治を護ってやりなよ、恋人さん」
「・・・・・・・・・・っ！！」
クラスメートとしか自己紹介しなかったのに、ばれていたらしい。思わず顔がカッと熱くなる。
「それじゃね、気をつけて帰りなよ」
手をダルそうにヒラヒラと振って、奈緒が笑う。梓は気恥ずかしさに動けず、そんな彼女の背中をしばらく見送っていた。

## 第十話：異変と依存

痛い、と思ったのはこれが初めてだった。日向ははぁ、と深い憂慮の溜息をついた。いつも楽しみにしている音楽番組がテレビから流れているが、音は全て彼の耳を素通りして部屋の中に溶けて消える。

（・・・・・俺はいつもそうだ。影を護ってやらなきゃって勝手に思い込んで、影の気持ちを全く考えようとしない。俺が、何もかも押し付けて）

それがいい加減嫌だったのだろう。だから影は日向の手を払った。最後は顔も見てくれなかった。

（風呂にでも入るかな、）

テレビを消して、湯気のこもる浴室のドアを開ける。するすると服を脱いでいき、そしていつものように“それ”に眼が行く。前身の右側の肋骨の辺りの皮膚に、もやもやとした不定形の薄墨色の痣らしきものがある。

（これは何なんだろう）

物心ついたときには既にあった、謎の痣。影にも同じような形の痣がある。場所は丁度臍の真横辺り。特に痛みがあるわけでもないので医者にかかったりはしていないが、あまり気味のいいものではない。日向は何気なく痣に触れてみる。やはり痛みはなく、シコリがあるような感覚もない。

（まあ、病気ってわけでもなさそうだから良いんだけど、）

そうやって自分を納得させて躰を洗うためにしゃがみ込んだ途端、

（っ！？）

いきなり息が詰まるほどの激痛が日向の全身を襲った。ギシッと躰全体を握りつぶされるような、奇妙な痛み。

「っ、何だっ・・・いきなり」

膝をついたまましばらく堪えていると、痛みは始まった時と同様に唐突に治まった。

「・・・・・っ、」
痛み以外は症状はないようで、日向は安堵の息をはいた。全身が汗に塗れている。
（影、）
急に嫌な予感がして、日向は急いで服を着なおして浴室を出た。何だ、この奇妙な感覚。影が危ないと誰かが囁いている気がする。
「影、・・・・・・っ！？」
影はいた。ただ、
「やぁ、良い夜だね・・・日向」
両眼が嘘のように赤かった。電気の点いていない暗い部屋の中、影の両眼だけが爛々と真っ赤に光っていた。そして彼は日向を名前で呼んだ。いつもは兄さんと呼んでいるのに。
「誰、誰だ・・・お前」
呆然と問うた日向に対し、影は余裕綽々の体で笑う。悪意のこもった影ならしそうにない不気味な笑み。
「誰だ？馬鹿じゃない。僕だよ、九連影だよ。お前の双子の弟じゃないか」
ベッドから降りると、ドア口で硬直して動けずにいる日向の前に立った。
「・・・・・俺の弟の目は赤くない」
「鈍間な亀みたいな反応だね、それ」
至極詰まらなそうに鼻で笑うと、いきなり影が日向の腹部を拳で殴った。衝撃に、思わず膝をつく日向。
「か、げ・・・？いきなり、どうし、」
「お前のせいだ」
「か、っ・・・・！！」
今度は頬を殴られた。いじめっ子から影を護るために拳を振るうことがある日向だが、影は日向が知るかぎり他者に暴力を振るったことはないはずだ。その影が両眼を赤くさせて日向に手を出した。日向は混乱する。

「影、どうした・・・俺、何かしたか？」
「何かしたか？はははははっ、寝言は寝て言えよ！！いいぜ、教えてやる！お前の存在が鎖になって影は本当の自分を出せてないんだよ、本当の自分すなわち俺様のことだけどな！！！」
はははははははははっ！と狂ったように笑う影を、日向は呆然と見上げているしかできない。突如急変した影に、理性がついていけていない。本当の自分？今両眼を赤く光らせて高笑いしている人間が影の本当？頭がパニックに陥っている。真逆、あの“痣”のせいか？真逆。あの“痣”で人格が変わるなんて馬鹿みたいなことがあって堪るか。
（けど、試してみる価値はあるっ・・・・・・！！）
激痛を堪え、日向は影のシャツの前をバッと上げた。
「手前、なにすっ、」
「影、ごめんな！！」
何故か咄嗟に謝りながら、日向は臍の横にある不定形の痣をグッと指で押した。途端に影の華奢な躰がびくんっと大きく痙攣する。

「てめっ、」
「やっぱりこれが原因か」
日向の痣と違い、影のそれは何故か真っ赤に色づいていた。ありえないと思う。痣が色を変えるなんて聞いた事もないし、想像も出来ない。
「どういうことだ、」
くたっと影の躰が日向にしな垂れかかって来る。日向は慌てて彼を支える。
「影、大丈夫か、影！！」
「う、」
小さく呻いて、影が眼を開ける。赤かった眼がいつもの鈍色の黒に戻っている。
「兄さん、」

「影」
影はいきなりボロボロと大粒の涙を零しだし、日向は大いに慌てた。
「ど、どうした影っ。どっか痛いのか！？」
「ち、違う。さっきは、ごめんなさいっ」
ヒクッと咽を鳴らす影を、日向は呆然と見返す。
「兄さんは僕を心配してくれてただけなのに、酷いこと言った。酷いことした」
「お、俺は大丈夫だって。影！」
「ずっと泣いてた、僕は酷い人間だって。兄さんに言ったこと後悔してた」
「影、」
「そしたら急にお腹のあたりが痛くなって、思わず兄さんを呼んだら、頭の中が真っ白になって意識がなくなって、」
しゃくりあげながら必死に言葉を発する影の背中を安心させるように撫でてやりながら、日向は黙って彼の言葉を聞いていた。
「う、ごめんなさいごめんなさい、」
「・・・大丈夫だから。そんなに自分を責めるんじゃない。・・・それより腹はもう大丈夫なのか？」
こくこくと頷く影。
「・・・今日はもう寝た方が良いな。ホットミルクでも飲んで寝ろ」
影は覚えていない。自分が双子の兄である日向を殴ったことを。自分が高笑いをしながら日向を敵視したことを。だが言えない。言えるわけがない。
（俺は、影を依存させすぎてた・・・）
そのことが日向の頭の中を巡る。影を心配する余り、日向は彼を甘やかしすぎた。
（今は良い。今は。でもこれから・・・もし、もし俺がいなくなったり死んだりしたら、影は）
嫌な想像が頭を過ぎり、日向は吐き気を感じた。
（影は、きっと一人では生きていけない）

そんな気がして、日向は一人背中をぞっと粟立たせた。

## 第十一話：悲しい過去

「遊子様、まだ起きていらしたのですか」
芦原遊子は後ろからかかった声に、パソコンから眼を上げた。
「あぁ、佳那汰か」
「確か会議は昨日終わられたはず。新しいお仕事ですか？」
まだ起きていたのかと意外そうに言いつつ、佳那汰は盆にコーヒーの入ったマグカップを持っていた。それを遊子に差し出す。
「悪いね」
それを受け取り、遊子は美味そうに呑んだ。
「うん、相変わらずお前のコーヒーは美味いな」
「ありがとうございます、光栄です」
恭しく頭を垂れる青年を、遊子は苦笑して見つめる。
「お前こそ起きていたのか。明日も早いのだから、早くお休みよ」
「僕はまだ眠くありません。昨日は五時間寝ましたし、明後日まで不眠しても問題ありませんよ」
「お前がそういうふうだから、私はあの子犬にきゃんきゃん騒がれるのだよ。・・・まあ丁度良い手駒というか実験体が出来て好都合ではあるのだけど」
あの子犬とは玲治のことに他ならない。
「あれはどうぞお好きにお使いください、遊子様。あれは僕に喜ばれるなら何だってする。遊子様の喜びは僕の喜び。あれも理解しているでしょう」
「相変わらずの詭弁、見事だ」
遊子は満足そうに笑っていたが、不意に眉を寄せた。
「しかし、お前はそんなにあれが嫌いか？」
「・・・・え？」「あれは相当にお前を兄として慕っているぞ。自分が苦しかろうが痛かろうが、お前のためなら我慢を強いている。私から見れば病的だが。・・・対してお前はあれを見るだけで嫌悪

に顔を歪ませている。お前にとってあれはどういう存在だ？」
佳那汰は不意の質問に、思わず声を詰まらせた。遊子の何もかもを見透かしてしまいそうな瞳がじっと自分に注がれているのが酷く落ち着かなくなってくる。
「遊子様、いきなりなんですか・・・」
「いや、ふと気になったものでね。答えを強制はしないよ」
コーヒーご馳走様、と微笑んでまたモニターを見ようとした遊子に、佳那汰は硬い口調で言った。
「・・・・・僕はあいつを憎んでいます」
遊子の顔が佳那汰に戻される。遊子の顔を真正面から見ることが何故か出来ず、佳那汰は自分の足元を見た。
「憎む？」
「あいつのせいで両親も祖父母も死んだ。・・・妹だって、あいつがいなければ死なずに済んだんです」
「どういうことか、聞いても良いのかな」
遊子はそう言ってしまったものの、佳那汰が今にも泣き出しそうな顔をしているのを見て、彼女らしくなく躊躇した。そして佳那汰も彼らしくなく感情を垂れ流しにしていた。
「・・・・・・・・明日も、私の同行よろしく頼むよ」
「はい・・・失礼します」
佳那汰は遊子に再び礼をして、彼女の部屋を辞した。遊子の視線を痛いほどに感じながら。

## 第十二話：ズレ始めた歯車

翌朝は雨だった。日向は雨の音というよりは昨晩影に殴られた腹の痛みで眼を覚ました。

（くそっ、まだ五時前じゃんか）

元々癖毛の日向の髪は、湿気のせいで暴発気味だった。頭を手で押さえつつ、部屋を出る。そっと影の部屋を覗くと、すやすやと安らかな寝息が聞こえて来た。どうやら熟睡出来ているらしいので、その点は一安心である。そっとドアを閉め、ダイニングへ行くとソファに深く腰を沈める。ぼんやりと天井を眺める日向の頭を過ぎるのは、昨日の影の赤い眼。残忍な笑顔。影に殴られる自分の姿が現実感を失った状態でリピートされる。

（本当に何だったんだ、あいつは）

本当の自分と、言っていたか。どういう意味だ。影はあれを抑圧して生きているというのか。あんな華奢な躰で。

（それに、影も痣の辺りが痛いと言っていた）

性格にはお腹。だが痣は臍の横になるので、腹が痛かろうが痣が痛んでいようが腹が痛いように感じてしまう気がする。

（俺を急に襲ったあの躰全体が軋むような痛み。あれも痣が痛かったのだろうか。・・・影の痣は真っ赤になっていた。痣の痛みとあいつには関係があるのか）

考えても分からない。日向は首を左右に振って、ソファから立ち上がった。キッチンに立って、湯を沸かす。

（親父とお袋は元気かな・・・）

遠い空の向こう、海外に出張している両親のことを思う。かれこれ一年以上も会っていない。仕事が忙しいのだとは知っていても、たまには顔を見せろよなと日向は思う。

「・・・兄さん」

「影？」

影が眠そうな眼を擦りながらリビングに現れた。
「どうした、起こしちまったか」
「ううん、何か眼が覚めたの」
影の顔に昨日の凶悪な面影はない。
「兄さん、どうしたの？」
日向が自分をじっと見ていることに気付いたらしい。影が不思議そうな顔で見返してくる。
「いや、何でもない。ーもう朝飯食うか？」
「うん、兄さんが食べるなら」
その言葉に、日向はヤカンに伸ばしかけていた手を止めた。
「兄さん？」
兄の横顔が強張ったのを、弟が気付く。
「俺が食べないって言ったら、どんなに腹がへってても食わないんだな？」
「あ、え、」
「…俺を支点にするなよ、」
「あ、あの兄さん？」
「甘えるな！！」
いきなり怒鳴られ、影はヒッと肩を竦めた。日向は肩で息をする。
「少しは自分の意思を持てよ！！」
影はいきなり怒鳴られた真意を掴めず、日向の気迫にあてられてただ立ち尽くす。台所にいる兄のもとに行こうとして、足が酷く震えているのが分かる。
「兄…さん、いきなりどうしたの、僕何かし」
「うるさい！」
「…っ！」
「……悪い」
日向は自己嫌悪に顔を歪ませ、台所から逃げるように立ち去った。
影は兄を追うことが出来ず、へなへなとその場にへたり込んだ。

## 第十二話：ズレ始めた歯車（後書き）

兄が弟君を突き放すの回。突き放す方も放される方も互いに訳が分からない状態。弟君の“中”にいるやつの狙いはこれだったのかな？（作者のくせに他人事…）

## 第十三話：制御不能

「おはよ、九連…て凄い顔ね」
蓮本奈緒の呆れたような声に、日向はふいと視線を逸らした。
「影と喧嘩でもしたの？」
ため息とともに吐き出された言葉に、日向はピクリと肩を動かした。
「あ、やっぱり」
「う、うるさい。茶化しに来たのかよ」
「別に。ただ影があんたのことチラチラ見てるからさ。何かあったのかとね」
「…放っとけよ」
「はいはい」
奈緒は至極どうでも良さそうに頷き、いきなり背後から日向の首根っこを掴む。
「は、蓮本何すっ…」
「どうせあんたが悪いんでしょ。この際謝ってしまえ」
「お前には関係ないだろ！放せよっ」
日向が腕を振り回すが、奈緒は放さない。首だけ背後に回し、立ち尽くす影を目線で誘う。影は戸惑いながらも、奈緒に従っておずおずと近寄って来る。
「あ、あの兄さん、」
影の声が聞こえた瞬間、昨日の赤い眼をした弟の姿がはっきりとフラッシュバックした。ーお前のせいで、本当の自分を出せない。
「放せって言ってるだろ、蓮本」
「え、」
日向は低い声で唸るように言うと、奈緒の足を踏みつけた。思わず日向の首根っこを離してしまう。
「い、痛いじゃない！」
「うっせえ。てめえが放さないからだろうが」

乱暴な口調に、いよいよ奈緒は奇妙に思い始めたらしい。怪訝そうな表情で日向を見詰める。
「あんた今日おかしいわよ。何かあったの」
日向は奈緒の問いを無視し、怯えたように身を硬くしている影に冷たい声を放つ。
「お前、蓮本に頼んだのか」
「な、何を…？」
「俺の様子がおかしいから理由を探れだとか、仲を取り持ってほしいだとか」
「ち、違う。僕そんな、そんなこと頼んでないっ」
「どうだかな。お前、他人の力がないと何も出来ないもんな」
止まらない。こんなこと言うつもりないのに、動き出した口は止まらない。制御できない。
「何で、何で…」
影が混乱している。大きな眼に浮かぶ涙を溢さないように必死に堪えている。
「ちょっと九連！あんた一体どうしたのよ！？」
さすがの奈緒も本気で慌てた。まさか自分の気紛れでこんなことになるとは思わなかった。この二人に何があったんだ。
「兄さん、本当に僕蓮本さんにお願いしてなんかないよっ。本当に、」
「…分かったよ。分かったから泣くな。うざいから」ー影の顔が完全に強張る。
「ちょ、九連っ！！」教室中が三人の動向に注目している。特に日向の態度や物言いに驚いているようだった。
「あんた、そんな言い方はないでしょ！」
「……」
日向は影から顔を背けると、再び席に座った。
「に、兄さん、」
「……」

「ぼ、僕やっぱり迷惑なのかな、」
やっぱり、という単語に日向が肩を震わせたが彼は影を見ない。
「…そうなんだね、やっぱり」
影は小さく呟くと、教室を飛び出した。
「影っ！！」奈緒は日向の頭を殴ると、影を追って教室を飛び出した。
「……」
奈緒に殴られた頭の痛みと、影を傷つけた心の痛みに日向はただ耐えるしか出来なかった。

## 第十三話：制御不能（後書き）

言い得ぬ不安に兄が壊れ気味。訳が分からない弟が不憫ですね…。

# 第十四話：発作

兄さんに嫌われた。どうしよう、どうして良いか分からないよ。
「っ、」
奈緒の呼ぶ声がしたが、影は彼女と顔を合わせたくなくて思わず逃げるように男子トイレに入った。奈緒は気付かなかったらしく、トイレを通過していく。
「う、うぅ」
個室に入り、堪えきれずに涙を溢した。ちょっと喧嘩みたくなっただけで、こんなに泣いてしまう。何て弱いんだろうと涙を拭いもせず自嘲する。
「…どうして、どうして、」
昨晩から何かがおかしい。日向も、自分も。
「っ、くっ」
急に胸が締め付けられる。汗がぶわっと吹き出す。心臓がどくどくと早鐘を打ち始める。気持ち悪い。「はっ、あっ」
苦しい、うまく息が吸えない。脳内で光点が明滅する。手足が氷にでも触れているかのように冷たくなる。
「…っ、」
必死になだめる。落ち着け、落ち着けと言い聞かせる。発作用の薬は鞄に入ったままだ。立て、立って教室に戻って薬を、
「あ、」
立ち上がろうとしたら、足元がふらついて上手く立てない。ずるっ、とドアにもたれて踞る。
「兄さんの、言った通り…だね」
他人の力がなければ何もできない。ーうざいから。
「は、はは」
何だか笑えて来て、影は気の抜けたように笑った。
「本当…だね」

「誰かいるのか？」
突然個室のドアがノックされた。
「お～い」
「あ、」
「具合でも悪いのか？」
誰だろう、と思いつつ影は藁にもすがる思いで必死に鍵を開けた。
「お、おい大丈夫かよっ？！」
真っ青な顔で荒い息をする影を仰天した顔で見ていたのは、生徒だった。がっちりした体格で、影など軽々と背負えそうである。
「っ、」
「と、とりあえず保健室だな。ほら、掴まれ」
頷くだけで精一杯ながらも、差し出された手を掴む。
「冷てっ…、ってんなこと言ってる場合じゃねぇか」
男子生徒は慌てて影を担ぎ上げると、トイレを飛び出した。

## 第十五話：玲治と梓（2）

梓が教室に行くと、玲治はすでに登校していた。窓際最前の自席に腰掛け、雨にけぶる外を見ている。室内はまだ彼一人で、ひどく静かだ。

「おはよう、玲治」

「梓。…おはよう」

自信なさげにぼそぼそと喋るのは玲治の悪い癖だと思う。梓は複雑な思いで玲治の愁いの浮かぶ横顔を見ていたが、左頬に貼ってある真っ白なガーゼに気付いた。

「玲治、左頬…どうしたの？」

ピクリと長い睫毛が震える。

「…何でもない」梓の脳裏に、玲治が謎の男に連れて行かれる姿が思い出される。まさか。

「梓、なにすっ、」

玲治の声を無視し、長袖シャツの袖を捲る。捲って息を呑んだ。玲治が眼を伏せる。

「どういうことよ、」

「……」

「どうして、こんなに痣が、」

恋人の細い腕には、たくさんの青痣があった。大きさや形は様々だが痛々しいことに変わりはない。中には明らかに煙草を押し付けられたような痕まであった。

「どういうことよ、」

「梓、痛い放して」

弱々しい声に梓は自分がかなりの強い力で玲治の腕を掴んでいたことを知る。

「ご、ごめんなさい」

「……」

玲治には説明する気がないらしかった。無言で袖を直す。
「玲治」
「…何」
感情ののらない乾いた口調。こちらを見ようともしない。
「お願いだからあたしを見て」
反抗もせず、玲治が梓を見る。望洋とした力のない瞳で。梓は居たたまれなくなる。いつからだろう、恋人のこんな瞳を見るのが日常茶飯事になってしまったのは。「痣、どうしたの」
「……」
玲治は答えない。自分の意思で答えないのか、それとも、答えられないように操作されているのか。
「あたしには、言いたくない？」
卑怯な訊き方だと思う。こうやって訊けば、玲治がどんな反応をするか分かっているから。案の定、玲治が梓の言葉に大いに反応する。
「そんな…こと」
震える声。震える肩。あたしもあいつらと同じことをしている。玲治の弱味につけこんで、彼の心に土足で踏み込もうとしている。それがどんなに玲治を傷つけるか分かっていて、あたしはそうしている。だって、（あたしは誓ったの。あたしの大切なものを奪った芦原の人間に復讐してやると。だから玲治に近づいた。利用するために。なのに、なのに、）
いつの間にか、梓は玲治を本当に愛していた。好きになっていた。
（あたしは、バカだ）
玲治は気付いているのだろうか。梓が自分に近づいてきた本当の理由を。
「俺は、」
今にも泣き出しそうな声に、肺腑が抉られるような錯覚を覚える。
「痛いよ…」
「っ！」
心臓が高鳴る。泣きそうになる。

「俺…、痛くて、痛くて。昨日、殴られて」
「玲治、」
「どんなに謝っても許してもらえなくて。一杯、痣が出来た」
「玲治、もう良い。ごめん、やなこと訊いた。ごめん、ごめんなさい」
梓は玲治をギュッと抱き締める。ついに泣き出した玲治の、苦しげな嗚咽が梓の心を焦がした。

# 第十六話：吉備と影

「遊子様、乃村正人の検体が到着しました」
佳那汰の言葉に、遊子は頷きながら立ち上がる。
「状態は？」
「極めて良好です」
「それは良かった」
遊子は不敵な笑みを浮かべ、歩き出した。

「んっ…」
「お、眼ぇ覚ますかな」
三年の吉備実俊は、下級生であろう男子生徒を保健室に運んだまま一時間目をサボっていた。養護教諭は教室に行けと渋面を作っていたが、吉備は梃子でも動かなかった。
「…ここ、は」
下級生が眼を開けた。蛍光灯の眩しさに眼を細め、小さく唸る。
「起きたか」
「えっ、」
何を慌てたのか、下級生はいきなり上体を起こした。そのせいか目眩がしたらしく、苦しげに息をつく。
「急に動くからだ。…取って食ったりしねぇから落ち着けよ」
下級生が顔を赤くして、小さい声ですみませんと呟く。何処かで見たような顔の気がするが…と吉備は記憶の箱をひっくり返してみる。
「あ、あの僕は、」
「あぁ、三年の教室が並んでる階のトイレでぶっ倒れてたんだよ。覚えてないのか？」
「トイレで…。あ、」
思い出したのか、下級生が小さく呟く。

「お前、二年？会ったことあるっけ？」
下級生はキョトン、と眼をしばたいて、
「は、はい。二年の九連影です、けど」
「おぉっ、九連日向の双子の弟！！」
日向にはたまに吉備が所属しているバスケ部に応援として出てもらうことがあるから、彼とは親しい。目の前の下級生は、一回だけ日向に連れられて練習試合に見学に来たことがあるはずだ。だから特に何も考えずにそう言ったのだが。
「兄さんの、お知り合いですか…」
スッと悲しげに眼を伏せ、九連影はギュッと拳を作った。何か言ってはいけないことを口にしたのかとビックリする。
「え、おれ言ったらまずいこと言ったか！？」
「ち、違います。ごめんなさい」
謝られても困ってしまう。
「よく分からんが、一時間目が終わるまで横になってれば？」
「は、はい。すみません」吉備はポリポリと坊主頭を掻く。
「あ、あの、保健室まで運んでくれたんですよね…。ありがとう、ございました」
「気にすんな。じゃ、あんま無理すんなよ」
残りの時間は屋上に避難しよう、と思いつつ吉備は保健室を後にした。影の視線を痛いほどに感じながら。

## 第十六話：吉備と影（後書き）

吉備さん初登場。今後絡ませるかは不明（えっ！？）

## 第十七話：逃避と慟哭

やっぱり九連の様子がおかしい。日向の背中を見ながら奈緒は思う。飛び出した影が授業に来ないというのに、焦ったり心配したりしている様子が一切ないのだ。普段の日向ならば授業など抜け出して影を探しに行きそうなものなのに。

（そもそも九連が影をあんなに突き放すなんて今まで見たことがない。…九連に一体何があったのか）

一瞬遊子の顔が脳裏を過るが、恐らく彼女は関係ない…筈だ。そう思いたい。「うん、もうこんな時間か。切りも良いし、終わりにしましょう」

数学の教師が出ていくと同時、奈緒は席を立つと日向に迫った。

「九連！」

「…何だよ。んなデカい声出さなくても聞こえるよ」

「あんた、何かあったでしょ」

「何かって何だよ」

いかにも日向はダルそうで、奈緒の顔を見もしない。

「…影を突き放すような何か、よ」

「……別に。今までがおかしかったんだよ。蓮本だって昨日言ってたろ、影だってもう高校生の男の子だって」

「でもあんたは俺の勝手みたいなこと言ってたじゃない、それがなんで」

「うるせえよっ…！」日向が怒鳴り、奈緒は思わず口をつぐむ。ざわっ、と室内がざわめく。

「九連」

「俺と影のことだろ！お前には関係ない、放っとけよっ！！」

弟の“中”に何かいるんだよ。赤い眼を持った、狂暴な何か。…そんなこと、言えるか。そいつに、自分のせいで影は本当の自分を出せないのだと言われたー自分が影の重荷になっているんじゃないか

と不安で仕方ないんだ。なんて、そんなこと言えるかよ！！「…そうよね、そうだった。何であたしがあんたら兄弟のことをこんなに考えないといけないのよ。そうよ、無関係だった」
奈緒は淡白な口調で確認するかのように呟く。眼を逸らしたままの日向の顔を見るのが、何故か苦しい。この気持ちは、何ー？
「余計な口出ししてごめん。もうしない」
ガタッ、と大きな音を立てて日向は席を立つ。
「春日」
「な、なに九連」
隣の席の春日という男子生徒に言付けを頼む。
「俺早退するから。何か言われたら適当に作っといて」
「え、おいっ！」
春日の呼び掛けを無視し、日向は教室を出ていく。奈緒は日向の机をガンッと蹴りつけた。

そろそろ二時間目が始まるから早く動かないと、と思いながらも影は保健室のベッドからなかなか離れられないでいた。教室に戻るのが不安だった。日向に会うのが怖かった。またウザイと拒絶されたらどうしようかと思わずにいられない。日向の冷たい視線が心に刺さる。
（あんな眼で、初めて見られた。…絶対兄さんに嫌われた）
「山城さん、もう大丈夫なの？」
「はい。寝たら大分」
聞こえてきた馴染みの声に、影は現実に引き戻された。耳を澄ませる。
「デリケートなことだし、無理はダメよ」
「はい」
影はベッドから出ると、周りを囲む淡いピンクのカーテンを引き開けた。

「山城さん」
「あ、影君」
山城麻理花が養護教諭と話している姿があった。
「そう言えば同じクラスよね。九連君も大丈夫そうなら教室に戻る？」
「あ、はい」
反射的に頷く。「じゃあ一緒に教室行こうか」
「う、うん」
麻理花に引っ張られる形で影は保健室を出た。
「まさかお隣のベッドで寝てたなんてね。全然気付かなかったよ」
「うん…僕も」
麻理花が不思議そうに影を見る。
「山城さん？」
「もしかしてまだしんどいの？何だか元気ないね」
「そ、そんなことないよ？大丈夫」
「なら、良いんだけど」
麻理花に話してみようかと思う。日向に嫌われたかも知れないと。疎まれているかもしれないと。
思い切って話してみようと決意を固めた瞬間だった。麻理花の方が先に口火を切る。
「そう言えば聞いたよ、風紀委員の見回りのこと。影君、風紀委員だよね。あれは強制参加なのかな」
「御鶴城先生はそのつもりみたいだよ…」
「あの先生本気なのかしら…。教育委員会が知ったら何て言われるか」
麻理花が、はあ…と憂いため息をつく。「九連君、影君が参加すること知ってるの？」兄の話題が出た瞬間、影はビクッと身を震わせた。だが麻理花は気付かなかったらしく、微笑んで
「九連君なら絶対止めるよね。目に浮かぶなぁ」
幸せそうな口調で呟く。

「……」
確かに昨日は止められた。絶対参加というなら俺が出る…とも言っていた。
「…影君？やっぱりまだ具合が、」
「兄さんは…止めないよ」
気付けばそんなことを口走っていた。麻理花が、え、と不思議そうな声を上げる。影を見る。
「影君？」
「…僕は、見回りに参加する。兄さんには、従わない」
「…九連君と何かあったの？影君、泣いて…？」
「え、」
呆然とした様子の麻理花に言われて初めて、影は自分が泣いていることに気付いた。
「か、影君！？」
「どうしよう、山城さん。僕、兄さんに嫌われた。拒絶…された」
影は廊下にしゃがみ込んで慟哭する。麻理花がおろおろしている。迷惑をかけていると分かっていても、溢れる涙は止まらない。日向が手の届かないところに行ってしまった。そう思うと、涙がさらに溢れてどうしようもなくなった。

## 第十七話：逃避と慟哭（後書き）

当事者ではない外野までおろおろ（笑）よほど九連兄弟は仲良しで通ってたみたいです。

# 第十八話：教師

嫌な奴に見つかった、と日向は顔をしかめる。その嫌な奴、御鶴城研吾はまるで日向が無断で早退するのが分かっていたかのように裏門に突っ立っていた。

「おう、九連日向様、お早いお帰りで」

まだ二十代半ばの御鶴城は細い眼を笑みの形に歪ませて、顔全体にニヤニヤと品のない笑みを浮かべていた。「まだ二時間目になってもないのに何してるんだ？ん？」

「…早退です」

学年主任でも担任でもないくせに煩い奴だ、と日向は苛つく。

「許可は取ったのか？」

「あんたには関係ないだろ」

「先生に対してあんたか。弟と違い口が悪い兄貴だな。あ？」

また影のことかよ、と日向は思う。御鶴城は影を見る時、いやらしい目付きなことがある。以前、影が御鶴城に言い寄られていたという噂もあったが、あれは本当だったのか。

「……」

こうなりゃあっさり無視だ、と日向が教師を無視して足を踏み出したときー

「例外はないからな」

という言葉に、思わず足を止めた。

「弟から聞いたんだろ？不審者対策の風紀委員見回りの件」

「……」

「お前俺に言いたいことあるんだろ？影にそんな危ないことさせるな、とか何とかさ」

御鶴城が自分を怒らせようとしているのを犇々と感じる。御鶴城はやけに日向と影に突っかかる。理由は知らないが。

「あんたに言うことは何もない」

「あ？」
日向はため息とともに繰り返す。
「俺からあんたに言うことは何もない、って言ったんだよ」
「ふ～ん、そう」
悔しそうな顔をするかと思いきや、御鶴城は何故かニヤリと笑った。
嫌な予感が日向を襲う。
「おい、」
「それを聞いて安心したよ。例外を作るのは色々大変だしな。助かる助かる」
「お前、影に何かするつもりじゃないだろうな」
「さてね、どうだろう」
「っ、てめえ」
思わず手を出そうとして、日向は慌てて自制する。
「どうした、弟大好き人間君」
「…っ、」こんな奴に構っていたくない。日向は殴りつけたい衝動を堪えながら、御鶴城に背を向けた。
「気ぃつけて帰れよ」
「……」
日向は一言も発っさず、裏門をくぐった。

## 第十九話：安らぎ

「影君、落ち着いた？」
影はいまだに鼻をぐずぐず言わせながらも、こくり、と頷く。麻理花が安堵の笑みを浮かべ、買ってきたばかりのホットココアを影に差し出す。
「奢り。温かいもの飲むと落ち着くから」
「あ、ありがとう山城さん」
影と麻理花は美術室にいた。美術部の麻理花は授業がない時間ならば自由に鍵の貸し借りができるらしく、静かな場所ということで影を連れて来たのである。
「…美味しい」
「でしょう」
麻理花は何も訊かず、ただそばにいてくれた。ただ黙って影が泣き止むのを待ってくれていた。そのことが影は嬉しかった。
「雨、止んだみたい」
麻理花が嬉し気に呟き、窓を一つ開けた。雨上がりの匂いが影を包む。
「あの、急に泣き出してごめんなさい」
「？どうして謝るの？」
麻理花が本当に不思議そうな顔をしているので、影もキョトンとしてしまう。
「だ、だって困ったかと…思って、」
「う～ん、私ってどんな人間に思われてるのかなぁ」
「え、」
「泣けることって、大切なことだと思うんだよね」
「山城さん…」
「泣きたいなら泣けば良いんだよ。場所も時間も理由も関係ない。泣きたいときは我慢なんてしないで、大声で喚けば良いんだよ。泣

いたら、少しでも心は軽くなるはずだから」
麻理花は何てね、と照れ臭そうに笑う。
「ちょっと恥ずかしいこと言っちゃったかな」
影は必死に首を横に振る。麻理花が笑う。
「ありがとう。影君は優しいね」
「そ、そんなこと…」
「あるある。大有りだよ」
「…」
沈黙が下りる。
「あ、あの山城さん、」
「九連君が影君を嫌ってるとは思わないよ」
「！」
「大丈夫」
「で、でもっ」
冷たい眼。拒絶の言葉。ウザイという言葉。そんななのに、嫌われていないなどとは思えない。
「だ、だってあんな冷たい眼で…、見られたことなくて、」「怖かった？」
「うん…、怖かった」
日向が全くの他人に見えた。
「どうしてあんな眼で見られるのか、全然分からなくて…」
「そうなんだ…」
影は深く俯く。
「深い理由なんてないけど、影君と九連君は何があっても大丈夫な気がする」
麻理花が自信たっぷりに言うので、影は思わず彼女をじっと見てしまう。
「女の勘、だよ」
「…すごく当たりそう」
「当たるよ」

朗らかに笑う麻理花を見ていると、影も何故か元気になるのを感じた。
「影君やっと笑った」
「あ、」
「泣くのも大事だけど、笑うのも大事、ってね」
格言を口ずさむ感じで、麻理花が言う。
「…ありがとう」
「ふふ、どういたしまして」
心が温かくなると同時に、こうやって気遣ってくれるのは自分が日向の双子の弟だからかな、と思うと影は複雑な気持ちになった。

## 第二十話：苦しみと決意

泣き疲れてしまったのか、眠りに落ちた玲治のくせのない髪を梓は指ですいた。さらりと柔らかに流れる髪。梓は微かな息をつく。
「玲治……」
寝ているときは穏やかな顔なのに、起きている彼が穏やかなのを見た記憶が最近はほとんどない。泣くか、苦しむか。何かを押し殺したような顔。
「痛いよね…」
真っ白な手の甲に浮かぶ痣。見ているだけで心が砕かれそうになる。
（…あの女の、芦原のせいだ。玲治がこんなに苦しんでるのは）
そして、
（たった一人の肉親なのに、どうしてこんなことができるの…！！）
碧石佳那汰。彼の、玲治に対する憎しみ生半可なものではない。ただその理由を梓は知らない。知りたくない…といえば嘘になるが。
梓は迷っていた。
「…さい」
「？」
玲治の声。起きたのか。
「玲治？」
「ごめんなさい」
「…！」
「…兄さん、ごめんなさい」
「玲治、」そして玲治は衝撃的なことを口にする。
「みんなを…みんなを壊して、ごめんなさい…」
「っ！？」
皆を壊した？不穏な言葉に、梓は頭が真っ白になる。（壊したって…。殺した、ということ？）
飛躍しすぎだろうか。精神を崩壊させたのか。

「……」
玲治の寝言が止む。久しぶりに見た穏やかな顔は、敢えなく苦しげに歪められてしまう。
（どうして寝ているときまでこんなに苦しまないといけないの）
このままでは、本当に玲治は壊れてしまう。
（…そんなこと、絶対させない）
唇を噛み締め、梓は決意を新たにしたのだった。

## 第二十話：苦しみと決意（後書き）

もう二十話です。全く進んでいる気がしませんね…（汗）

## 第二十一話：崩壊開始

乃村正人の死因、頭部強打による頭蓋骨陥没。
「今まで通りの方法だね。記憶の抑圧はうまくいった？」
遊子の問いに、カルテらしきものに眼を落としている佳那汰が一つ頷く。
「…はい。昨晩修正を施しました。微かに殺した際の感覚が残っている可能性もありますが、あったとしても夢の範囲で納得できる程度のものと思われます」
「ならば結構。詩堂梓…だったかな。あの女に人を殺したと訴えたときには心臓が止まるかと思ったよ」
遊子が苦笑し、佳那汰も頷いたとき、机上の電話が鳴った。
「はい、芦原」
相手が名乗ると同時に、遊子がしかめつらをした。愉快な相手ではなかったのだろう。
「お前か。何、決行する…？仕方ないな、貴様の叔父には借りがある。…言っておくがイレギュラーがあっても尻拭いはせんぞ。…分かった。貸し切りにしてやる。ああ、ではな」
遊子はふん、と鼻を鳴らして受話器を下ろした。
「遊子様？」
「例の変態教師だ。“あれ”を敢行するのだと」
佳那汰の眉も寄せられる。
「…本気だったんですか、あれ」
「あれはああいう男だ。そして必ず最後には泣きを見る」
「……」
「玲治を貸し出す。薬の投与を通常の三倍にしろ。玲治という自我を押し潰して構わん」
物々しい言葉に…、実の兄であるはずの佳那汰はひどく嬉しそうに微笑んだ。

学校を抜け出したものの、日向は嫌な予感から抜け出せずにいる。
御鶴城研吾のいやらしい笑みが頭から離れない。
「くそっ！！」
イラついて、思わずそばにあった空き缶を蹴飛ばす。時間帯のためか、人の疎らな駅前。日向はそのロータリーにあるベンチの一つに腰かけた。
（あいつは本気で影に手を出すつもりなのか）
まさか不審者対策の風紀委員見回りすらもそのために発案したのではあるまいな。
（だが）
自分から突き放した手前、影を守ろうと単純には思えない。自分がひどく勝手な人間に思えて来る。
（…俺は何をやってる）
項垂れ、日向はため息をつく。
（それに御鶴城が本当に影に手を出すって決まったわけじゃなし…）
そう思い込もうとした日向は、この何時間後かに酷く後悔することになるのだが、今は知る由もなかった。

## 第二十二話：準備

時は過ぎ、昼休憩。日向が早退してしまったと聞いてから影はずっと悄気ていた。保健室から戻る際には会うのが怖いと思っていたくせに、実際にいないと悲しくなるなんて…と影は自嘲する。身勝手だと、笑う。

（図書室にでも行こう）

そう思い、影は今図書室に向かっている。図書室は授業の教室のある一般棟ではなく、職員室や事務室、音楽室などの特別室と呼ばれる部屋のある特別棟三階にある。図書室のスライド式のドアを開けようとしたとき、いきなり背後から肩を叩かれた。ビクッと震えて振り返ると、

「み、御鶴城先生…」

御鶴城研吾が今日もニヤニヤと不気味な笑みを浮かべて立っていた。影は思わず身を引くが、腕を掴まれる。

「せ、先生痛いです」

「今日から見回りするからな、放課後必ず会議室に来いよ。ばっくれたら、分かってるよな？」

何でも良いから腕を離して欲しかった。影は必死に何度も頷く。

「必ずだ」

乱暴に腕を離し、御鶴城は去る。今日は一段と影を見る眼が本気だった。影は身震いし、放課後を思うと憂鬱になった。だが他のみんなもいるから大丈夫だ、と自分に思い込ませてしまう。日向と同じにそれを後々後悔することになるとも知らずに。

「玲治、本当に平気？」

「うん、一人で帰れるから」

気分の優れない玲治は早退することにした。心配な梓が送るという

のを辞退し、玲治は一人中学校を出た。
「……」
平日の真昼なので、周囲はまだ静かだ。玲治は住宅街をＭＰ３を聴きながら歩く。体が嘘みたいに熱を持ち、熱い。頭がぼんやりし、足元がふらつく。
「！！」
だから背後からいきなり羽交い締めにされたときも咄嗟に反応出来なかった。
「ぐっ、」
刺激臭漂う布を口に押し付けられ、玲治の意識はあっさりと闇に沈んでしまった。

## 第二十三話：届かぬ想い

家に着いてからも、日向の嫌な予感は消えない。帰途の途中に寄ったコンビニで買った昼飯も喉を通らない。

（…くそっ、何だ、このモヤモヤ感は…）

普段の影と、赤い眼をした影がちらついて離れない。テレビにも集中出来ず、日向はイライラと貧乏揺すりを繰り返す。御鶴城の意味深で不気味な笑みが脳裏を侵す。

（見回りに乗じて影に何かする気じゃねぇだろうな）そうは思うものの、余り本気で御鶴城が影に手を出すとも思ってはいない。曲がりなりにも御鶴城は教師。生徒に手を出すなどないだろう、と。

（そう思っているのに、不安は消えない。どうしてだ）

そこまで考えたとき、ズボンのポケットに入れておいた携帯電話が震えた。液晶ディスプレイを見ると、山城と表示されていた。

「山城？」

「あ、九連君？今何処にいるの？」

「家にいるけど…何？」

「聞いてよ、さっきから奈緒が九連の馬鹿ってうるさいんだよ」「…蓮本が？」

「そうなの。眼も据わってて怖いし、ねえ奈緒と喧嘩でもしたの？」

ドキッと心臓が鳴る。関係ないと言い切った。奈緒の顔すら見られなかった。泣いている、とまでは思わなかったのだが。「…別に喧嘩なんかしてないけど、」

「でも、奈緒がこんなに人のこと悪く言うなんてないんだよ？」

一体どんな罵詈雑言をつむがれているのかと日向は頬をひきつらせた。

「あと…ついでって言ったら悪いんだけどね」

「…何」

「影君のこと、なんだけど」

「！」
「言って良いのか迷ったんだけど、やっぱり言っておこうと思って」
麻理花にしては歯切れが悪く、一体何だろうと日向は怪訝に思う。
「山城ハッキリ言ってくれ」
「う、うん…あのね、影君が、兄さんに嫌われてるって言って…泣いたの」
「っ、」
あの馬鹿、と日向は苦虫を噛み潰したような気持ちになる。同時に影の泣いている顔が簡単に思い浮かんで、苦しくなる。
「…影は？」
「さっき図書室に行くって教室を出ていったよ。少しは元気出てたみたいだけど…」「…そう」
「泣いたって言っても私の前でだけどね。詮索するみたいで嫌だから、言うか言わないか迷ったの」
「……」
「それと、不審者対策の見回りの件ね。九連君は止めたでしょって訊いたら、兄さんは止めないって言われたの。…本当？」
止めた、と喉まで出掛かって、日向は口に出せなかった。
「九連君？」
「……止めないよ」
「え？」
「俺が止めようが止めまいが、影が判断すれば良いことだろ。俺がどうこう言う問題じゃない」
「自分で決めろ、みたいに言ったの？」
麻理花の口調が、言外に信じられないと言っているような気がして日向は何とも表現しようのない想いにとらわれる。
「……」
「奈緒が九連がおかしいって言ってるけど、私もそう思う。普段の九連君なら、絶対止めるはず」
「だから、影に自分の意思を持ってもらおうと思ってだな、」

「それを影君に直接言ってあげてよ！」
麻理花が珍しく声を荒げる。しかもひどく悲痛なそれを。
「山城」
「ちゃんと九連君の口で直接影君に言ってあげて！影君が納得できるように、影君が九連君に嫌われてるって思わないでいられるように、本人に言ってあげてよっ！！」
日向は呆気にとられたまま、麻理花の悲鳴じみた声を聞いていた。
「山城」
「今からでもいいから、学校に来て影君と話してあげて。周りが何を言っても、お兄さんの言葉には敵わないんだから」
麻理花が鼻を啜る音が電話越しに聞こえてくる。どうして、と思う。どうして奈緒も麻理花も他人である日向と影のためにこんなに一生懸命になるのか。なれるのか。
「……山城の気持ちは分かったから」
「九連君、」
「…俺がしたいようにするから、放っといて」
自分でも冷たい声だと思った。
「九連君っ！！」
「切るよ」
有無を言わさず、通話を終了させる。携帯をソファに放り、日向は横になる。
（…頼むから放っておいてくれ、）
日向は眼を閉じた。全てを封じ込めるかのように。

## 第二十四話：届かぬ声

目覚めたときに感じたのは、酷い寒気だった。
（俺は…どうしたんだっけ…。っ、痛）
米神がズクンッと痛んだ。玲治は数回ゆっくりと瞬きを繰り返す。
「な、何っ、これ」
少し落ち着いた後で玲治は両手両足を拘束具で固定されていることに気付く。しかも自分のベッドかと勝手に思い込んでいたが、実際はぎしぎしと軋む音のするパイプベッドである。布団はなく、板に直に寝かせられている。必死に手足を引っ張っても、拘束具は外れそうにない。
「起きたか」
「っ！！」
聞こえきた女の声に、玲治は身をすくませた。嫌な汗がぶわっと全身の汗腺から吹き出す感覚に襲われる。コッ、コッ、コッというヒールの音が近づいて来る度に、玲治の心臓が悲鳴を上げる。
「だ、嫌だっ…」
拘束具から逃れようとするほど、白い手首に小さな擦過傷が出来て痛い。
「気分はどうだ」
ついに女ー芦原遊子が枕元に来る。玲治は顔を背けるが、彼女に顎を掴まれてあっさり眼を合わせる羽目になる。
「相変わらず怯えた眼をしているね。いい加減慣れたらどうだい」
遊子の背後に、幸せそうに微笑む兄の姿を認めて玲治は眼に涙を浮かべた。
「兄さん助けて、助けてよっ」
だが、兄・佳那汰からの返事はない。遊子が玲治の口を手のひらで塞ぐ。
「っ、ふぐっ…！」

「少しばかり仕事が入ってね。薬、入れさせてもらうよ」
遊子の顔が徐々に近づいて来る。玲治が暴れるも、遊子に傷一つつけることすら出来ない。
（助けて、…梓助けてっ…！！）
不甲斐ない自分を呪いながら、玲治は最愛の人の名を心の中で叫ぶ。
遊子の唇が玲治の唇に触れ、遊子が噛み潰して液状になった薬が彼の口内に注入される。敢えなくごくりと飲み込んでしまう。
「…っ！！」
頭がぐらりと揺れる感覚に、更に汗が吹き出す。
「あっ、…っ」
意識がどろりとした闇に覆われるイメージ。自分が自分でなくなる。堕ちていく。闇の中へ。
「…ぃ、さん」
意識が完全に消える直前、もう一度兄を呼ぶ。やはり返事は返ることなく、玲治の意識は完全に途切れた。

## 第二十五話：揺れる女心

電話を終えた麻理花は悲しげに項垂れていた。
（やっぱり私じゃだめなんだ。…そうだよね、そんなに深い仲っていうわけでもないし）
そう自分を納得させようとしても、無理だった。どうにかしたい、という想いが消えない。
「影君」
昼休憩終了五分前に影が教室に戻って来たが、あまり顔色が良くない。まだ具合が悪いのではなかろうか。奈緒を見遣れば、突っ伏してふて寝をしている。今から授業だというのに。
「影君」
影の席に歩み寄ると、影は不安気な顔を上げた。
「あ、山城さん…」
「顔色悪いよ？大丈夫？」
「…うん」
「九連君のこと、考えてるの？」
ふるふる、と影は首を横に振る。
「…そう」
影が俯いてしまい、麻理花はおとなしく自席に戻った。
「奈緒。起きてたの」
奈緒が不機嫌そうに眉根を寄せて天井を睨んでいるのだった。
「…気に入らない！」
いきなり喚いたかと思うと、奈緒は唖然としている麻理花の前で帰り支度を始めたのである。
「な、奈緒？」
「あの馬鹿野郎に説教してくる！！」
「は、はあっ！？」「それじゃ、また！」
麻理花に挨拶をすると、奈緒は教室を出た。

「…いきなりどうしたんだろう、」
ちらり、と影を見遣れば、小柄な少年は何か他のことを考えているらしく奈緒の奇行には一切の注意を払ってはいなかった。

「！」
玲治に呼ばれたような気がして、梓は半紙から注意を逸らしてしまった。
「あ、」
筆先が変な震え方をしてしまい、余白に墨が一滴垂れてしまった。
「詩堂さんにしては珍しいミスね」
「…先生、」
書道の教師が落ち着いて、というように梓の肩をポンポンと叩く。
「何か聞こえたような気がして…。すみません」
「気にしない気にしない。さ、次」
「…はい」
空耳だったのだろうか、と梓は新しい半紙を用意しながら思う。
（…気のせいなら良い。でも、もし本当に玲治に危険が迫ってるなら…）
どうしよう、と梓は筆を握るのを躊躇していた。一度集中力を削がれ、且つ玲治のことが気になっている今良い字を書ける気が全くしない。
「詩堂さん？」
なかなか書き始めない梓に、教師が声をかける。
「どうしたの？」
「いえ、」
あと数分で1日の授業は終わる。終わったらすぐ学校を出るんだ。
梓は固くそう誓い、筆を手に取った。

## 第二十六話：日向と奈緒

何度も執拗に鳴るチャイムの音で、日向は眼を覚ました。
（ん、俺いつの間にか寝てたんだな…）
それにしても絶え間なく続くチャイムの音に、日向は苛ついてくる。
「だあぁっ、うっさいな誰だよ！」
何も考えずに玄関に行き、開錠する。
「どちらさ…ま」
そこには鬼のように憤怒の表情をした、くわえ煙草の女子高生がいた。蓮本奈緒、その人である。
「は、蓮本」
色んな意味で吃驚する日向である。
「こんにちは、暫しその面貸していただける？」
「あ、おいっ」
家主の返事も聞かず、奈緒はずかずかと家に上がり込む。
「な、何のようだよ！てか学校は！？」
どかっとソファに座った奈緒は、じろりと日向を睨み上げる。
「二時間目からふけたあんたに言われたくないな」
最もな言い分に、日向はピクッと頬を引きつらせる。奈緒は携帯灰皿に煙草の長くなった灰を落として、
「命令。学校に行って影と話しな。で、見回りは止めるよう言いな。影、危ないと思うよ」
素っ気ない口調で言う台詞ではないな、と日向はため息をつく。
「危ないって何が。不審者に刺されるとでも？」
「気づいてないふりか？御鶴城だよ、御鶴城」
「……」
「あいつは影を狙ってる。多分、あんたも想像している理由でね」
「……」
「あいつは今日必ず影を襲うはずだよ。あんたっていう邪魔者もい

ないわけだし。しかも邪魔者とターゲットは喧嘩中。あいつにとって最高の状態」
日向は拳を握り締めるが、動きそうな気配はない。
「…こうまで言っても動かないのか。昨日までのあんたは一体何処に行ったんだろうね」
「…っ、」
脳裏を過る赤い眼をした影。振り上げられた拳。泣いている影。
（俺は、影の重荷になってる。そう思ってるだけなのに、）
「昨日、影と何かあったの？そんな顔してる」
奈緒が鋭く指摘してくる。言うべきか言わざるべきか。日向の心は揺れた。真摯な瞳から眼を逸らせない。
「九連」
そう呼ばれた瞬間、日向は昨晩の出来事を奈緒に話し始めた。

「…マジで？」
話を聞き終えた奈緒は、あんぐりと口を開けた。二本目の煙草は既に灰になっている。
「やっぱ信じられないよな…」
日向が自嘲気味に笑って眼を伏せた。
「信じがたいけど、九連がそんな嘘つく理由ないしねぇ」
「え、」
「てかそんな嘘思い付けるとは思えないし」
「……うるせぇ」
奈緒は苦笑し、すぐ真顔に戻る。赤い眼か、と小さく呟く。
「で、あんたはその赤い眼をした影に、お前のせいで本当の自分を出せないとか言われたのね？」
「…あぁ」
「その言葉が気になって、突き放している、と」

「突き放してるっていうか、俺が影の重荷になってるかも…とか思い出したら、いちいち影のこと口に出すのが憚られて、」
「ふぅん、あんたは赤い眼の言うこと、信じたんだ。訳の分からない存在を」
「し、仕方ないだろ。影の顔してるんだから」
拗ねたように唇を尖らせる日向を、奈緒は呆れたと言わんばかりの眼で見ている。三本目の煙草に火を点け、うまそうに一服する。
「ま、その赤い眼だの、痣？痣だとかは取り敢えず後回し。今はあんたが思ってることを影に伝えることが大事」
「俺が…思ってること」
「あたしの主観だけど、影はあんたを重荷だなんて思ってないと思うよ。…ま、所詮は憶測だけどさ」
「……」
「あんたが影を大事に思うように、あっちだって九連を慕ってると思うよ。自分の半身なんだから、もっと大事にしてやったら？」
奈緒がこんなにも長々と言葉を重ねるのを、日向は殆んど初めて見た。しかも日向と影のことで。
「何よ、何が可笑しいのよ九連」
「いや。…蓮本って掴めないなって」
「はぁ？」
眉を寄せる奈緒に、気にするなと言い日向は立ち上がる。
「影と話してみるよ」
「そ。あたしも行こうか？」
「一人で大丈夫」
日向の返事に奈緒は微笑んだ。

# 第二十七話：危機（前書き）

影やばいよ、の巻。

## 第二十七話：危機

「御鶴城先生、お客様ですよ」
年輩の教師に呼ばれ、御鶴城は気だるげに書類仕事をしていた顔を上げる。
「客？」
「碧石玲治君、という男の子ですけど」
聞いた瞬間、御鶴城は嬉々として椅子から立ち上がっていた。

こいつ本当に使えるのかと、白すぎる相手の顔を見ながら御鶴城は危ぶむ。
とろん、とした夢見る様な目付き。華奢な体に、時折苦しそうな息遣い。あまり頑丈そうには見えない。
「俺の希望、理解したか？玲治」
こくん、と頷く玲治。
「場所は会議室。邪魔が入らないようにしてくれ。万が一九連日向っつう奴が来たら、何があっても足止めしろ」
また頷く玲治。その眼に光はない。
「じゃ、行くか」
御鶴城は立ち上がる。己の欲望を満たすために。

その放送が流れたとき、影のクラスでは英語の授業が行われていた。
いきなり放送時に流れるピンポンパンという気の抜けた音が響き、
「二年生の九連影君、ご家族のかたから緊急のお電話です。至急事務室まで」
「僕？」
教師が

「九連、行ってきなさい」
と許可を与えたので、影はは、はいと返事をして教室を出た。

（…家族って誰だろ。まさか兄さん…かな）
違うだろうと思いつつ、そうかも知れないと思う。両親は海外だし、九連兄弟に学校にまで連絡をするような親戚付き合いもない。まさか海外の両親に何かあったのだろうか。
「すみません、放送で呼ばれた……え？」
事務室のドアを開ければ、そこには人っ子一人いない空間が広がっていた。全員出払っているのか、と思ったがそんなこと滅多にないだろうと思い直す。
「あ、あの誰か」
「人なら此処にいるよ」
「っ！？」
背後から伸びてきた白くひやりと冷たい手に影は捕らえられた。手首を拘束される。
「な、何っ」
「君には何の恨みもないけど、悪く思わないでね…これも仕事なんだ」
「あ、」
細い腕から想像もできない力で、影は引き摺られて行く。事務室から、隣の会議室へと。
「君は無防備過ぎるよ。自分が狙われてること、気付けなかった？」
「な、何言って…」
「着いた。じゃあね」
開け放たれたドアの向こうに突飛ばされ、影は会議室に倒れ込んだ。訳が分からず眼を白黒させる影の前で、自分と同い年くらいの少年がドアを閉める。見たことのない人だ、と思いながらも立ち上がろうとしたとき、背後から声がした。
「…やっとこの時が来たな、九連影」

「！！」
ビクッと震え、影は声の方を見ることを恐れた。見ずとも分かる。
「まさかこんなにうまく行くとわな。久しぶりに密室で二人きりになれて嬉しいよ」
「っ、」
過去の苦しかった記憶がその言葉に刺激され、影は身を固くする。
「あの時、泣きわめきながら兄貴の名前を呼んでたな。今日も呼ぶのか？」
「……っ、」
ドアノブに咄嗟に手をかけるが、何故かノブは回らない。鍵など掛かっていないのに、ぴくりとも動かない。影は混乱する。
「開いて、開いてよっ」
もうあんな思いはしたくない。必死にノブを回そうとするのに、動かない。
「無駄だよ。お前をここに連れて来た奴が封印してるから。此処には誰も入れない」
ゾッと寒気を感じて振り返れば、細い眼を不気味に笑ませた教師が間近に立っていた。
「…っ、やだっ」
怯える影の手首を掴む。生ぬるい息が顔にかかり、影は嫌悪感に顔を逸らす。
「良いね、そんな顔もそそる」
「…助けて、兄さん」
「だから無駄だよ」
御鶴城の声が影の中で無情に響いた。

## 第二十八話：危機（2）

自宅を飛び出した日向は、急いで自転車に跨がった。嫌な予感は徐々に加速する。赤い眼がちらつくが、無視してペダルを漕ぐ足に神経を集中させる。

（…影、待ってろよ！）

「兄さん…？」

日向の声がした気がして、影は御鶴城から思わず注意を逸らす。それが御鶴城は更に気に食わなかったらしい。ちっ、と舌打ちをして影を壁に押し付ける。

「っ、せんせっ…」

今回ばかりは影は必死に抵抗していた。腕を突っ張り、御鶴城の顔を一定距離以上近づけさせない。しかし御鶴城が本気を出せばあっさり組み敷かれてしまうのは分かっていた。影の必死な抵抗を嘲笑っているだけなのだ。誰かが助けに来てくれるまで、御鶴城が本気を出さなければ良いと影は願った。

「先生、止めてくださいっ…！」

「何だよ、前はあんなに気持ち良さそうにしてたじゃないか」

「し、してませんっ。あれは先生がむ、無理矢理」

「無理矢理…か。それにしては良さそうにしてたが」

影は必死に否定する。

「してな…っあ」

御鶴城の片手が影の唇に触れる。

「嫌だっ！！」

影はありったけの力を込めて、御鶴城を押し退けた。

「っと、」

体勢を崩した御鶴城の腕から逃れ、影はまたノブにすがった。

「おねがっ、お願いだから開けてっ、開けてっ…」
「無駄だって。学習しない奴だな」
「痛いっ…！」
御鶴城に髪を加減なく引っ張られ、影は叫んだ。
「ぎゃあぎゃあうるさいなぁ」
呆れ声で呟き、御鶴城はズボンのポケットからキラリと光るナイフを取り出した。ひっ、と影が悲鳴を上げる。
「髪を引っ張られることより痛いこと、してやろうか？」
陶酔者の笑みに、全身が凍る。身動ぎ一つ出来ない。
「兄さん…」
力が抜けて、その場に尻餅を着く。御鶴城が彼の首筋に刃先を突き付け、いたぶるように影が震える様を眺める。
「…っ」
とうとう泣き出してしまう。怖い。
「痛いのが嫌なら黙って俺の言うことを、」
「御鶴城先生」
「なんだ」
ドアの外から、影を拉致した少年の声がする。「自転車に乗った男子生徒が近づいています。恐らく九連日向ではないかと。校門に自転車を置きました。特別棟に近づいてきます」
抑揚のない機械のような声だ。影は思わず兄を呼ぶ。
「兄さんっ…」
「ちっ、お早いお着きだな」
苛立たしげに呟き、御鶴城は少年に指示を出す。
「俺が行為を済ませるまで、お相手してやれ。ただの人間だから、適当になぶっておけば良いからな。殺すなよ」
「了解」
会議室の前から消える気配。影は涙の浮いた眼で御鶴城を睨む。
「に、兄さんに何する気ですか？」
「ふん。邪魔できないように適当に痛め付けるだけだ」

「そんなこと…あっ」
油断した。影はあっさり御鶴城に押し倒される。
「やっ」
「さぁ、お楽しみの始まりだ」
影の絶叫が会議室に響き渡った。

## 第二十九話：日向ｖｓ．玲治（前書き）

バトルってほどではないです（笑）

## 第二十九話：日向ｖｓ．玲治

肩で息をしながら、日向は自分の前に現れた見知らぬ少年を怪訝そうに眺める。少年は観察するかのようにじっと日向を見ている。
「誰、お前」
相手が動きそうにないので、日向から誰何の声を投げる。しかし少年は応えず、瞬き一つしない。
「用がないなら俺はいくぞ。急いでるんだ」
少年のすぐ横をすり抜けた瞬間、
「っ！？」
右腕を捻り上げられ、日向は膝をついた。
「いっ…！何すっ…」
「九連日向だな」
「誰だ、お前っ」
「訊いているのはこちらだ」
腕を掴む力が倍加し、日向は呻く。日向は顔を痛みにしかめながら、少年の顔を見る。ぼんやりとした覇気のない、何を考えているか掴めない眼。顔色は悪く、いつ倒れてもおかしくはなさそうなのに日向を押さえつける力は強かった。
「お…れが九連日向だ。何で俺の名前を知ってるんだよ…」
少し力が弱まる。
「お前が九連日向。なら尚更ここは通せないな…」
「な…んでっ…」
「絶対に通すな、と言われているから。だから、通さない…」
御鶴城の関係者か、と日向が推測する。
「お前、御鶴城の仲間か？」
「仲間…ではないな」
みしっ、という骨の軋む音がしたが、そんなことよりも、
「影は何処だっ！！」

恐らくは御鶴城と一緒にいるであろう影が心配でいてもたっても居られない。少年が喉の奥で陰鬱に笑う。嫌な感覚に襲われる。
「九連影なら、御鶴城先生とお楽しみ中だよ」
「っ…！！」怒りで頭が白くなる。手を振り払おうとするのを、少年が静かな口調で止める。
「無理に動かないほうが良い。腕…折れるよ」
「影が危ないのに…、何もしないでいられるかよっ…！」

「馬鹿な奴…」
ポツリ、と少年が言った瞬間、日向の左腕に言葉で表現できないほどの激痛が走った。
「……っ！？」
あまりの痛みに涙と鼻水がぶわっと溢れた。
「だから言ったろ、折れるって」
「っう……」
脂汗がわき出る。「お前を通すわけにはいかないんだ」
「…んでだよ。俺や影がお前に何かしたかよ」
痛みを堪えながら日向は問い質す。腕が折れたら話すのも困難な筈だが、日向は苦しげながらも言葉を紡いでいく。少年が眼を細める。
「言われたことを成し遂げたら、兄さんが喜ぶからだよ」
「…は？」
「正直君ら兄弟には毛ほども興味はないよーこれは兄さんのためだから」
兄さんって誰だよ、と心中で毒づく。どうせろくな兄貴ではないだろうと思う。「意味…分かんねぇ…」
日向が吐き捨てると、少年が首元に腕を巻き付けてきた。ぐっと圧迫され、日向は苦しさに喘いだ。
「……っ、はな…せ」
「君と喋るのも飽きた。…というより不愉快だから眠っててくれる？」

気管を絞め落とす気だ、と日向は悟る。気を失う訳にはいかない。だが少年を振り払う力は出ず、迫り来る暗闇に身を固くするしかできないでいる。

（くそっ、影を助けなきゃいけないのに…）

自分の力のなさに、日向はどうしようもない苛立ちに襲われる。回された腕に力が入り、気管に更なる負荷がかかる。

「ぐっ…」

「御鶴城先生の用事が済むまで寝てれば良いよ」

少年の冷たい声を聞くと同時に、日向の意識は途切れた。

## 第三十話：嫌な予感

「やだ、嫌だ…助けて、兄さん…」
影はあちらこちらにナイフで傷を付けられていた。シャツの前ははだけ、御鶴城の不躾な視線に怯えて身を固くしている。
「やっぱお前男にしとくのは勿体無いよな。さすが俺が見込んだだけのことはあるよ」
ナイフについた影の血を舐めながら、御鶴城が倒錯者の笑みを浮かべている。
「兄さんっ…」
「兄さん兄さんって煩い奴だな！」
いきなり激昂した御鶴城に頬を叩かれる。あまりの恐怖と痛みに、影は泣き出す。途端に御鶴城が喜色満面になる。影の涙を指で拭い、怯える影の胸に触れる。
「やっ…」
手を振り払うと、御鶴城が愉快げに笑う。
「いつまでそうやって我を張るつもりだ？兄貴は助けに来ないぞ」
「く、来る。兄さんは絶対に来てくれるっ！」
そう信じでもしないと、今にも失神してしまいそうだった。
「ただの人間が玲治に敵う訳がないんだよ」
御鶴城の手が、影のズボンのベルトに伸びる。
「やっ、先生止めてっ！」
懇願も虚しく、ベルトを抜き取られ前を開けられる。体がすくむ。
「ひっ、」
「気持ちいいんだろ？前みたいによがってみろよ」
影は必死に首を左右に振る。
「その強がりがいつまで持つかな」
「う…んっ」
上半身を御鶴城の手が撫で、影は嫌悪感に吐き気がした。

（…兄さん、助けて。助けて…）
影は勿論、御鶴城も気付いていなかった。影の眼が徐々に赤くなりつつあることに。

日向には一人で大丈夫だとは言われたものの、奈緒はどうしようもない不安に襲われていた。だから一度は自宅に戻ったものの、再び学校へ向かっている。
（何かとんでもないことが起きている）
そんな気がして仕方がない。奈緒は電車の車窓から顔を背け、車内に視線を遣った。
「あら」
見知った顔を見つける。
「詩堂さん…だったかしら？」
暗い表情で俯いていた女子中学生が奈緒の呼び掛けに顔を上げる。
「は、蓮本さん」
「あなたもこの線を使ってるのね」
世間話を始めた奈緒だが、いきなり梓が立ち上がったので驚いて少し仰け反る。他の乗客が何人か反応する。
「な、何」
「玲治を知りませんか！？」
声がでかい、と奈緒は吐き捨て、
「知らない。どうしたの？」
「実は…玲治、今日は早退したんですけど、連絡とれなくて。携帯も電源が切れてて…私嫌な予感がして。あちこち玲治が行きそうなところ探したけど、見つからなくて」
段々に涙声になる梓。奈緒は黙って聞いていたが、嫌な予感の正体に思い当たって顔を強張らせる。
「蓮本さん？」
「玲治君がいそうな場所、一つ知ってる」
「ほ、本当ですか！？」

梓は眼を輝かせるが、奈緒は顔の強張りを取らない。梓がそんな奈緒を見て不安に襲われる。

「蓮本さん…？」

「とにかく、ついてきて。次の駅で降りるから」

梓ははい、と頷いた。

## 第三十一話：赤い眼と壊れかけの心

意識を失って崩折れている九連日向を、碧石玲治は無感動な眼で見下ろしていた。
「さて、御鶴城先生のほうはうまく行ってるかな」
そう呟く玲治の耳に、２つの足音が響いていた。

「触るなよ、気色悪りぃな。変態親父」
御鶴城の、影の胸を触ろうとした手がピタリと停止する。
「あ？」
涙の残る顔を俯けている少年の発っした言葉に、御鶴城は顔をしかめた。ぐっ、と影の冷たい手に手首を掴まれる。
「へし折ってやろうか、あ？」
御鶴城は見た。影の両眼が血のように真っ赤にそまっているのを。
「誰だ、…お前」
思わず呟いた御鶴城に、影が愉快気に唇を吊り上げる。
「お前もあいつみたいなことを言う」
「あいつ？」
「九連日向、俺の兄貴だよ！！」
「……」
「昨日、俺を見てお前は誰だ、だとよ。可笑しくて仕方がなかったよ！見たら分かるだろ、俺が誰かなんてさ！！九連影に決まってるだろ！！！」
きゃはは、と一人狂ったように笑う影を、御鶴城はぽかんと呆けた顔で見つめていた。
「何だ、その間抜け面。そんなに衝撃的な出会いだったか？」
御鶴城の手を放し、影は立ち上がって衣服の乱れを直しながら腕や頬に走る切り傷を確認していく。

「さっさと俺に切り替わっとけば傷は少なくて済んだのに。バカな野郎だ」
小さくひとりごち、影は御鶴城を上目遣いで睨み付ける。
「さてオッサン。大人しくしてたらいい気になってくれやがったな。覚悟、出来てる？」
「え、」
「じゃ、さいなら」
影がパチン、と高らかに指を鳴らした。

玲治の足元に踞る人物に気付き、奈緒は肝が冷える思いだった。「九連っ！？」
日向は意識を失ってはいるようだが、息はしていた。取り敢えずはそれにホッとする。
「玲治、九連に何をしたの」
「……」
玲治は答えず、立ちすくんで一人の少女を見つめていた。少女も眼を見開いたままで立ちすくんでいる。
「玲治…」
「あ…ず、っ」
少女の名前を云いかけた途端、玲治は頭痛に襲われる。彼に近寄ろうとした少女ー梓だが、奈緒の鋭い声に立ち止まる。
「梓さん、駄目！」
「え、」
玲治が梓に飛びかかり、彼女を地面に押し倒すと首に手をかけた。
「れ…いじっ！？」
「玲治、止めなさいっ！」
奈緒が後ろから玲治を羽交い締めにしようとするが、振り払われて日向の横に尻餅を着く。
「いっ、」

「蓮本…さん、」
ぎりぎり、と不穏な音が首から響く。視界が霞んで来る。
「っあ、」
霞む視界の中、自分の首を絞めてくる玲治が泣いているように見えて梓は胸に痛みを覚えた。
「お前が、お前がいるから。俺は…」
「っ、」
ぽたっ、と玲治の瞳から落ちた雫が梓の頬に落ちる。
「良いよ」
「……」
「れ…いじが私を殺して自由になれる…なら、」
「…さ、」
「殺して…良いよ」
玲治の光のない眼に明らかな動揺が走る。手から力が抜ける。
「玲治が…笑えるなら。玲治が嬉しいなら…、私もうれ…しいから」
「あ、」
玲治が梓の首から手を放す。
「お…れは、何を」
梓は苦しい息の下で、どうにか微笑む。
「よか…った、玲治にもど…ったんだ、ね…」
「梓…、俺は梓を、殺そう…と」
震える体。頭の中がごちゃごちゃになって何も考えられない。俺は何をしていた？確か学校を早退して、その途中で捕まって…、
玲治は情報の処理が追い付かず、加えて恋人である梓を手にかけようとした事実に耐えきれず、悲痛な叫び声を上げた。

## 第三十二話：奈緒と赤い眼の影

「影！！……っ！？」
会議室に勢いよく飛び込んだ奈緒だったが、目の前に広がる光景に愕然とした。室内にいた影が、赤い眼を奈緒に向ける。
「あ、蓮本奈緒だ」
影の姿をした人間に呼び捨てにされることに、果てしない違和感を覚える。そして、
「御鶴城…あんたがやったの？」
御鶴城は、いや御鶴城研吾だったものは、両腕をもぎ取られ、自分の血で濡れた床に倒れていた。背中の真ん中にぽっかりと開いた大きな穴から視線を逸らせない。
「だって気色悪りぃからさ。天誅だよ、天誅」
軽い口調で言う影は、忌々しそうにため息をはいた。奈緒を見たまま、
「俺、御鶴城に強姦されかけたんだぜ？男だってのによ」
「強姦……」
御鶴城はそこまでしようとしていたのか。奈緒は唖然とする。
「だから殺してやったんだよ。俺を怒らせたらどうなるか知らしめるためになあ」
ケラケラ、と陽気に笑う。何から何まで影とは正反対な性格のようである。奈緒は何とか平静な声で影に問う。
「…それで、影は今何処にいるの？」
「あの日向を呼ぶしかできない弱虫の影君か？あいつなら俺ン中でぷるぷる震えながら日向を待ってるぜ。ーしかし意外だな」
急に影がまじまじと自分を見るので、奈緒は何よ、と眉を寄せる。
「いや、蓮本奈緒。あんたって他人に興味ない人間だろ？日向は別みたいだけど」
「なっ…」

「それが影のこと気にしてくれてるなんてな。あ、そうか影に何かあったら日向が悲しむからか。そうか、そういうことか」
「な、何勝手に他人を分析してんの！」
「焦ってる。図星か」
「……っ」
ムカつく、と奈緒は鼻の頭に皺を寄せる。
「あたしのことはどうだっていいのよ。…御鶴城はどうするんだ」
「そうだな」
影はシューズを履いた足でどうでも良さそうに死者の頭を小突く。
「あんたねぇ…」
「死者を冒涜するな…とでも言いたいのか？」
「別に…」
「まぁ、食ってもいいんだが胃もたれしそうだし」
しれっと発っされた言葉に、奈緒はギョッと身を引く。
「なんてね」
奈緒の動揺を鼻で笑う。
「あんたねぇっ…！」
ひゃはははっ！と影は笑う。
「あんた、俺が思ってた奴とは違うみたいだ。面白いな」
「……」
「そういや日向はどうしたんだ？あと俺をここに閉じ込めた奴は？」
「九連は左腕を折られてた。玲治は昏倒してる」
言葉少なに語る奈緒を影は不思議げに見遣る。
「術者が意識を失ってるのに誰も来ない…か。まだ術の効果は切れてないらしい。なあ」
「…何よ」
「もしかして携帯、不通じゃなかったか？」
「…なんで分かるのよ」
「じゃあ日向は外に転がしてるんだな？」
「携帯は通じないし、校外に出ようと思っても見えない壁みたいな

のがあって出れないんだもの…」
「ふぅん、よし俺たちはここからおさらばするぞ」
「御鶴城は！？」
「放置放置。処理は大変だし、第一俺たちが死体と一緒にいたって知られたら面倒だろ」
「そ、それは」
「誰もいないうちにずらかれば分かりゃあしないよ。行くぞ」影はさっさと立ち去ってしまう。奈緒は躊躇はしたものの、結局は影に従った。

## 第三十三話：遊子と梓

奈緒が校舎内に突入したあと、梓は気絶している玲治と日向を昇降口まで運んでしゃがみこんでいた。玲治に絞められた首がまだヒリヒリと痛みを訴えてくる。それでも梓は玲治を嫌いになったり見損なったりすることができない。冷たい手を握り、奈緒が戻るのをただ待っている。だが、

「結局こうなったかあ」

という女の楽し気な声に静かな時間はあっさり終わりを迎えた。

「芦原、遊子…っ！」

艶のある黒髪を腰半ばまで伸ばした、黒いスーツ姿の女が、ん？と小首を傾げる。

「あたしを知ってるの？詩堂梓さん」

遊子は愉快げに梓を見下ろしている。

「……」

「そっちこそ、と言いたい顔ね。種明かしをしてあげる。玲治に聞いたのよ」

「！？」

玲治が遊子に私のことを？梓には信じられなかった。それが表情に出ていたのか、

「正確に言えば、…玲治の脳に、ね」

遊子が告げる。

「脳…に？」

「玲治は少し暗示にかかりやすい体質でね。朝晩決まった時間に検査するの」

「……」

頭が痛い。遊子の言葉を聞いてはいけない。何かが警鐘を鳴らすのに、聞きたがっている自分もいる。

「そう。何か洗脳されていないか、暗示にかかっていないか。玲治

が見て聞いて感じたこと…あたしたちはそれら全てを共有することができるのよ」
「…っ！！」
梓は愕然とする。
「玲治の頭の中、どうなってると思う？ほとんど詩堂梓さんーあなたのことと、玲治の兄ー佳那汰のことで構成されてるのよ」
「！」
「だからこそ、玲治をどうやったら働かせることが出来るか、手にとるように分かるの。凄いでしょ」
にっこり笑う遊子を、梓は睨み付ける。怒りのあまりに体がぶるぶると震えて止まらない。
「お前…っ」
「今日は知り合いに貸し出してたけど、首尾はあまり良かったとは言えないみたいね」
遊子が玲治に触れようとしたので、梓はそれを阻止しようと玲治を庇おうとした。だが、
「邪魔だよ」
遊子に加減なく殴られ、頭が揺れた。
「っ」
「玲治はあたしたちの代替品なんだ。おいそれとくれてやる訳にはいかないんだよ」
遊子は睨み付けてくる少女の視線を受け流し、玲治を背負い日向に眼を遣った。興味深そうに、
「ふぅん、」
「遊子！？」
遊子は懐かしい声に、嬉しげな笑みを浮かべた。

## 第三十四話：混沌への序曲（前書き）

奈緒が遊子と再会を果たし、九連兄弟は遊子と初めて会います。兄のほうは意識ないですが（汗）

# 第三十四話：混沌への序曲

姉の臨終の姿が走馬灯のように過る。
ー大切な人と、生きてね。奈緒。
「久しぶりだね、奈緒。美緒が死んで以来か」
長い間会えなかった友人同士が交わすかのような口調で遊子は言った。奈緒は答えず、日向に眼を遣る。早く病院に連れていかないといけないのに、と焦る。左腕を早く固定しないと。
「あぁ、この子が心配なんだね。うん」
遊子が日向に触れようとする。触るな、と怒鳴ろうとしたが先手を取ったものがいた。
「そいつに触るんじゃねぇっ！！！」
奈緒の傍らにいた影である。先程までの余裕さは鳴りを潜め、噛みつかんばかりの剣幕で遊子を睨み付けている。
「君か。御鶴城が犯したいと言っていた相手は」
「！？」
「…にしては変だな。御鶴城は君のことを、いつも震えてる子犬とかいう気持ち悪い表現で示していたがな。えぇっと、確か名前は九連影…だったか」
影が歯を剥き出しにして怒鳴る。
「今回のことは貴様の差し金かっ！！」
遊子は少し困ったように首を傾げ、
「差し金…ねぇ。まあ御鶴城に協力はしたけど、君を犯すから力を貸せって言ってきたのはあいつだし」
「じゃあ止めさせりゃあ良いだろ！」
「あたしらの世界にも色々あるんだよ」
「っ」
「…君、面白いね。眼は真っ赤だし、何より“中”で膝を抱えてる君が透けて見えるよ。“中”にいるのが本来の九連影君かな？」

「何だと、」
「面白い。君にすごく興味が湧いてきたよ」
まずい、と奈緒は臍を噛む。遊子は、“面白い”ものには眼がない。何をしてでも、手に入れようとする…。遊子が玲治を背負ったまま、ゆっくりと影に歩み寄っていく。先程人を殺したばかりの影はー何故か硬直して立ち尽くしているだけだ。奈緒は影に怒鳴る。
「何ぼうっとしてるのっ！！行くわよ！」
影の細い腕を掴み、奈緒は遊子から距離を取るために走り出す。影は抵抗しなかった。遊子が笑い追いかけようとした瞬間、
ぱちんっ！！
と何かが弾けるような音がした。
「あ、」
遊子が声を上げ、残念そうに柳眉を下げる。
「あらら、玲治の人払いが切れちゃったか」
奈緒は遊子の言葉で、彼女が今は影を諦めたことを知った。立ち止まり、しかし遊子の動向を確と見据える。
「残念時間切れだよ。今日は帰るけど、近い内また会いに来るからね」
そう言い置き、遊子は玲治を背負ったまま、軽い足取りで去っていった。
「救急車…」
恐らくもう電話は繋がるはずだ。救急車を呼んで、日向を病院に運んでもらわなければ。予想通り電話は繋がった。一台頼み通話を終えると、奈緒は携帯を仕舞った。「影？」

「……」
「こら、影っ！！」
赤い眼の不遜な影に対する接し方で奈緒は乱暴に横にいる影の腕を掴んだのだが、
「痛っ…」
気弱そうな声が返って来たので、焦る必要もないのに焦ってしまった。
「え、あんた、戻ったの？」
「蓮本…さん？僕は、一体、」
（御鶴城に襲われたこと、やっぱり覚えてる…わよね）
それに、白い肌のあちらこちらにある切り傷が自分に何かが起こったのだと知らしめるだろう。
「あ、ちょっと影っ！」
ふっ、と意識を失って崩折れる影の体を慌てて支えるがー
「軽っ…」
軽過ぎて、奈緒は瞠目する。ちゃんと食べているのか不安になる。
「しかし、」
奈緒は日向が言っていた“赤い眼の影”と対面したのではあるが、
（…この胸騒ぎは一体、何…？）
嫌な予感が頭の中で渦巻いて、奈緒は顔を目一杯しかめたのだった。

## 第三十五話：本性と埋まらない溝

山城麻理花は、冷めた瞳で御鶴城の死体を見下ろしていた。
（…つまらない男ね）
たった一人の生徒すらまともに組み敷けないとは。
（しかも相手はあの影君よ。…まあ“あれ”が出た時点で御鶴城の負けは決まってたようなものだけど）
ぽっかりと開いた背中の穴をまじまじと観察する。血の色にも臭いにも、死体には片腕がないことも麻理花には全く何の感慨も与えていないらしい。奈緒も知らない麻理花の素顔がそこにはあった。
（しかも奈緒ってば、ほとんど九連君と一緒にいる。…あの裏切り者）
麻理花はすうっ、と大きく息を吸い込むと、悲鳴をほとばしらせたのだった。

夢を見ていた。梓を殺す夢だ。首を絞め、ナイフであちこちを刺し、屋上から突き落とす。それを背後から兄さんが観察してー

「あぁぁぁぁぁっ！」
玲治は絶叫とともに覚醒した。「うぁ、はっ、はっ」
全身に汗をかいていた。シャツが素肌に張り付いて気持ち悪い。
「梓…」
夢なんかじゃない。自分は現実に梓を殺そうとした。首を絞めて。
そんなつもり、なかったのに。
「俺は、俺は何てこと。梓…許して、」
「その梓が許さない、と言ったらお前は死んでくれるのか？」
ビクッと玲治は大きく体を震わせた。

「どうなんだ、この役立たず」
「ごめ、ごめんなさい」
佳那汰にぐいっと胸ぐらを掴まれ、玲治は怯える。
「わざわざ遊子様に足を運ばせ、あまつさえ背負わせて。なんたる失態だ」
言外に恥知らずと言われた気がして、玲治は何度もごめんなさいを繰り返す。
「…やっぱりお前はあの時死んでいれば良かったんだ、玲治」
「…っ！」
「何故お前なんかが生き残って、母さんたちが死ななきゃならなかった」
「ごめ、兄さんごめんなさい、」
兄にすがろうと伸ばした手を、汚いものかのように荒々しくはね除けられた。ぱちっ、と虚しい音が響く。玲治は眼を見開いて、涙を溢れさせた。
「どうしたら、どうしたら兄さんは俺を許してくれるの？自殺でもすれば、いいの？」
「許す？僕が？お前を？」
はんっ、と鼻で笑われる。胸が痛む。
「許すわけないだろう。何があろうとも、僕はお前を憎み続ける。お前が死んでも、僕はお前を絶対に許さない」
「兄…さん」
「……」
佳那汰は顔を逸らし、玲治の居室を出て行く。伸ばした手は決して取られることはなく、玲治は体を丸めて、泣いた。

市立月舘病院外科棟五階。奈緒は５１６号室にいた。疲れた眼で、ベッドに眠る少年を見る。少年ー九連日向は静かな寝息を立てていた。着ているものは、病院が貸し出した薄青色のパジャマ。白いギ

プスが奈緒の眼をさす。
「早く起きろ。あんたの半身が大変なんだから」
奈緒は、日向の双子の弟である影によって出来た手の甲の裂傷を反対の手で軽く撫でた。

## 第三十六話：繋がる想い

日向を救急車で運んでもらうのは絶対だったが、奈緒は影も運んでもらおうとした。ただ何と言って救急車に乗せてもらうかすぐには思いつけなかった。加えて左腕を折られ、かつ気絶している日向のことをどう説明すべきかも。下手をしたら、御鶴城や玲治のことも話さないといけなくなる。しかも後先考えず学校に呼んだが、良かったのだろうか。焦りすぎたか、と奈緒は舌打ちする。

だがあれやこれや考えている内に救急車は到着し、こうなりゃ全部暴露してやると奈緒が自棄になったのだが、

（きっと…いや、絶対あれは遊子の手引きだ）

救急隊は一切の詳細を訊くことなく、てきぱきと日向を救急車に乗せていく。奈緒にも同乗するよう促し、隊員の一人が影を抱き上げようとしたときだった。

「いや、嫌だ！」

急に覚醒した影が隊員が伸ばしてきた手をはね除けたのである。しかし何処か望洋とした表情のその隊員は逃れようとする少年を全く加減のない力で捕まえた。影は涙を浮かべながら抵抗している。

「いや、いやっ！僕に触らないでっ…！！」

恐らく、御鶴城に性的暴行を受けたことで大の男に本能的な恐怖感を抱くようになっているのだろう。

「影、」

思わず影に走り寄ろうとした奈緒だったが、別の隊員が近づいて影の首筋に小さな注射を突き立てた。途端に影は再び意識を失って隊員の腕の中に倒れ込んだ。何をするんだ、といきり立つ奈緒に、隊員が抑揚のない声で告げる。

「蓮本奈緒様ですね。今から九連兄弟を月舘病院に搬送します。ーお付き添いを」

馬鹿丁寧な口調で言われ、奈緒はポカンと間抜け面をしてしまう。

「お早く」
「わ、分かったわよ」
奈緒は頷いて、救急車に乗り込んだのだった。

そして今。奈緒は左腕の処置を終えた日向の付き添いをしていた。
単純骨折でまだ良かったと思う。
「…帰ろうかな」
時刻はすでに午後九時になろうとしている。病院側の好意でまだ居座れているが、常識且つ規則の面会時間はとうの三時間前には終わっており、例外はあるだろうが、さすがに九時は居すぎだろう。そう思い、奈緒は座っていたパイプイスから腰を上げたのだが、

「はす…もと？」
苦し気な声に、奈緒はハッと眼を見開いた。
「九連！？気が付いたの！？」
「ここ…」
日向は望洋と呟き、奈緒を見上げる。
「病院。何があったか、覚えてる？」
「俺は…、確か影を探しに学校に、」
そこまで言って思い出したらしい。奈緒がギョッと仰け反るほどの勢いで起き上がり、当然のように左腕に走る激痛に顔を歪める。
「いっ……！！」
「ば、馬鹿！あんた左腕折れてるんだからね！？」
「影は？影はどうしたんだよ！？」
いつもの日向だ、と思いつつ奈緒は言う。
「とにかく、横になりなさい。自分の体を先に心配しな」
日向は渋々といった感じで再び横になる。
「で、影は」
「…影も、入院してる」
「怪我、したのか」「怪我…もしてる」

どう説明しようか、と奈緒は思案する。影が御鶴城に何をしようとしていたのかーそれを知っても日向は平静でいられるだろうか。
「…やっぱり、犯されそうになってたか？」
「…え？」
奈緒がポカン、として日向を見ると、彼はやりきれなそうに苦笑し、無事な右腕で顔を覆った。
「やっぱり…そうなんだな」
「やっぱり…って、九連、」
「そんな感じはしてたんだ。ー影を見る御鶴城の眼は、何か普通じゃなかったから。俺が見ても気持ち悪いくらいだったし。いつか起こる気はしてた」
なのに俺は影を守れなかったな、と日向は自嘲する。奈緒は何も言えない。
「情けないな。こんなときに、何もしてやれないなんて」
「…九連、」
「それで…影は？」
「……とりあえず病院側の好意で、この病室の横を使わせてもらってる。御鶴城にナイフでつけられた傷の治療もあったし…」
「…そうか」
「影は、大人の男を怖がるようになってる。…御鶴城が重なるんだろうけど」
「俺、馬鹿みたいだ」
奈緒はえ？と耳を澄ます。
「必要なときに助けてやれなくて、変な意地張って。馬鹿だ」
「九連…」
奈緒の声から戸惑いを感じたのか、日向は誤魔化すように笑おうとする。
「て、何言ってるんだろうな。俺は、」
「九連」
日向の眼が見開かれる。

「は、蓮本…？」
奈緒が日向の頭を抱えるように抱き締めたからだ。
「泣けば良いわよ」
「はす、」
「我慢する必要ない。ここにはあたししかいないんだし、強がらなくていい」
「蓮本、俺は、」
「誰だって身内が酷い眼にあえば取り乱す。混乱する。それのどこが悪いの」
あたしは、姉が死んでも泣かなかった。きっと心の奥では喜んですらいた。それに比べたら、あんたの方がよほどマシだ。
「…蓮本って、本当に掴めないやつ」
日向が呟いた言葉に、奈緒は苦笑する。
「…よく言われる」
日向のははっ、という笑いが、くぐもった嗚咽に変わるのに大した時間はかからなかった。

## 第三十七話：物思い～奈緒篇～

病院を出た奈緒は、嘘みたいに頬が熱かった。
（あたしはなんてことを…。九連に変に思われたよね、絶対）
まさか日向を抱き締めるとは全く思っていなかった。なのに、無理矢理笑おうとしている日向を見たら勝手に体が動いたのである。
（一人で照れちゃって馬鹿みたい…）
そう思う一方で、
（…何か、変な感じ）
他者を抱き締める、ということに言い様のない喜びを感じてもいる。
（九連といると、何だか調子が狂う…）
最初は“あの人”に似てる…と思っただけだ。外見だけで中身は全く違うのはすぐに分かったが、それでも徐々に日向の存在は奈緒の中で膨らんで行った。今では“あの人”のことを思い出すことはあまりない。「陽くん」
“あの人”の名を呟いてみる。今はもういない、あたしの初恋の人。適当で天の邪鬼なあたしを好きだと言ってくれた人。
（…なのに、あたしは陽くんを見捨てた）今も思い出せる。傷付いたような鳶色の瞳。蒼白な顔。
（あたしは、他人を不幸にする）
そう思うから他人から距離を取ろうとするのに、いつの間にか日向から眼を離せないでいた。
（…何か気分が暗くなってきた）
首を数回軽く横に振って、奈緒は陽のことを記憶という箱の中に閉じ込める。
（言えなかったな…。影が御鶴城を殺したこと。あと、赤い眼の影と会ったこと）
正確に言えば赤い眼をした影が御鶴城を殺したのだがー。
（あまり九連を刺激することは言えないし）

奈緒は眼を伏せ、ため息をはいた。何だか心の中が霧で覆われたかのように、モヤモヤとして仕方ない。（…御鶴城の死体はどうなったんだろう。学校は騒然としてるんだろうな）
何処か他人事のように考えながら、夜の街を奈緒は一人、歩く。

## 第三十八話：涙と憎しみ

午後十時半。消灯時間は疾うに迎えていたが、日向は眠れずにいた。普段と比して寝る時間が早すぎるというのも勿論あるのだが、どうしても影のことが気になって仕方ない。

「……」

意を決して、日向は同室の患者を起こさないように病室を出た。抜き足さしあしという泥棒のような歩調で隣の病室へ向かう。そこは個室らしいと奈緒から聞いていたので、他人を気にする必要はない。日向は病室に入り、静かにドアを閉めた。

「影、」

数時間ぶりに会った双子の弟は、身動ぎ一つせずベッドで上体を起こしていた。日向の存在にも気付いていないのか、見向きもしない。

「影？」

「……」

人形のように光のない眼が日向を見て、

「兄…さん？」

戦慄く唇がそう呟いた。「影、分かるか？」

「兄さん…」

影が日向に抱き着いて来る。激しく震える体が日向の心を震わせる。

「影、」

「こわ、怖かった…。怖かったっ…！！」

「もう大丈夫だから」

「兄さんにも嫌われたと思って、もうどうしていいか分からなくて」

「わ、悪かった。今日はおかしかったんだ。影が嫌いってわけじゃなくて、」

影相手にしどろもどろになるのは滅多にあることではないので、日向は何となく恥ずかしい。

「う、うぅ」

「あと、ごめんな。何もしてやれなくて。大事なときに何もしてやれなくて」
影が首を横に振る。声には出していないが、そんなことはないと言ってくれているのだろう。
「…山城に怒られたよ」
「山城さんに…？」
「俺が思ってることを影に言ってやれ、だって。山城に初めて怒鳴られた」
影が眼を白黒させる。
「俺、怖くなったんだよな」
「怖く…？」
日向はあぁ、と頷いて、
「俺がいなくなったら影は一人でやっていけるのかな、ってさ」
「に、兄さんいなくなるの？」
影が慌てて日向の手を掴む。
「僕を置いて行くの？」
「今すぐどうこうって訳じゃない。ただ人生は何が起こるか分からないだろ」
「で、でも」
日向は影を安心させるように彼の頭を撫でる。
「兄さん…」
「影を心配しすぎて、過保護になってたんだと思うんだ。だけどそれじゃ良くないって思って、そう思ったら突き放したほうが良いって、思い込んで…」
影は不安そうな眼差しで語る日向を見ている。
「……難しいかな」
「少し…。でも、兄さんに嫌われてないんだろう…ってことは何となく分かった…気がする」
それでも影は不安そうに顔を曇らせている。「…兄さん」
「何だ？」

「僕……女みたい？」
呟かれた言葉に、日向は身を硬くする。
「……え？」
「御鶴城先生の眼が…頭から離れないの、」
「影、」
「忘れようとすればするほど、見られてる気がするんだ…」
仕方ない、と言おうとして、日向は口をつぐむ。同性に無理矢理抱かれそうになったことなどない人間が軽々しく口には出来ないからだ。
「俺のこと、怖い？」
影は弱々しく首を横に振る。
「兄さんのことは平気。でも、他の男の人は怖い」
かたかたと華奢な体が小刻みに震えている。
「大丈夫。俺がいてやるから。安心して寝ていい」
影はうん、と頷く。横になるように促すと、素直に従う。
「おやすみ、影」
「おやすみ…なさい」
兄の手の温もりのおかげか、心労も溜まっていた影はすぐに寝息をたてはじめた。
（御鶴城の奴…）
影の手を握っていない左腕ー折れているほうの腕の拳を握りしめたい衝動にかられる。
（絶対に許さない…）
日向はまだ知らない。その憎むべき相手がもうこの世にいないことを。それをなしたのが双子の実弟だということを、知らない。

## 第三十九話：戻った記憶

「それじゃ、おやすみなさい」
「ゆっくりお休み」
自室に引き取った麻理花は、勢い良くベッドに倒れ込んだ。
（警察に行ったのは二回目だけど、相変わらず詰まらないとこだったな）
御鶴城の死体の第一発見者となった麻理花は事情聴取で月舘中央警察署の刑事課に連れて行かれた。だが麻理花を容疑者と見なしているわけではないことは刑事の丁重な振る舞いで何となく分かった。
（まあ、あんな真ん丸い穴が体のど真ん中に開いてたら一介の女子高生がどうこうできるなんて、普通は思わないわよね…）
実際はある男子高生の所作ではあるが。
（九連君は元気かな）
きっと最愛の双子の弟が御鶴城に犯されかけたことで、御鶴城に途方もない憎悪を抱いていることだろう。もしくは、何もできなかった自分を呪っているか。ーどちらにしても麻理花の嗜虐心を満たしてくれるものだ。
（笑ってる九連君も好きだけど、悩み苦しんでる姿なんて最高）
ふふっ、と麻理花は微笑む。早く日向に本当の自分を見せたいな、と思いながら彼女は眼を閉じた。

寝台で無心に眠る弟を、佳那汰は無感情な視線で眺めていた。いつからだろう、と佳那汰は思う。昔は玲治を守ってやるのが当たり前だった。何かとても大切なことを忘れているような気がする。昔はこんなに玲治を憎いと感じたことはなかったはずだ。
（母さんたちが殺される場面。あれが、最近はとても作り物めいて見えるのはどうしてなんだ。全く現実感が湧かない）

長袖から覗く腕に巻かれた白い包帯がひどく痛々しく感じる。
（……包帯？）
今、胸に鈍い痛みが走った気がした。
（何だ？）
何か、何か、重大な間違いをしている気がする。
「こんなところにいたのか、佳那汰」
「！遊子様」
「どうした、そんな哀しげな眼をして」
「えっ、」
痛いところを指摘された気がして、佳那汰は思わず上擦った声を上げてしまった。遊子が口端に笑みを浮かべ、いきなり眠っている玲治の首に手をやる。玲治が一瞬眉をしかめたが、起き出す様子はない。
「遊子様、何を…」
「今なら簡単に軛り殺せるぞ」
笑みとともに発っされた提案に、佳那汰は愕然とする。思ってもみなかったことを指摘され、冷たいものが背中を震わせた。
「遊子様、」
「佳那汰はこいつが憎くて仕方ないのだろう？私に遠慮する必要はないから、殺せば良いよ…こんな風に、」
止める暇もなかった。遊子が玲治の首を掴む片手に力を入れる。途端に眠っていた玲治が背中を反らせ、覚醒する。
「あっ……！？」
何が起きたのかと眼を白黒させる少年に、遊子が残酷に告げる。
「お前は今ここで死ぬ。最愛の兄に看取られてね」
「やっ、やめっ…」
上げかけた苦痛の声は、口を塞いできた遊子の唇によって塞き止められる。「んっ、んぅっ…」
涙にまみれた眼が佳那汰を捉え、助けてと訴える。
「っ…」

ずんっ、とよく分からない塊のようなものが肺腑に凝り固まる。佳那汰は動けない。
「良いのかな。これ、死ぬよ」
残虐な遊子の笑みが脳裏を侵す。忘れていることがその笑みに刺激されているような感覚を覚える。「うっ…」
玲治の遊子をはね除けようとする力は徐々に弱まってゆく。もとより体力はあまりない。加えて消耗しているため、まともな抵抗一つ出来ない。
「ーーーっ！！」
真っ白になった手が佳那汰の助けを求めて中空をさ迷う。その手が網膜を、脳裏を刺し、
「遊子様、止めて下さい！！」
気がついたら遊子の手を掴んでいた。
「…」
遊子は意味深な笑みを浮かべ、玲治を解放する。
「うっ、げほっ…ごほっ…！！」
身を捩り、ベッド上で玲治が咳き込むが、その拍子に鮮血が吐き出される。愕然と眼を見開く玲治に、近づこうとした刹那、佳那汰は遊子に腕を掴まれた。腕を掴んできた手が何故か酷く汚らわしいものに思え、思わず手を払った。
「…やはりね」
遊子は詰まらなそうに呟くと、佳那汰の顔を払われた手で覆った。息が苦しくなる。
「記憶が戻りかけてるみたいだ」
遊子の言葉に、佳那汰は眼を見開く。過去のある情景が一気に頭に流れ込んで来たからだ。「遊子…様、」
「ちょっと放置しすぎたかな」
「兄さんを…放して、」
玲治が弱々しく言いながらベッドから降りようとするが、遊子の冷たい視線に晒されて身を竦める。

「…っ」
「この男は私のモノだ。黙ってろ」
吐き捨て、遊子は茫然自失としている佳那汰を引きずって行く。佳那汰は抵抗しない。玲治の眼と佳那汰の眼が合う。息を詰める玲治に、
「っ！！」
佳那汰が微笑む。久しく見ていなかった、兄の優しい笑顔。
「兄さんっ！」
「……れ…じ」
ごめんね、薄紫の唇がそう象る。無情にも兄弟は引き裂かれる。
「兄さんっ！！」
玲治の絶叫は、分厚い鉄製の扉に遮られた。

## 第三十九話：戻った記憶（後書き）

なんか、玲治とか苛めすぎかなぁ…（汗）

## 第四十話：奈緒と玲治

一人の部屋に帰りついた奈緒は、はああっと盛大なため息をついてカーペットの上に大の字で寝転んだ。一気に色んなことがありすぎて、頭が痛い。少し重たい瞼をこじ開け壁掛け時計を見れば、十時半を回っていた。だが腹はすかず、風呂に入る気にもなれない。

（あたしは…よく平気だったな）

ぽっかりと体の中心に穴を開けられた御鶴城の死体。いくら臓物ごと綺麗さっぱり抜き取られていたとはいえ、常人ならば吐いたり発狂したりしそうなものだが奈緒は眉をしかめるだけにとどまった。やはりあたしはおかしいのだ、と自嘲する。

（それに、）

カラーコンタクトではないのに、血のように赤い眼をした少年の存在。“彼”は一体何なのだろう。影の裏の人格ーと考えれば良いのだろうか？（二重人格…ということか？）

心の…鎧…。

（かなり物騒な性格ではあったけど…）

奈緒に敵愾心はなかったようだから、やはり影がピンチになると現れるのか。だが、

（それだと、九連の言っていた“痣”について説明出来ていない）

通常紫色をした痣が、いきなり赤くなることなどあるのか。そしてまた紫色に戻ることなど…。

（それに、九連を襲ったっていう体の激痛…。“痣”と何か関係あるのだろうか）

奈緒はじいっ、と考え込んでいたがやがて気だるげなため息をついて思考を中断した。

（煙草でも吸おう…）

うんせ、と掛け声一つ奈緒は立ち上がると台所に行く。換気扇を回し、美味そうに一服する。（あたし一人だから、わざわざ換気扇の

下まで行く必要はないんだけどね）
苦笑していると、放った携帯が着信音を奏でた。
（ん、）
液晶ディスプレイには、登録していない番号が表示されている。
（誰だ？）
普段なら知らない番号から着信があれば無視するのが常なのだが、この時は電話を取るべきだと何かが奈緒に告げていた。
「はい、もしもし…」
「奈緒さっ、奈緒さんっ…？」
「玲治？」
聞こえて来たのは、玲治の泣き声だった。どうして玲治が奈緒の番号を知っているのか不審に思ったが、玲治の様子にそれどころではないのだと感じる。
「玲治？何かあった？」
「にい、兄さんが遊子に連れて行かれたっ」
「え？」
「兄さんが俺を見て、久しぶりに笑ってくれて…。なのに、なのにっ」
「落ち着きなさい！」
以前“屋敷”で仲間とともに暮らしていたときのように、奈緒は玲治を一喝した。無意識だったが。
「な、奈緒さん…」
「ちゃんと聴いてるから。落ち着いて、何があったのか順序だてて説明して」
無理か、と奈緒は懸念したが意外にも玲治は声を抑えつけて話し出す。奈緒はただ黙って彼の話を聴いていた。

# 第四十一話：苦悩

「“記憶が戻りかけてる”？本当に遊子がそう言ったの？」
「は、はい…。俺、確かにそう聴きました」
奈緒は玲治と携帯で話し始めてから五本目の煙草に火を点けた。
「…記憶が、ね…。言葉通りなら…佳那汰にぃは遊子に記憶を弄られているってことにも取れるけど」
玲治を刺激しないため、奈緒は言葉を選びながら話す。
「どうして、どうしてそんなっ……！」
玲治の悲痛な叫びが奈緒の胸を打つ。「玲治！しゃんとしなさいよ！佳那汰にぃを助けたいんじゃないの！？」
「でも、でもどうしたらいいの？俺には何も出来ないのに…うっ、」
「玲治？玲治！？」
電話の向こうで玲治が激しく咳き込むのが聞こえる。何かを吐き出すような音。奈緒は焦燥感に汗を浮かべる。
「ごめ…なさ、」
「どうしたの！玲治っ」
「咳が、止まら…、げほっ、ごほっ！！」
「苦しいの！？」
「げほっ！！」
びちゃっ、と奈緒の耳元で粘着質な音がした。
「…あ、うぁ」
「玲治？」
「俺、死んじゃうの、奈緒さん…」
「玲治」
「血を、吐いた」
「吐血…？」
「兄さんを助けるなんて、俺には、む…」
次の瞬間、

「とまあ、そういうわけだよ。奈緒」
「あんた、遊子っ！」
微かに、玲治の弱々しい
「放して…」という抵抗の声がする。「まさか、玲治にあたしの携帯番号を教えたのはあんた？」
「さぁ、どうかな」
「あっ、」
ぱしん、と皮膚を叩かれる音がした。
「ぎゃあぎゃあうるさいんだよ、この愚図」
遊子が吐き捨てる。玲治が沈黙する。
「遊子！！佳那汰にぃをどうするつもり！？」
「あれをどうしようがお前には関係なかろう。“屋敷”を逃げ出したくせに、今さら“仲間”気取りか？」
遊子の口調が嘲りのそれになる。奈緒は唇を噛む。
「それは…」
「切るよ。ちょっとこの馬鹿兄弟に仕置きが必要だからね。あんたを構ってる暇、無いんだわ」
「ちょ、」
待て、と呼び止める前に通話を終わらせられた。奈緒は長くなりすぎた煙草の灰を荒々しく灰皿に落とすと、携帯を壁に向かって投げつけた。
「あの、くそ女っ…！」

姉さん、あたしはどうしたら良い？玲治を助けに、佳那汰にぃを助けに行くべき？…でも、でもあの場所には、ー陽君がいるのよ。実際は死んでいるけど、陽君はずっとあたしの中にいる。“屋敷”に戻ったら、あたしはきっとー
（ねえ九連、あたしはどうしたら良いの？）

# 第四十二話：暴露

「蓮本…？」
奈緒に呼ばれた気がして、日向は俯けていた顔を上げた。影が寝入って３０分も経過している。日向も眠りかけていたようだ。
（まさかな…）
日向はそっと影の手を放す。病室での付き添いはするが、ずっと手を握って同じ体勢でいるのは辛いものがあるからだ。
（っ）
ズキッと左腕が痛んだ。日向は眼を眇めて痛みに耐えた。
（影の心の痛みに比べたら、これくらい）
椅子に座り、日向は一息つく。
（…俺に、何が出来る？）
御鶴城の顔が浮かんで、日向は唇を噛む。
（御鶴城の野郎、絶対に許さない）
「今はこの世にいなくてもか？」
「！？」
ギョッ、と顔を上げればいつの間にか前に立っていた影の笑みに迎えられた。指で顎をすくわれる。
「おまっ、」
「よう」
赤い眼に体が硬直する。
「驚いた顔も良いな」
「ふ、ふざけるなっ」
指を払うと、不敵に微笑む。
「何慌ててんの？俺、影だぜ？」
「お前なんか影な訳あるか…！」
「傷つくなあ、僕」
「…っ」

顔や体は影のままなので、どうにも相対しにくい。
「気持ち悪い声を出すなよ」
「ふん」
鼻を鳴らし、影はベッドに腰掛ける。
「…どういう意味だ」
「あ？」
「この世にいなくても？って訊いただろ、俺に」
「あぁ、まんまの意味さ。お前は御鶴城を憎んでるみたいだけど御鶴城が死んでても、その憎しみは継続すんなのかな、と」

「…何だと？」
虚を突かれて眼を見開く日向に、いきなり影が手を伸ばして来た。
反応が遅れる。
「なにす、」
「この間のお返し」
服の上から右側の肋骨あたりを撫でる。
「さわ…るな！」
嫌悪感に、影の手を払う。影が笑う。
「日向でもそんな不安そうな顔するんだ」
「影の顔で言うな！」
「何度言わせる気だ？俺は影だって言ってるだろ」
「……っ」
「御鶴城、殺しといたから」
軽い口調でサラリと言われ、日向は何かの冗談かと思った。
「……何？」
「だから、俺を汚そうとした御鶴城を殺したって言ってんの。学校は阿鼻叫喚だったろうね」
「ころ…した？」
「そう。この手でね」
「なっ…」

目眩がするかと思った。
「嬉しくないわけ？最愛の双子の弟を汚そうとした奴を殺したんだぜ？」
日向は最早言葉を紡ぐことができず、その場にへたり込んだ。
「ふうん、」
影は赤い眼を細め、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる。日向の前にしゃがみこみ、彼の頭を鷲掴みにする。それでも日向は身動ぎ一つしない。ぶつぶつと呟いているらしいが、内容までは影には聞き取れない。
「そんなに俺…いや、僕が大事か」

襟首を掴む。
「なら、弟みたいに犯してあげようか？」
一緒にしてあげよう、と影が無防備な襟元に手を差し入れようとしたー
「ちっ、時間か」
不機嫌そうに呟くと、影の眼が黒くなっていく。不敵な笑みは気弱げな顔になり、
「…にい、さん……？」
自分の手が兄のシャツの襟元にかかっていることに驚き、パッと放す。
「ぼ、僕は…」
「か、げ…？」
「に…っ！」
ズキンッ、と胸に激痛が走り過呼吸に陥る。
「影っ！！」
崩れそうになる細い体を、日向は慌てて支える。影は熱があるのか、体が熱い。
「影、大丈夫か！？」
「っ、だい…じょうぶ。いつもの発作、だと思うから」

「せ、先生呼んだほうが…」
影は弱々しくはあるが、しっかり首を横に振った。
「本当にいい…から、」
「わ、分かった。ベッドに運ぶから」
こくり、と頷く影を、日向はベッドに運ぶ。赤い眼の影の言葉を、脳裏にまとわりつかせたまま。

## 第四十三話：侵食する真実

遊子に散々と痛め付けられた玲治は、ぐったりと床に倒れ伏していた。殴られて腫れた箇所が熱を持っているが、ひんやりと冷たいコンクリ製の床がそれにあたって心地よい。

（ごめんなさい、陽さん、奈緒さん。陽さんの携帯、壊されちゃいました…）

遊子に踏み砕かれた携帯電話が無様に玲治の鼻先に転がっている。

ーどうして貴様が陽の携帯を持っている。

抵抗する力も気力も残っていない玲治の胸ぐらを掴みながらその質問を放った遊子の眼の真剣さに、玲治はただ震えているしかできなかった。

（この携帯は、奈緒さんにまた会えたときに渡そうと思ってたのにな……）

陽と奈緒がなんからの理由で道を違えたのであろうことは、奈緒が“屋敷”を出ていったことからも想像はついた。でもそれでも奈緒が番号を変えていなかったのは……。

「いっ、」

腹が痛んだ。ヒールの踵で何度も踏みつけられたからだ。へたをしたら内出血しているかもしれない。

「兄さんは…、」

遊子に連れ去られる直前に見せてくれた、久しぶりの優しい笑顔が玲治を苛む。どうしてこんなことになったのだろう。いくら考えても、玲治には分からなかった。

「全く、とんだじゃじゃ馬だわ」

遊子は長い黒髪を鬱陶しげに払い除けながら愚痴を零した。目線の

先には、椅子に縛り付けられた佳那汰の姿がある。
「人の記憶というものを侮り過ぎていたようだ」
やれやれ、と肩を竦める。
「…玲治は、どうしたんですか？」
「おいたが過ぎるから、少しお仕置きしてきたよ」
「……」
佳那汰が遊子を睨み付ける。
「お前もか」
はあ、と呆れを示すため息をつき、
「今更弟想いの良いお兄さんのふりかい」
佳那汰の首を冷たい手で握り締める。
「ぐっ…！」
佳那汰は呻くが、強い光の宿した眼で遊子を見据え続ける。
「気に入らないな。…でも私は貴様がどうしても欲しかった」
「僕が欲しいなら、こんなやり方は止めてください。玲治を、あの子を解放してください」
「……」
「本来あの子は関係ないはずです。だから」
「その弟を散々いたぶり突き放したのは何処の誰だ？」
遊子の意地悪な問いに、佳那汰は息を詰まらせた。指先が震える。
「そ、それは…」
「私が貴様の記憶を改竄したから？確かにそれもあるだろう。だがお前は感じていたはずだ。玲治への憎しみ、憧れ、」
「違う……」
「私の“力”は確かに他者の記憶を改竄する。だが全く、望まない方向には改竄されないんだよ…悲しいかな、これが私の“力”の限界でもあるわけだが」
「……っ」
「つまりお前は、お前の望んだ形の記憶を、私に改竄させたんだ。それが何を意味するか、分からん貴様ではあるまい？」

「つまり、」
「両親や妹を死に至らしめた人間は玲治などではなく貴様だったということだな」
「……っ！！」

「貴様はその事実を隠し、肉親殺しの罪を玲治に背負わせたかった。玲治を苦しめたかった」
遊子の言葉が佳那汰を侵食する。全身がかたかたと瘧(おこり)のように震え、寒気すらしてきた。
「……」
「玲治もある程度記憶に齟齬があるが、貴様ほどではないだろうな」
遊子の陰鬱な笑い声が、佳那汰の心をひどく揺さぶった。

## 第四十四話：惑い

翌朝。日向は影の病室で眼を覚ました。
「いっ、」
不自然な体勢で寝ていたためか、全身が痛い。癖毛がふわふわしているのはいつも通りで、日向ははぁと吐息する。
「……」
影は穏やかな寝顔でまだ眠り続けている。このまま目覚めないのではないかという不吉な想像が浮かび、日向は慌てて首を左右に振った。
「今何時だ…」
誰も入院していなかった病室に急遽入れて貰ったのだから時計の用意は成されていない。影の腕時計は、とキョロキョロすれば、
（そういえば影の鞄って学校なんじゃなかったか）
ということに思い当たる。貴重品も鞄の中のはず。

（クラスに盗む奴はいないだろうけど…）
他クラスの生徒のことまでは分からないが。学校は大変なことになっているだろう。赤い眼の影曰く、影が御鶴城を殺した…と。
「…っ、」
赤い眼の影が殺したとは言え、影の手で殺したことには間違いない。
（違う。俺は信じないっ…！！）
日向はハッと気付く。御鶴城がどうなったか知っていそうな人間を思い付いたのである。
（蓮本なら知ってるかもしれない…！）
奈緒の番号は携帯に登録してある。携帯は確か自分の病室の棚の中だったはず。
「ちょっと席外すな」
眠っている影を起こさぬようにそう言い、日向は影の病室を出た。

携帯が着信を告げた時、奈緒は寝起きの一服を味わっていた。誰よ朝っぱらからと眉をしかめながらもディスプレイを見れば、
（……九連？）
日向から電話が来るのは珍しい。
「もしもし？」
「あ、俺、九連」
「おはよう。影に何かあった？」
それくらいしか日向が今電話してくる理由はないように思えた。
「あの、蓮本に訊きたいことがあるんだけど…」
歯切れが悪い。奈緒は眼を細め、煙草を揉み消す。
「何」
「あ、あのさ…御鶴城は、どうなった？」
「…え？」
「昨日の夜、赤い眼の影と会ったんだ。少し…話した」
「何だって？」

「…影が、御鶴城を殺したって」
今にも消え入りそうな声で日向が言う。奈緒は動揺を表に出さないよう留意しながら、
「九連はそれを信じるの？」
「どうしていいか分からないんだ…！一昨日から色んなことがありすぎて、どうしていいか、全然っ」
迷い子のような日向の物言いに、どう反応してよいか分からない。
「九連」
「影が人殺ししたなんて思いたくないっ！でも、素直に信じられない。家族なのに…！」
「九連落ち着いて！そこは病院なんだからね」

「わ、分かってるよ」
「分かってない！今影のことしか考えてないっ」
「それは…」
図星だったようだ。電話の向こうで日向の荒い息が聞こえて来る。
「影、今は？」
「……寝てる」
「九連は何もされてない？赤い眼のやつに」
「昨日、少し話しただけ」
「そう。…あんた、今日は学校休むんだよ。影も」
「……じゃあ頼みが二つある」
「…何？」
「多分影の鞄が学校に置きっぱなしになってるから、帰りに持ってきてくれるか。あと…昨日会議室で何があったか、教えてくれ」
奈緒は一瞬躊躇したが、頷いた。話すしかあるまい。
「…分かった。学校が終わる前に今日も病院で過ごすかどうかメールしといてよ」
「分かった」
「切るよ…じゃあね」
「ああ。早くに…ごめん」
奈緒は鬱々とした表情で電話を切った。ズル休みしようと思ってたのにできなくなったなぁ、とぼやいた。日向の苦しげな声を去来させないために。

## 第四十五話：小休止

「う…」
「ね、姉様！目覚められましたかっ！？」
「は、ハル？」
「よ、良かったぁ。心配したのですから」
梓はパチパチと眼を瞬かせる。実弟の幼顔が見える。
詩堂春哉。梓の三つ下の弟。
「フユちゃん！姉様が目覚めたよ！」
「ようやく起きましたか。お騒がせな」
呆れた声とともに近づいてくる軽い足音。
「……フユ、」
「姉様のせいでハルが動かないから大変だったのですよ」
詩堂冬架。春哉の双子の妹だが、春哉より数倍気が強い。
「だ、だって！」
「だ、だって…？笑止」
ビシッ、と細い指を春哉に突き付ける。
「ハル、フユ。喧嘩しない。…ハル、ごめんね」
起き上がり、春哉の華奢な体を抱き締める。
「心配させたね。……ごめんね」
「い、良いよっ。姉様が無事だったから、」
「私、姉様に進言いたしましたよね？」
冬架の鋭い声が春哉の言葉に割り込む。
「フユちゃんっ」
「良いよ、ハル。ーフユ、続けて」
冬架は遠慮なく、と笑い
「あの碧石玲治というのとは付き合わぬほうが良いと」
「…そう、だったわね」
「姉様が何を思ってあれと付き合い出したのかは想像に難くありま

せんでした。…しかし姉様は本気であれを好き始めた。その結果がこれです」
「フユちゃん、言い過ぎだよ！」
「ハル！良いから」
「ね、姉様」
冬架ははあ、とため息をはくと一つに結んでいた茶髪をといた。肩にぱさりとかかる。
「姉様、私たちの生きる意味は、芦原を潰すことです。芦原に連なる者と…いちゃつくことではありません」
「っ」
「それだけは、努々（ゆめゆめ）お忘れになりませんように」
冬架ははっきりそう言いきると、春哉に冷たい一瞥をくれて梓の居室を出て行く。
「あ、あの姉様、」
「大丈夫よ。フユの言ってることは本当だもの。ハルが泣きそうな顔することないから」
「……」
両親を殺され、一族のはみ出し者だった彼らの遺児を引き取るものは皆無だった。当然のように梓たちは施設に入れられた訳だが…。
「ハル、不安？」
「……え？」
「…何でもないわ。ハルといたら元気出てきた」
春哉がかああ、と赤面する。その素直さが玲治にも似通っていて、梓は胸が締め付けられる想いだった。
（…玲治はどうしてるだろうか）

「ん、」
ズキリ、という頭の痛みで玲治は眼を覚ました。頭と言わず、全てが痛い。心も、痛い。

（…兄さんは、どうなったんだろう）
夢に何度も微笑む兄の姿が現れた。
（それに、梓は……）
そっ、と両手を見る。この手が、昨日梓を殺そうとした。きっと、梓は自分を見捨てる。そんな予感があった。
「玲治坊、起きたかね」
「あ、風間先生…」
白衣を着た老医師が心配そうな顔で玲治を見ていた。全く気付かなかったが、恐らく玲治が目覚める前には部屋にいたのだろう。老医師ー風間厚彦は、気配を消すのが得意だという特技…のようなものを持っているのだと言う。
「昨日また酷くやられたもんじゃの。芦原のお嬢も手加減を知らん」

「いっ」
腫れた頬に触れられて、玲治は思わず呻く。
「痛いか」
こくり、と頷く玲治を風間が慈悲のこもった眼で見る。
「坊には無理をさせとるな。すまん」
「風間先生のせいではないですから」
俺のせいです、という呟きは風間の耳に届いたのかどうか。聞こえていたにしても、風間は触れないだろう。そういう人だと玲治は知っている。
「あの、兄さんには会いましたか？」
玲治の治療をしながら、風間が不思議そうな顔をする。
「佳那汰坊か？まだ会っとらんが、どうした？」
「あ、いえ…」
「坊は前から隠し事が下手だ。そして吐き出すことを知らん」

「……」
「すまん。そう悄気（しょげ）るな」

「…すみません」
「謝らないで良いよ」
治療を終え、風間は軽く玲治の頭を撫でる。
「か、風間先生っ。俺、もう子供じゃないよっ」
「坊は儂にとってはいつまでも七歳の坊のままよ」
風間は朗らかに笑うと、救急セットを持って部屋を出て行った。
「……」
玲治は絆創膏の巻かれた指で、髪に触れた。
（俺は、どうしたらいいんだろう）
兄と一刻も早く話したかったが、今は自室から出ることが出来そうにはなかった。

## 第四十六話：奈緒ｖｓ警部

「やっぱりか」
奈緒は八時過ぎにもかかわらず学校近辺に生徒の姿がないのでもしかして…と思っていたが、
「…まあ普通休校にはなるわね」
だが影の荷物がある。奈緒は校門で見張りに立っている若い警察官に声をかけてみた。パトカーは見えないが、住人を不安にさせないために離れたところに駐車しているのだろうか。
「あのすみません」
「…今日は休校です」
ニベもない。奈緒は思わず何も言ってない、と吐き捨てる。
「見たら分かる。少し構内に用がある」
「だめです。例外はありません」
若い外見だが意外と年増か？と奈緒は小さく舌打ちをする。「別に現場を漁るって言ってるわけじゃないんだよ。荷物を取りに行くだけなんだ」
「駄目です。お引き取りください」
（うう、聞き分けのない男！！）
この場合警官は自分の職務を全うしているだけなので彼を責めるのは間違いなのだが。
「ならあんたが付いてくれれば？あたしが変なことしないように見張ってたら良いじゃない」
こうなりゃ何としても構内に入って影の鞄を手にしなければ。「おい桜宮、どうした」
嗄れ声がして、桜宮と呼ばれた警官がハッと後ろを振り返る。
「お、大崎警部」
ごま塩頭の小柄な中年男性がじろじろと不躾な視線で奈緒を走査してくる。

「何だ、この嬢ちゃん」
「ここの生徒さんみたいなんですが、どうしても構内に入りたいと仰られまして、」
「何じろじろ見てんの」
まだ自分を見てくる大崎に、奈緒は臆面もなくガンを飛ばす。
「で、学生さんはなんで構内に入りたいんだ？」
「荷物を昨日忘れたの。貴重品が入ってるから、取りたいだけよ」
「ふうん。場所を教えてくれるか」
「何で」
「譲歩だよ。あんたを構内に入れる訳にはいかんのだよ」
「良いじゃない。何もしないっつってんだから」
大崎がため息をはく。
「悪いが信用はできんよ。する理由もないし」
奈緒は口元を歪める。「ケチ」
「…駄目なものは駄目なんだ。で、何処だ？」
「……二年D組。多分明らかに通学鞄って分かると思う。…紺色の肩掛けタイプ」
「あぁ、分かった。取ってくるから待ってろ」
大崎はそう言って、手をヒラヒラと振りながら構内へ入って行く。
奈緒はその背中を睨みつけながら見送り、彼の姿が完全に見えなくなると、桜宮という若い警官を見遣った。桜宮は既に自分の出番は済んだとでも思っているのか、またもとの能面のような表情になって直立不動の姿勢を取っていた。奈緒は大人しく大崎の帰りを待つことにした。

やがて五分経つか経たないかの内に、大崎が片手に紺色の鞄を持って戻って来た。間違いない、影の鞄だと奈緒は確認する。
「待たせた。これで合ってるか？」

奈緒はとりあえず軽く辞儀をして鞄を取ろうとしたが、大崎に避けられた。ムッとして大崎を睨みつけると、彼は肩を竦めて、
「こいつはお前さんの鞄じゃねえな。・・・持ち物の一つに名前があった。クレンカゲって読むのか？」
「・・・勝手に中を見たって訳？」
いい気持ちはしない。何の権限があってそんなことをする、と奈緒は内心で気色ばむ。
「これが本当にあんたのかどうか確認をさ」
「本人に了承を取る前にすること？」
「名前が女の子のものなら余り深く考えなかったとは思うが、クレンカゲって恐らく男の名前だろう？あんたの兄弟か何か？」
奈緒はさっさとこの場を立ち去りたかった。だが大崎の眼はじっと奈緒を捕らえて放さない。さすがに自分を御鶴城を殺した犯人だとは思っていないだろうが。
「あたしが盗もうとしたと思ってるの？ならあんたに持ってきてもらうのを断るでしょう、普通」
「・・・九連影。昨日の軽い聴取で聞いたんだが、こいつって昨日急に姿を消したんだってな」
ピクッと奈緒は片頬を引きつらせた。
「確か授業中に呼び出しがあって教室を出たって話だ。だが呼び出したといわれてる事務室の職員に訊いたら、九連君を呼び出したことはない・・・って言われてね」
「ふうん、」
「その九連影君は一体何処に行ってしまったんだろうね。・・・彼の鞄を取りに来るくらいだから、嬢ちゃんは九連影君と仲がよいんだろう？何か知らんかね」
（何時の間にか聴取に持ち込まれてる・・・・・食えないオッサンね）
「何も知りませんよ、あたしは」
大崎から鞄を引っ手繰るようにして奪い取る。

「あ、こら！」
「九連影とは知り合いだから、大丈夫です。なんなら誰か呼びましょうか？あたしと影が親しい事を知ってる人間を」
「しかし親しいってだけであんたがその九連影に頼まれて鞄を取りに来たっていう証拠にはならんだろう？」
「…そんなの知りません」
「じゃあなんで君は九連影君の鞄を取りに来たんだね。九連君に頼まれたんじゃないのか？」
影は容疑者にされているのか、と奈緒は唇を噛む。どう言えば煙にまけるかと考えた奈緒だったが、
「大崎警部！」
「あ？」
大崎が部下らしい刑事に呼ばれ、彼の注意が奈緒から逸れた。
（チャンス！）
「警部さんありがと！」
礼儀で言い、奈緒は脱兎の如く駆け出した。
「あ、こらっ」
「さよなら！」
大崎はぽかん、と見送るだけで奈緒を追って来ることはなかった。

## 第四十七話：生じ始める亀裂（前書き）

騙し騙しの友情を築いてきた二人に転換期が……。

## 第四十七話：生じ始める亀裂

奈緒は駅前まで来てようやく足を止めた。
「はっ、はっ、はあっ…。しんど……」
日頃の喫煙が祟ったのか、息切れが激しい。奈緒は壁にもたれて息を整えた。
（……ったく、なんで警察ってあぁも融通が利かないのよ）
影の鞄を見ながら、思う。影は昨日早退という扱いにはなっておらず、学校から消えたことになっている。事実を知る奈緒からしたら影がそうならざるを得なかったと思うが、内実を知らない者にとったら影が否応なしに怪しいと思うだろう。
（…実際問題、影の“体”が殺したことに違いはないんだものね……）
そう言えば九連にも事情説明しないといけないんだった、と奈緒は憂鬱な気持ちになる。面会時間はさすがにまだだから、一回家に戻ろう。　奈緒はそう決めて立ち上がった。と、
「奈緒？」
「ま、麻理花」
山城麻理花が私服姿で立っていた。
「あれ、奈緒、制服？」
「あ…あぁ、昨日学校飛び出したまま戻らなくて、その…」
思わずしどろもどろになる友人を気にした風もなく、麻理花はあぁ、と頷いた。
「事件のこと、知らなかったんだ？」
「そ、そう。学校行ったら警察がいてびっくりした…のよ。そこで事情聞いて、休校って言われて、」
「そっかぁ。私は野暮用があって、隣町に行くとこなの」
「そ、そう」
「あ、奈緒」

「な、なに？」
「昨日九連君の家に行った後、どうなったの？」
当然というば当然の問いに、奈緒は内心でびくついた。だが、そんなことはおくびにも出さず、さらりと嘘を言って退けた。
「ああ、九連いなかったのよ」
いつの間にこんなに嘘をつくのが得意になってしまったのだろう、と少し虚しくなる。
「そうなの？」
「そっ。だからあたしはすごすごと帰宅した訳」
「なぁんだ。てっきり九連君と一緒だったのかと思ってたよ」
全くの間違いじゃないわ、と奈緒は心中で思う。麻理花は見た目ほんわかしているが、意外と鋭いことを奈緒は知っている。
「あ、電車来ちゃう。奈緒、またね」
「ん。気をつけて」
満面の笑みで奈緒に応え、麻理花は構内に消えていく。
（…不審に思われてる…って訳でもなさそうね）
奈緒は内心で安堵のため息をつき、歩き出した。

奈緒は構内に消えたと思っていたが、麻理花は再び構内から出てきた。
「嘘は駄目だって大人に教わらなかったのかな」
侮蔑に満ちた眼で、麻理花は遠ざかっていく奈緒の背中を見送る。
「…私の九連君に手を出したら、殺してやるからな」
誰にも聞こえないくらいの小声で呟き、麻理花は今度こそ本当に構内へ消えた。

この時この瞬間から、奈緒と麻理花の間には少しずつ亀裂が生じ始

めていたーーー。

## 第四十八話：不安（前書き）

双子の間にも徐々に不協和が……。

## 第四十八話：不安

午前十一時。日向はまだ眠ったままの双子の弟を見守っていた。時間が経過する毎に血色は良くなるものの、普段から白い肌のせいか気休めにもならない。折れていない無事な右腕で、ひやりとした額を撫でてやる。

（早く起きて、笑って欲しい……。でも、起きたときの眼が赤かったら…）

怖い。見掛けは影で、ずっとそばにいたのに、今は影のことが凄く怖い。それに、御鶴城を殺したのは影……。

（違う、俺は絶対にそんなこと信じない……）

「ん、」

「っ！」

ビクッと日向は体を震わせた。

「にい…さん？」

影が軽く眼を開けて、日向を見上げていた。その眼は普段の黒曜石の如きもので、日向は我知らず安堵のため息を溢していた。

「か、影」

「……兄さん、おはよ…う」

影が緩く頬を浮かす。笑ったのだ、と気付くのに少し時間がかかった。

「…おはよう。眠れたか？」

「ん…。兄さんがいてくれたの、分かってたから。寝られたよ」

日向が再び安堵のため息をついたとき、ドアがノックされて看護師が入ってきた。三十代半ばくらいの小柄な女性で、穏やかな笑みを称えていた。

「あ、影くん起きたのね。お兄さんも嬉しそう」

人見知りしがちな影だが、それは病院関係者にも当てはまるらしい。日向の背後に身を隠そうと、シャツを掴む。それを見た笹原という

名札を付けた看護師は、あらぁと眼を丸くして朗らかな笑い声を上げた。
「いたいけな青少年を取って食おうだなんて思ってないから、そんな隠れたりしないで欲しいなぁ」
影は面食らったような顔で笹原を見る。
「ふふ。さて、影君。検温させてもらっていいかな」
「は、はい」
日向は席を外そうとしたが、それを笹原が止める。
「お兄さんもいていいわよ。というか居なさい」
「は、はあ」
「君がいたほうが弟さんも安心するみたいだからね。安心してリラックスしてくれないと正確な数値、出ないからね」
笹原が、影に体温計を差し出し、影はおずおずとそれを受け取る。
「日向君は、腕はどう？最初君の病室に姿がないから、お姉さん瞠目しちゃったわぁ」
「す、すみません」
お姉さん、に突っ込むべきかと思ったが取り敢えず謝っておく。
「ま、此処にいてくれたから良いけど」
日向は苦笑をし、不意に思った。笹原はどこまで知っているのだろう、と。芦原遊子のことは知っているのだろうか。訊きそうになって、影の視線に気付く。影は不安げな顔で日向を見つめていた。まるで日向が何を考えているか分かりきっているかのように。
（影の前で訊くのはまずそうだな。…後にしよう）
「３７℃か…。少し高いかな。体がだるいとかはない？頭痛がするとか」
「な、ない…です」
「かわいいなぁ」
「あ、あの？」
笹原がわしゃわしゃと髪を掻き回すので、影は眼を丸くして戸惑いを隠せない。

「痛いところもない？頬っぺたとか、他の傷のところとか」
影は顔を赤くしながら首を左右に振る。
「だ、大丈夫です」
「そう。良かった。後で担当医の御鶴城という者が来るから、診察して貰ってね？」
「っ！？」
影が御鶴城という名前に息を呑んだ。日向も愕然として笹原を凝視する。
「に、兄さん……」
影が不安げに差し出した手を力強く握ってやる。
「？どうしたの？」
不思議そうな笹原に、日向は意識的に動揺を抑えて訊いた。
「その御鶴城って、男の先生ですか？」
影の手の震えが大きくなる。
「大丈夫。女の先生だから。まだお若いけど、とても良い先生よ」
「そう、ですか」
ひどい偶然の一致だ、と思う。影は女医と聞いて安心したのか、手の震えは小さくなっていた。だが顔は蒼白く、不安そうな表情は変わらない。
「大丈夫。優しい方だから」
「は、はい」
「良いお返事。怪我もそこまで酷くないし、少なくとも明日には退院出来ると思うから」
「はい」
「じゃ、また覗くから」
笹原はにっこりと微笑み、病室を出て行った。
「影。大丈夫。女の先生だから。俺もいるから。な？」
「本当に？本当に僕と一緒に居てくれる？」
「居るから。だから落ち着いて」
「う、うん……」

影は日向から手を離すと、眼を伏せた。御鶴城に襲われたことを思い出しているのだろうか。何か、影の意識をそのことから遠ざける話題はないものか。考えるんだ。双子とはいえ兄貴だろ。影を笑わせるんだ！！

「兄さん、血が…」

気が付けば、影が日向に手を伸ばしていた。

「あ、」

思わず唇を噛み締めていたようで、切れた唇から血が滴っていたらしい。

「僕のせい…？」

「え、」

「何でもない……」

影は悲しげに眼を伏せ、シーツの裾をギュッと掴んだ。日向はかける言葉を失い、立ち尽くすしかなかった。

## 第四十九話：拉致

影の病室から出た笹原理恵子は、笑顔を引っ込めて無表情になった。院内でも使用可能に改良されているＰＨＳで御鶴城翔子医師に連絡を取る。相手は三コールで出た。

「笹原か。首尾は」

投げ遣りげな口調の声に、笹原は内心で苦笑する。

「先生の弟さんを殺したのは、九連影で間違いないようです」

「そう。今はどうしてる」

「兄の日向と影の病室に。先生の名前を聞いて可笑しいくらいに動揺していました」

「…遊子様に連れてくるよう言われているのは影の方だったな」

「はい。色々と知りたいことがあるようです」

少しの間があり、やがて翔子の呆れたようなため息が聞こえてきた。

「遊子様の仰る通りに。早い方が良いから、回診のときに確保するか」

「分かりました。では、後程」

「いつもすまんね」

「遊子様の我儘と道楽、それに先生の苦労性は昔からよく知ってますから」

違いない、と笑う翔子の声に、笹原は満足げな笑みを浮かべた。

「ぽっかりと開いた穴、ねぇ。出来の悪いホラー映画みたいだ」

「え、何か仰いましたか？」

大崎の独り言に、横で店屋物を頬張っていた部下の柊巡査が徐に顔を上げた。

「何でもないから、ぼろぼろ溢すな」
「す、すみません」
赤くなってお茶を啜る柊を、大崎は呆れ顔で見つめる。
（こいつが百戦錬磨の柊先輩の子供たぁね。世の中不思議なもんだ）
自分はどら焼を噛み下しながら、大崎は不思議といえば、と朝に出会った女子高生を思い出す。気が強そうで、でもどこか望洋としている……。何を考えているのか今一捉えにくいタイプだった。
（しかも、あの嬢ちゃんは何かを知っている）
大崎の直感がそう告げている。御鶴城を殺した、とまでは行かないが、おそらく氏殺害について何らかのことを知っているはずだ。九連影についても、何か知っている筈だ。
（まずはあの嬢ちゃんから攻めてみるか）
腹ごしらえを済ませた大崎は、柊を急かした後立ち上がった。

コンコン、という軽いノックの音がして、日向と影の間に走っていた微妙な空気が霧散する。
「は、はい」
「失礼するわね」
笹原を伴って現れたのは、背が高くすらりとした女性だった。墨のように黒い髪がさらりと流れている。くっきりとした二重の瞳が影を見た。
「初めまして。外科医であなたを担当してる御鶴城翔子です」
「あ、は、はい」
「で、あなたが双子のお兄さんね？」
日向はこくり、と頷く。
「あまり似てないのね。私の知り合いには双子はいないから、ちょっと興味があったのだけど」
そう言って微笑む。優しい雰囲気の人だな、と日向は安心して影を

見るが、影は身を固くして俯いている。どうしたんだろう、と日向は怪訝に思うが、本人のいる前でこの先生が怖いのかとは訊けない。
「触診するから、触らせてね」
「っ！！」
伸びてきた医師の指を拒むように、影が身を捩る。日向は慌てて影をたしなめようとする。
「おい、影どうしたんだよ。先生に失礼だろ」
「……」
「う～ん、私、怖い？」
単刀直入な質問に日向は驚いて医師を見るが、彼女は微笑んだままだ。だが彼女の背後にいる笹原の表情を見た途端、心臓が凍るような錯覚に陥った。笹原の顔には表情というものがなかった。色のない瞳を影に向け、口は苛立ちを示すかのように尖っている。
「ねぇ、私怖い？」
「いや、嫌だ……」
身を乗り出す御鶴城医師に対し、影は体を丸め逃れようとする。
「あ、あの先生、」
今はそっとしてほしい、といいかけた日向だったが、いきなり腹部に鈍痛を感じて息を詰めた。
「え、なっ…」
何が起こったのか、分からなかった。ただいつのまにか目の前にいた笹原に腹を殴られたらしかった。霞んでいく視界の中、御鶴城に両手を掴まれて抵抗する影が映る。
「か……げ、」
「にいさ…っ！」
「少し弟、借りるよ」
「少しだけ、寝てなさい」
四者の言葉が同時に交差する。
（くそっ…、影を放せ…）
あの赤い眼はこんなときに何をしているんだ、と日向は思った。

「じゃあね」
笹原の声がした瞬間、日向は彼女の腕に崩れ落ちた。
「兄さんっ…！嫌だ、放してっ…！」
涙でぐしゃぐしゃになった顔を歪めて抵抗するが、全く敵わない。
「お前に会いたいという方がいてね。少し辛抱してくれ」
「嫌だっ！！」
「笹原」
「はぁい」
笹原は嬉々とした表情で立ち上がると、ポケットから注射器を取り出した。
「！」
暴れるが、針は容赦なく近づいて来る。
「お願いだから、止めてっ……」
「はい、行きます！」
影の細い腕に針が突き立てられ、中に入っているアンプルが注入される。
「少しだけ、寝てな」
「う…、」
影の体がぐにゃりと弛緩し、御鶴城の腕に倒れ込む。御鶴城医師は無表情で影を見下ろす。
「あんな弟でも肉親なのにかわりはなかった」
「……っ、」
影が息を呑む気配。
「おやすみ」
体を抱え上げられながらも、影に抵抗する術はなかった。
「に…いさ、ん……助け、て……」
床で意識を失っている日向に掠れた声で助けを求めるだけで精一杯で、しかもその声は日向には届かない。

## 第四十九話：拉致（後書き）

どうなるどうする（えっ…？）次で五十話…。伏線の回収が全く出来てませんね……。

## 第五十話：独占欲と悲嘆

「軽いな」
気を失った影を抱えた翔子がぽつりと呟く。
「ねえ先生」
「ん？」
頬を赤くした笹原が、こちらも気を失った日向を地面に寝かせたままに翔子を呼ぶ。翔子がそちらを見遣れば、笹原は日向にキスをしていた。だが翔子は驚くわけでもなく、苦笑する。
「それが気に入ったか」
「はい。頂いていいですか？」
「私は構わないが。あまりからかってやるなよ」
「はい」
「私はこれを遊子様にお届けして来る。あとは頼むぞ」
「行ってらっしゃいませ、先生」
礼をした後は、笹原は日向を影のベッドに載せると、その上に馬乗りになった。翔子ははぁ、とため息をつくと影を抱えて病室を出た。
「いただきまぁす」
ぺろり、と舌なめずりして笹原は日向のシャツに手をかける。
「あ、そういや左腕折れてるんだったなぁ。無理出来ないじゃん」
詰まんない、と鼻を鳴らしながらも笹原は日向のシャツの前を開けていく。
「ふぅん、意外と白い肌してるんだあ」
とろん、とした眼で、笹原が日向の肌を観察する。
「ふふ。私は兄貴のほうが好みだわぁ」
つう、と肌をなぞる。恍惚とした笹原と、初めて影と話したときの穏やかな顔の笹原は全く別物に見える。
「あまりからかうな、とは言われたけど、まぁ良いか」
にやり、と微笑んで笹原はズボンにまで手を伸ばそうとする。

「止めなさい」
だが凛、とした制止に手を止めることになる。
「彼は誰にも汚させないわよ、笹原さん」
「……分かったわよ」
小さく吐き捨て、笹原は日向の上から体を退かせる。そして侵入者を見る。
「彼は私のもの…。そして、私は彼の苦しむ顔が見たいの。彼が一番苦しいと感じるもの、それは半身が苦しむこと」
歌うように、彼女は告げる。愛しき人の額を撫で、ゆったりと微笑む。普段は話すだけで精一杯だが、今は日向は寝ているから。
「相変わらず悪趣味だね、あんた」
「笹原さんほどじゃないですよ」
二人はにらみ合い、だがすぐに眼を逸らす。
「とにかく、私がいるまえでこの人に手を出すのは許さないから」
「分かったって。しつこいなぁ」
笹原は面倒臭そうに片手を左右に振り、着衣の裾を直した。そして不意に、
「…にしても珍しいね。あんたが他人に執着するなんてさ」
と愉快そうに笑う。だがそんな嘲笑にも余裕の笑みで応える。
「それだけの人だから」
「はいはい」
笹原は何も言う気をなくしたらしい。処置なし、といったふうに肩を竦めて病室を出ていく。
「そう。あなたは私だけのもの」
細く白い指で、くせのある髪をとかす。ふっ、と耳に息を吹き掛けると、
「ん、」
と意識を無くしながらにして艶のある声を上げた。息の主は、満足気に微笑みを溢す。
「九連君、大好きよ。あなたは、私のもの」

山城麻理花は愛しそうに告白し、日向の唇にキスを落とす。日向は目覚めない。

「・・・・・・・・」

碧石玲治は眼を覚ました。どうやら二度寝をしていたらしい。頭と体が重い。

「兄さん、」

兄はどうしたのだろう。遊子に酷いことをされていないだろうか。

「・・・・・・・・」

玲治はベッドの上から鉄扉を見た。開けようと思えば自身の手で開けられる扉。必要なのは自分の勇気だけ。ごくり、と咽を鳴らして玲治はベッドを軋ませる。そっと床に降り立ち、冷たい床に眉を顰める。それでも歩き出し、鉄扉のノブに手をかける。

「・・・・・・・・」

勇気を出し、ノブを廻して手前に引くと、鉄扉は重厚な音を立てて開いた。当然のことなのに、酷い倦怠感が玲治を襲う。ゆっくり体をドアの外に出せば、左右に広がるリノリウムの床。しん、として何の物音もしない。

足を踏み出し、歩き出す。裸足のため足裏にダイレクトに床の冷たさが響く。だが玲治は歩みを止めない。自分の意志で、歩く。

「兄さん、何処・・・・・・？」

迷子になった幼子のように呟く。今にも崩れ落ちてしまいそうな気持ちを叱咤して、兄を探して歩く。廃病院を芦原が買い取って改築したものの、病院の名残は残っている。ときたま誰かに見られているような感覚を覚え、玲治は不安げに周囲を見渡す。この現象を、

遊子などは死者の霊が成仏できずにお前を見ているのだと玲治に言って彼を不安がらせることが多々あった。
「にいさ、」
「何だ」
「わっ！！」
玲治に声がかかったのは、自分がいた部屋を出て三分程闇雲に歩いたときだった。「兄さん！」
佳那汰が無事だったことに、玲治は今までの不安も忘れて彼に飛びついていた。嬉しさに我を忘れていた。佳那汰は抵抗せず、玲治が飛びついてきたのを受け止める。それがますます嬉しさを増幅させ、玲治は涙すら出てきた。漸く兄に受け入れてもらえたと思ったから。
「兄さん、大丈夫？あの人に何もされてない？痛いところはない？」
「あぁ。何もされてないよ」
穏やかな声。最近は尖った声しか聞いていなかった。玲治の胸に温かいものが広がる。
「なぁ玲治」
「な、なに？」
呼びかけに、玲治はパッと身を放した。少し大げさだったかと内心で恥ずかしくなる。
「質問があるんだけど」
「？」
「陽の携帯を何処で手に入れた？」
「え？」
玲治の腕を、妙に熱い佳那汰の手が掴む。
「に、兄さん痛い、」
「答えろ。遊子様が知りたがっておいでだ」
ぎりっ、と腕を掴む手の力が強くなる。玲治は痛みに顔を顰め、腰を引く。佳那汰の視線が厳しさを増し、玲治の心の内奥を見透かすかのように一時も視線を逸らさない。
「答えろ。このまま腕をへし折っても良いんだからな」

玲治君、僕の最期の頼みだ。この携帯は、君に持っていてもらいたいんだ。絶対、遊子様には渡さないでくれ。そしていつか奈緒ちゃんに会うことがあれば、彼女に渡して欲しい。酷い事をしたのに、謝れないまま死ぬことになった僕を許して欲しいと、言っていたと、どうか伝えて・・・・・。

「言え。言えよ!!」
ドンッと体を押され、腕も解放された玲治は、床に腰から倒れる。
「いっ、」
「言え!!」
「・・・・・・っ!!」
首を掴まれ、躊躇なく締められる。
「遊子様が知りたがっておいでだっ!言えよ!!」
佳那汰の眼は怒りに支配され、口角泡を飛ばさんの勢いで捲し立てる。玲治は首を掴む手に己の手を添えて、喘ぐしか出来ずにいる。
「はっ、・・・・・にいさ・・・・苦しっ・・・・・・、」
「言え、言えよ!!ほら、僕が喜ぶことをしろよっ!」
「ちがっ、」
そうじゃない。そういうことで喜んで欲しい訳じゃない。もっと、もっと純粋なことで喜んで欲しいんだよ。ーーーーその声は佳那汰には届かない。
「何が違う!」
「・・・・・・うっ、はあっ・・・・・・・」

でももし、もしこのことで君に危険が及ぶようなら、無理はしなくていい。自分のことを、大事にしてくれて良いから。

「った、」
「あ？」
「陽さん本人、から……渡され…た」
苦しい息の下で、玲治は喘ぎ喘ぎ言う。
「何と言って？」
「ゆ、遊子様には絶対渡すなって……いつ、いつか奈緒さ…ん、に会ったら」
佳那汰が玲治を解放する。
「続けろ」
はあはあ、と荒い息をつきながら、玲治は涙の浮いた眼で兄を見る。恐怖に身が竦む。後ろに下がろうとして、佳那汰に片足を踏みつけられる。
「う……っう、」
もうダメだ、と玲治は絶望に襲われる。もうこの人とは兄弟とは言えないのだと。どれだけ弟として兄を想っても兄には伝わらないのだと。佳那汰が怒りに燃えた瞳で玲治を見下ろしている。
「逃げるな。続けろ」
「いっ、いつか奈緒さんに会ったら、奈緒さんに渡してって、」
「それだけか」
「そ、それだけ。本当に、本当にそれだけ……」
「そうか。分かった」
憑き物が落ちたかのように佳那汰は無表情になり、くるっと玲治に背を向ける。玲治は我知らず兄を呼んだ。
「兄さん、待って！！」
だが兄の歩みは止まらない。あの優しい笑顔は、幻だったのか。
「兄さん…っ！」
急に咳が出る。少量ながら吐血する。

「ねが、いだよ…、待って…、待ってよ……」
必死の懇願は、兄には一片も届かない。
「兄さん！！」
ついにはその背は角を折れ、玲治からは見えなくなった。
「……待って、」
霞んでいく視界の中、それでも玲治は兄を呼んだ。決して戻ってくれないことを知りながら。

## 第五十話：独占欲と悲嘆（後書き）

歪んだ人が多いですね～（汗）

## 第五十一話：胸を抉る慟哭（前書き）

影と玲治が本当に不憫ですね……。いじめすぎでしょうか？

## 第五十一話：胸を抉る慟哭

横たわる日向の額を撫でながら、麻理花は物思いに耽っていた。
「ねぇ九連君、私と奈緒、どっちが好き？それとも、別に好きな人がいるの？」
独占欲の弱い麻理花にしては珍しく、九連日向という存在はどうしても欲しいものになっていた。どこがどう、というのではないけれど、いつも側に居て、自分のためだけに笑って欲しいと思う。奈緒も、影も、他の人間も、全てを忘れて、山城麻理花という人間だけを愛して欲しいと思う。
「九連君、それって、無理なお願いかな」
滑らかな頬に、そっとキスをする。
「お願い、私だけを見て。他の人のことは、全部忘れて……」

「蓮本さんのことかなあ」
今朝の女子高生について調べていた大崎は、ようやく月舘高校の生徒と町中で巡り合った。教師に訊けば手っ取り早いのだろうが、得てして学生のことは学生同士のほうが知り得ているものなのである。だから大崎は高校周辺を歩き回り、月舘高生を探した。
「蓮本？」
あの女子高生の名前を教えてくれたのは、駅近くの本屋でアルバイトをしている少女だった。訊けば家計の手助けという理由で学校側にも認知されているとのこと。「二年D組の蓮本さん。下の名前は知らないけど、名字はあってると思いますよ。彼女有名だから」
従業員の控え室脇で、大崎は少女ー下総由紀子から話を聞いていた。
「有名？」
「あ、刑事さんに言っても良いのかな」
由紀子は眉を寄せるが、この際話してもらわねば。

「どう有名？」
「私が言ったって蓮本さんには言わないで下さいね。面識ないけど、私が言ったのバレたら何か怖いし」
真顔で言う由紀子に、大崎は苦笑で応えた。
「あの、ですね。あの人、構内にも拘わらず普通に煙草吸ってるんですよ」
「学内で？」
大崎は呆気に取られる。
「先生の前でも吸ったことあるみたいです。噂ですけど」
「教師は注意しないのか」
「あまり詳しくは知らないけど、しない…というか蓮本さんが怖くて注意できないとか何とか……」
大崎は呆れて瞬きも忘れる。だが本来訊きたかったことをまだ訊いていないことを思いだし、気を取り直して質問を再開する。
「で、その蓮本さんだけどクレンカゲ君とは仲が良いのかな？あ、クレンカゲ君、知ってる？」
これには由紀子も自信満々といった風に頷く。
「九連影君。はい、知ってます。D組の人で、双子のお兄さんがいますよね」
「双子？」
「はい。九連日向君、九連影君。双子だけどあまり似てないみたいですね。廊下とかで、たまに話してる九連君と蓮本さんを見掛けますよ」
「仲が良いの？」
「う～ん、どちらかと言えば日向君、お兄さんのほうと仲良いように思いますけど」
あまり詳しくないようで、由紀子の物言いは煮え切らない。
「最後に一つ。蓮本さんでも九連君でも、彼らの共通の友人なんていないかな。友人とまでいかなくても、知人でもいいんだ」
熱心な大崎に怪訝そうな表情を浮かべる由紀子だが、応えてくれた。

「う～ん、麻理花ちゃんかな」
「マリカちゃん？」
「私、学校で美術部なんですけど山城麻理花っていう子と友達なんです。D組だし、確か何か蓮本さんや九連君の話を聞いたことがあったと思います」
「漢字はどう書くの？」
「えぇっと、山にお城の城に、麻薬の麻に、理科の理、草冠の化けるほうの花で山城麻理花です」
麻薬の麻とはすごい、と大崎は苦笑する。
「その山城さんの家、分かるかな」
「はい。ちょっと待ってて下さい」
由紀子は控え室に入って行く。恐らく手帳か何かにメモしていて、それを取りに行ったのだろう。
（蓮本に、九連兄弟、そして山城麻理花。この四人に話を聞かねば、な）
学校の現場の指揮は同僚に任せるしかないな、と大崎は小さく息をついた。

「これはまた…。お前は床に這いつくばるのが好きだな」
「……」
朦朧とする意識の中、玲治はその声に顔を上げた。スーツ姿の遊子が、ニヤニヤと品のない笑みを浮かべて玲治を見下ろしていた。玲治は怒りを込めて彼女を見上げる。
「な…に、した」
「あぁ？聞こえんな」
「にっ、いさんに何をしたっ……！」
「何にもしてないさ。あれはお前を憎みきっている。ただそれだけのこと…」

「そ…なこと、な…い。…って、さっ、き笑って…くれた」
「ふん。家族を殺しておいてその言い種か。あれが聞いたら怒るだろうな」
「…！そ、れは」
今も色鮮やかに蘇る。鮮血の海に沈む、両親と妹。その死を嬉々として受け入れる自分。
（あ、れ…？あの時兄さんはどこにいたんだろう）
急にそのことが気にかかった。だがそのことを考える猶予を、遊子は与えてはくれなかった。しゃがみ込み、玲治の耳元で小さく囁く。
「陽の携帯の件、あれから聞いたよ」
「っ！」
「陽も貴様もふざけたことしてくれるじゃないか？芦原の温床でぬくぬくと育てられた分際で、許しがたい狼藉じゃないか、ん？」
「……っ、」
「激情にかられて壊してしまったが、携帯には一体何が残されていたのか。気になるな。…ところで私が携帯を壊す羽目になったのは誰のせいだったかな」
ぶるっ、と玲治は身を大きく震わせた。遊子から逃れるように、顔を背ける。
「確かお前だったよなぁ？」
「……っ、」
遊子に何をされるか、玲治は恐怖のただ中にいた。浅く早い呼吸しかできない。そんな玲治を遊子は、
「遊子様」
背後から聞こえて来た静かな声に振り返った。
「九連影をお連れしました」
長身の女性、御鶴城翔子が一人の少年を抱えて立っていた。いつのまに迫っていたのか、玲治はおろか遊子ですらその存在に全く気付いていなかった。御鶴城翔子の温度のない眼が玲治をとらえるが、一切興味はないらしくすぐに遊子に戻される。

「そう、ご苦労様…。ん、泣いた痕があるが？」
「…まぁ兄から無理矢理引き離しましたし…。どうも私が怖かったようで」
「ふぅん、可愛いな」
遊子は真っ赤な舌で影の頬を舐める。玲治がぞっ、と背筋を粟立たせる中、遊子に舌を這わされた少年がぴくりと身動ぎした。
「うっ、ん」
色の白い、ほっそりとした少年だった。何処かで会ったような気がしたが、気のせいだろうかと玲治は思う。
「おや、起きたか。大事なゲスト様」
「だ…れ？」
薬でも含まされたのか、少年はぼんやりとした様子で遊子を見上げている。
「初めて…ではないが、」
遊子の指が少年の顎をぐいっと持ち上げ、じぃっと少年の眼を見つめる。
「今日の眼は赤くないんだな。なら初めましてだな、九連影君」
「赤く…？」
「御鶴城先生を殺した日だよ」
「っ！？」
少年が半開きだった眼を見開き息を呑んだが、それは玲治も同じだった。
（殺した？御鶴城…）
ズキンッ、と頭が痛む。何かがちくちくと脳髄を刺しているような感覚。
「いや、やだ、」
少年が小さく震え始める。遊子の笑みが深くなる。
「玲治、立て」
立つな、と誰かが叫ぶ。玲治はその叫びに従い、這ってでも逃げようとする。だが敢えなく遊子に襟首を掴まれ、無理矢理立たされる。

「っ…」
少年の怯えた眼と玲治の眼が合う。
「あ、」
少年の蒼白な顔に、明らかな恐怖心が宿る。
「み…つるぎ、先生っ」
「……」
「お前はこいつに閉じ込められただろう？そしてそこで御鶴城に、」
少年が御鶴城翔子の腕の中で耳を塞ぐ。
「やだ、止めてっ！！」
「……犯されかけたろう？」
「いや、嫌だ、」
「…ふふ、ふはははははっ！！本当に可愛い声で哭いてくれるねっ！あの変態があぁもお前に入れ込んだ理由が分かるというものだっ！！」
遊子は素直な子供のようにからからと笑った。少年ー九連影が涙を浮かべて苦し気に眼を閉じる。
「に、っさん、兄さん……」
「御鶴城、連れて来なさい」
「はい」
遊子は掴んだままだった玲治の襟首を放すと、颯爽と歩き出した。
御鶴城翔子が彼女に付き従い去っていく姿を、玲治はへたりこんで見送った。九連影の慟哭が、心を抉った、気がした。

## 第五十二話：執着（前書き）

拉致された影は……。

## 第五十二話：執着

笹原は獲物を取られて苛立ちの渦中にいた。だが職場の仲間にはいつも通りの温厚な笑みを浮かべて挨拶をする。
（はぁ、あいつが邪魔しなけりゃ、九連日向君と楽しいことできたのにな）
弟のほうは遊子様に連れていかれたしな、と笹原は鬱々としたため息をつく。
「笹原さん、こっち手伝ってもらえる？」
「あ、は～い」
頭の中ではふしだらなことを考えながら、笹原は人懐こい笑みで呼び声に応えたのだった。

「ん、」
「あ」
ぴくり、と日向の眉が震えて、麻理花は思わず声を漏らした。今日向に自分を認識されるわけにはいかない。正体を知られないままにしなければならないことがまだある。自分の本当の姿を日向に晒せるのはまだまだ先なのだ。麻理花は名残惜しげに日向の手を放した。
「いつか、本当の私を見てね。奈緒でも影君でもない、本当の私を、見てね」
額に静かにキスを落とし、麻理花はそっと微笑む。
「さぁ、半身は囚われてしまったわよ九連君。どうするの？」

一体何をされるのか、影は怖くて仕方なかった。

（兄さん…、）
笹原という看護師に腹を殴られ、気絶した日向は大丈夫なのだろうか。
（一体僕に何の用なんだろう……）
椅子に座らされ、女医が何歩か後ろに下がる。逃げ出そうと思えば逃げ出せるのに、体が言うことを聞かない。何より、
（逃げる素振りを見せただけで、きっと痛いことをされる……）
そう思うだけで、泣きたくなる。
「あ、あのっ」
「ん？」
芦原遊子が満面の笑顔で振り返る。
「ぼ、僕に何の用…ですか？」
部屋は何のへんてつもない、普通のつくりであまり広くはない。影と遊子が座っている回転椅子と、シンプルなパイプベッドが一つあるだけ。窓がない上に狭いため、影は息苦しさに喘いだ。
「っ、はっ、」
「少し問答をしてみたいと思ってね。君に興味があるんだ」
「興味……？」
「質問一。名前は？」
影の不審げな顔に構わず、遊子が問いを発する。名前も何も、呼んだじゃないか、と思ったのだ。その隙を突かれた。後ろにいた女医に、背後から顎を上げられた。
「んっ…」
「答えなさい」
「か、げ……九連影で、す」
顎を上げられたまま、第二の問いが投げ掛けられる。
「家族構成は？」
「っ、に、兄さんが一人、両親…は、かっ、いがいに、」
「兄の名は？」
「ひ、なた。九連日向……」

「……意識を急に無くしたりすることは？」
「……え？」
「誰かが自分の中にいると感じたことは？」
「あ、あの、それ、どういう意味ですか？」
影が戸惑いも露に尋ねると、
「ひあっ……！」
女医がいきなり首筋を撫でてきた。急な刺激に、影は思わず声を上げる。
「質問しているのは遊子様だ。貴様ではない」
低い声が心を震わせる。
「ご、ごめんなさいっ」
「御鶴城、そんなにいじめてやるな。これから私がいじめてやるんだからな、楽しみが減る」
「はい」
遊子はよろしい、と一つ頷くと質問を再開する。
「誰かに見られていると感じることは」
影は首を左右に何度も振る。
「最近体調におかしなところは？」
「な、ないです……」
「眼が赤くなることは？」
話が徐々におかしな方向に流れていく。影はまた首を振る。「……男と抱き合ったことはあるか？」
「っ！！」
影の脳裏に、会議室に閉じ込められたときの情景が蘇る。伸びてきた腕。光る白刃。餓えた獣の眼。
「……っ！！」
吐き気に、影は前屈みになる。
「感想は？」
感想？そんなの決まってる。気持ち悪かった。足をはいまわる手。引きちぎられたシャツの前。白刃が皮膚を裂く。生温かい舌が皮膚

を這う。前を握られる。
「嫌だ、もう止めてっ！！」
眼を閉じ、耳を塞ぎ、影は叫ぶ。涙が止めどなく流れる。
「…おや」
遊子はあることに気付き、眉をくいっ、と上げる。好奇心にあふれた無邪気な瞳で、それを注視する。影の瞳から流れた涙の色が……赤い。
「……いらっしゃいませ」
不敵に笑む遊子に、俯いたままの影が小さく呟く。
「…全く、最悪な目覚めだ」
「その最悪に関わることが出来て、私は光栄に思うよ。赤い眼の君」
「うるさい、」
顔を上げた影の眼は赤く、不機嫌そうに目元から口元まで歪めている。煩わしそうに涙の痕を腕で拭う。
「んで、おれに何のよう？眠いんだけど」
「少し君と話したくてね。物凄く興味があるんだよ」
「おれはあんたに興味なんか更々ないけどな」
その言葉に引っ掛かったのか、女医が影に手を出そうとする。
「御鶴城、やめな」
だが遊子の一喝に手を引っ込めた。無表情に、微かに覗く苛立ち。それを知ってか知らずか、遊子は苦笑する。「…で、おれ、てか影を拉致って、心抉ってまで、あんたは何がしたいの？」
「君と手っ取り早く話せる方法はこれしかないような気がしてね。影くんの窮地に君は表れるようだしねぇ」
影はムッとしたように眼を細める。
「……」
「反論はなし、みたいだね」
「一つ訊かせろ」
「ん？」
「…日向は、あいつには手を出してないだろうな。あんたが興味あ

るのはおれだけなんだろ」
遊子は愉快げに口元を緩める。
「さぁ。あっちは笹原に任せてるから」
「っ、」
思わず立ち上がった影に、後ろから女医の声が飛ぶ。
「…あの方がいるから問題はない」
「あの方…？」
「九連日向をとても好いておられる方だ。その方がいれば、九連日向は安全と思ってくれて良い。九連日向を傷つける者は、その方が何人たりとも許さないだろうからな」
影は怪訝そうな顔で御鶴城を仰いだが、御鶴城は無表情で見返すだけだ。影ははぁ、と呆れたため息をはく。「教える気はないってことか。人を拉致るだけ拉致っといて適当だな」
「ありがとう」
「褒めてないぜ、おれは」
影はぼりぼりと面倒臭そうに頭を掻く。
「とにかく、日向には手を出すなよ」
「随分ご執心だな、兄貴に」
遊子の言葉に影は虚を突かれたような顔をする。
「……別に普通だろ。肉親なんだし」
「肉親…ね。本当にそれだけ？」
「……」
影は遊子から眼を逸らす。何かを隠しているのは明白だが、影は口を開こうとしない。
「まぁいいか。制限時間がありそうだし、まだ訊きたいこともあるからな」
遊子の愉快げな声に、影はあからさまな舌打ちを残した。

## 第五十三話：御鶴城姉弟

「ん…？」
眼を覚ました日向が一番に感じたのは、どうしようもない気だるさだった。ついで、違和感。
「影…？」
双子の弟の姿がない。
「影、影！？」
乱れたベッドが不安を煽る。どうして自分が寝て、影はいない。何で、
「いっ、」
いきなり右側肋骨あたりが痛んだ。“痣”のあるあたりだ。
「っんだよ、くそっ！」
あまりの痛みに、日向は苛立った声を上げる。
「影っ……」

「ぐっ、今かよっ…」
呻いて身を屈める影を、遊子は実験を眺める子供のように好奇心に満ちた眼で眺めていた。影は臍の左横あたりを押さえている。腹が痛いのか、尋常ではない発汗が彼を襲う。
「まだ戻るな…っ！お前みたいな弱虫は引っ込んでろっ！」
苛立った口調で“誰か”を叱責する。
（…この場合、誰か、とは影のことか）
女医がそう思っていると、遊子が動いた。身を固くする影の服の前をたくしあげたのだ。
「これは……痣か？」
怪訝そうな声。遊子の冷たい指が不定形な痣に軽く触れた瞬間ーー

ー影がビクンッ！と体を強く痙攣させた、と同時に指先がビリッと痺れて遊子は眉をしかめた。指先に熱が発生する。
「触るな……」
強気な態度から一転、弱々しく言う。
「これは痣だな」
「んなのおれが一番知ってる」
呻き声を上げながらも、影は吐き捨てた。
「痛むのか？」
「……時々な」
「原因は？」
「これが出来た原因？」
「それもある。そして、何故痛むのかも、だ」
影は遊子を睨みながら口を閉ざす。言いたくないから言わないのか、本当に知らないのか。
「……私も気になっていた。同じ痣は、兄貴にもあったぞ」
女医の言葉に、影が余計なことを言うな…というように唇を噛んで彼女を見遣った。案の定、遊子が眼を光らせて話しに加担してきた。楽しくて仕方なさそうに微笑んで。
「双子の兄弟で同じ痣、か。やはり君たちは面白いな……」
「……」
「兄貴も連れて来ましょうか」
女医がとんでもないことを言い出したので、影はぎろりと鋭い目付きで彼女を睨んだ。赤い眼と合わさって、酷く暴力的な視線だったが、女医には何の効果もないようだった。女医は静かに影を見返すだけだ。
「お前、おれの話をきいてなかったのか？日向には手を出すな、と言った」
「まぁまぁそんなに怒るな。可愛い顔が台無しだ」
「ふざけるなっ！勝手に他人を拉致っといて勝手なこと言いやがって…！！」

「本人が承知の上の拐い（さらい）は拉致などと言わないのよ、九連影君。勝手に拐うから拉致なのよ」
「勝手なことばっかり言いやがって！いい加減我慢の限界だ、おれを早く此処から出しやがれ！！」
いきり立つ影だが、再び“痣”の部分に激痛が走って蹲ってしまう。
「っ、くそっ…」
「痛み止め、やろうか？」
「要るか。お前から貰ったら市販薬すら毒物になるに決まってる」
「お前、」
遊子を愚弄されたと思ったのだろう、女医が影に手を伸ばして掴みかかろうとする。
「御鶴城、部屋を出るか？」
「……すみません」
遊子はふぅ、と軽く息をつく。
「九連影。その痛みは、お前と普段の影が成り代わるときに発生するのか？」
「……どうかな」
「ふむ。素直に話す気はない……か」
遊子は影の手首を引いて、顔を近付ける。
「っ、」
「やはり鍵は兄貴か。ふむ、兄貴にも興味が湧いてきた」
「お前、おれの話を……っ、」
「聞いてるさ。聞いてるからこそ、さ」
「放せ！」
慌てて遊子の手を払う影を、彼女はふふふっ、と笑う。
「さっきから何なんだ、おれにどうしろって言うんだっ！！」
「何もする必要はないさ。ただ話がしたい……ただ正直に、ね」
「おれは話すことなんかない！帰らせろっ」
ついに我慢も限界を越えた影は、椅子を蹴り倒してドアに手を伸ばす。が、

「御鶴城、彼を帰すな」
「はい」
御鶴城が動く。影を羽交い締めにしたのだ。
「放せよっ！！」
「……御鶴城を殺したわりには非力だな。異能力を顕現させるのに何かが足りないのか？」
「……」
「御鶴城の腹に穴を開けたのはお前だろう？どんな力を使ったんだ？」
「……」
「ふぅ。どうも君は口が固いみたいだな…。意固地な男は嫌いじゃないが、度が過ぎるのも困りものだな」
影は御鶴城の戒めを払うと、遊子を真正面から睨み付けた。ぴりっ、と空気中に電気が走ったかのような緊張感が走る。
「…悪いがおれは“表”と違って短気なんだけど、知ってた？」
赤い眼が、喜悦に歪む。顔を覆った手に力がこもる。遊子が微笑む。
「とっくに気付いてたよ、“裏”の影君」
「あぁ、そうかい」
影は口元を歪めて、くいっと右手の五指全てを曲げた。すると、
「！」
ぱきん、という何かに罅が入るような軽い音がした後、鉄扉の中心に中円の穴が生まれた。切り取られた箇所は部屋の外側にガタン、と落ちる。
「どうしてこんなことが出来るのかとか野暮なことは訊くなよ」
「ほう…。こうやってあの変態を殺したのか」
「あぁそうだよ。おれを襲って盛（さか）ってやがるから天誅を与えてやったのさ」
「天誅、ね」
女医がぽつりと囁く。影は彼女を見遣り、
「何だ？弟を殺された復讐でもしようってか？」

好戦的なことを言ってのける。だが女医が次いで発した言葉には驚かされる。
「復讐なんてしないさーあれを殺してくれて感謝すらしてるからな」
「は？…弟だろ？」
「兄弟は誰でも彼でも仲良しだとは思うなよ、九連影」
「……」
「あれはどうも昔から同性にしか興味がなくてね。それ自体は本人の自由だからあれこれ口出しはしなかった。でも、君みたいな子を何度か襲ってね……警察沙汰に何度なったか知れない。あれは一族にとって恥さらしであると同時にお荷物だった。御鶴城家は古い家柄だから、同性同士の恋愛すら白眼視されていたしね」
息継ぎをほとんどせずに、女医は語った。眼は何処か虚ろで。
「新ためて礼を言うよ。あれを殺してくれてありがとう」
「っ！」
中の“表”が悲痛な叫びを上げる。
「そんなの、間違ってる。間違ってます……」
弱々しげながら、相手に何かを伝えようとする気持ちがこもった声音で影が言う。気付けば、影の眼は黒に戻っていた。いつの間に、とさすがの遊子も驚く。
「何が」
女医は気付かないのか、影に問いかける。
「た、確かに御鶴城先生はぼ、僕を襲って来て、怖くて、でも、弟なのに、」
「……」
「あなたが御鶴城先生にたくさん迷惑をかけられたのも、分かりました。でも、」
「お前に何が分かる」
「んうっ……！」
口を覆われ、尋常ではない力で体を浮かされる。影は息苦しさにもがく。足の指先が床を擦るがそれだけだ。

「…っ、んんっ」
「貴様に何が分かる！あんな弟を持った私の不幸が貴様に分かるか！！」
遊子は止めない。苦悶に顔を歪める少年を楽し気に観察しているだけだ。影は心の中、兄に助けを求める。
（助けて、……兄さん、助けてっ……！！）

## 第五十四話：完璧な演技（前書き）

麻理花の本性だだもれの回です……。

## 第五十四話：完璧な演技

「？」
病院を出て真っ直ぐ帰宅した山城麻理花だったが、自宅前に一人の男が立っているので眉を寄せた。
（あれは…刑事？）
御鶴城の死体の第一発見者である麻理花に聴取した刑事ではないが、確か構内を警官とうろついていたはずだ。背の低いごま塩頭の中年。
「あの、うちに何か」
「あ、君が山城麻理花さん？」
なかなかにハスキーボイスで、外見と似合わないな、と麻理花は失礼なことを思う。
「そう、です」
「そうか、どこかで聞いたような名前だと思ってたけど、君は御鶴城先生を見つけてくれた人だよね？」
何だ、御鶴城の件で聴取に来たわけではないのか、と麻理花は心中で拍子抜けする。
「そうです…けど」
「そんなに警戒しないで…。今日は、九連日向君・影君のことについて訊きたいだけなんだ」
（！？九連君？）
「君がその二人と親しいと聞いてね」
「親しい…。まぁそうなのかな」
親しいというより麻理花が日向に恋慕を抱いているだけなのだが。
一体刑事が彼らに何の用なんだろう。
「九連君たちが、何か？御鶴城先生のことで疑われてるんですか？」
「疑ってはいないよ。ただ先生が殺された日にいきなり学校からいなくなってるのが彼なんだ。だから理由を知らないかなって」
途端、麻理花の中で凶暴な感情が芽吹く。あいつか、と思う。

（普段から九連君に迷惑かけてるくせに、こんなときまで…っ！）
「早退…でなくてですか？」
影なら御鶴城に会議室で襲われて裸にひんむかれそうになってましたよ？と言いたかった。だから逆上して腹に穴を開けて殺してましたよ。だから逮捕して、ブタ箱にぶちこんでやって下さい。そうしたら、きっと九連君は私だけを見てくれるから……。
「届けが出てなくてね…。それに午後の授業中に放送で呼び出しがあって、それがみんなが影君を見た最後だった。放送は事務の人の声だったらしいが、影君を呼び出すような放送はしていないと言う。影君は放送を聞いて何処へ行ってしまったんだろう？」
（だから会議室だよ！この無能刑事！！）
心中で刑事を罵りながら、麻理花は軽く小首を傾げた。
「わ、私は知らないですけど……」
演技は昔から得意だ。麻理花はあっさりと嘘をつく。刑事が信じたかどうかは分からないが、
「そうか」
とあっさり引き下がる。
「九連君たちを探してるんですか？」「探している…というより、いや探していると言った方が良いのか……」
煮えきらない態度に、麻理花は苛立つ。表面的には不安げな顔を崩さない。
「…昨日、影君は確かに放送で呼び出されてましたけど、それから何処に行ったのかは分からないです……。すみません」
飽くまで殊勝に。
「い、いやそんなことはないよ。すまんね」
狙い通り、刑事が慌てる。勘は鋭そうだが、どうも情に弱そうだ。だが油断はできない。目の前の男は狸だ、と麻理花の勘が囁く。
「刑事さん…は影君が御鶴城先生を殺したって言いたいんですか？」
「そこまでは思ってないけどね。その放送と呼び出された影君が何処に行ったのか不思議だから、念のために訊いてるだけなんだ」

「……九連君を探してるのは何故ですか？」
影が捕まろうがどうでもいい。心配なのは、日向のこと。彼が捕まるようなことがあれば、麻理花は自分がどうなるか分からない。
「九連君は早退してましたよ」
「そうか。……そうだ、蓮本奈緒さんとも仲が良いって聞いたんだけど」
今度は奈緒か、と麻理花は内心でため息をはく。
「奈緒？はい、友達ですけど……奈緒も何か？」
「今朝、学校に来た時に会ってね。影君の鞄を取りに来ていたんだ」
影の鞄…？そう言えば駅で会ったときに自分のものではない鞄を持っていたが……。あれは影のだったのか。
「奈緒が影君の鞄を……ですか。何でかな」
意外そうに呟く。意外…ではあるが、
（奈緒が自分から取りに来るとは考えられない。つまり影か九連君に頼まれた可能性が高いな…）
詰まらない。奈緒が日向に頼られていると考えるだけで怒りが沸々とわいてくる。
（どうして私に言ってくれないの、九連君……）
日向のためなら何だってするのに。奈緒なんかより、もっとずっと献身的に。
「奈緒が、影君の鞄を……。刑事さんは、影君が奈緒に頼んだと思ってるんですか？」
「その線が濃厚だとは思ってる。そしてそれが当たってるなら、蓮本さんは昨日の影君の動向を知っていることになる」
「……それで奈緒から直接話を聞きたいと、そういうことですか？」
友人を疑われて気分を害したような口調にする。勿論演技で、本当は思いきり疑ってくれと思っている。
「朝会ったときに、彼女はかなり警戒心が高そうだった。だから友人の君から口添えしてもらえないだろうかと思って」
簡単に民間人を頼るなぁ、と呆れながら麻理花は頷いていた。奈緒

が困惑し、ボロを出すのを期待して。
「私が協力して奈緒や影君の力になれるのなら」
相変わらず素晴らしい演技だ。刑事は私をどう思っているだろうか。
私の演技を、見破れる？ねぇ、九連君？

## 第五十五話：反撃の狼煙（前書き）

奈緒が紆余曲折をしつつ、遊子との対決を決意しますが……

## 第五十五話：反撃の狼煙

「……九連、九連」
「ん、」
「九連！」
「！！」
日向が慌てて上体を起こすと、奈緒が呆れ声を上げる。
「やっと起きた。あんた、何で床で寝てんの？看護師も何やってんだか」
「は、蓮本！影は！？」
「は？」
日向は奈緒の肩を掴み、必死の形相で問い掛ける。
「影は？影を見てないか！？」
「み、見てないけど。あたし来たばかりだから、トイレにでも行ってるんだと思ったんだけど……。ねえ、どうしたの」
「連れて行かれたんだ。御鶴城って医者に！」
「！？」
御鶴城？院内にそういう名の医師がいるのか？
「絶対あいつの縁者だ、だから影を連れていったんだっ！！」
「九連、一先ず落ち着いて！何があったかちゃんと話して」
「影が拐われたんだぞ！落ち着いていられると思うか！？」
「あぁもう、黙れ！」
奈緒は怒鳴ると、影の鞄を振り回して日向の頭を殴った。日向が食って掛かろうとするが、奈緒の口撃（こうげき）のほうが早かった。
「黙れ、弟煩悩兄貴っ！あんたがこうやって混乱してる間に影に何かあったらどうするんだっ！！」
日向がビクッと体を震わせて眼を見開く。膝をついて、弱々しく
「影」、と呟く。
「また、守れなかった」

「……」
「御鶴城っていう女医に腕を掴まれて、助けたかったのに……俺は看護師に捕まって何も出来なかった…。影、泣いてたのに」
影の涙ぐんだ声がまだ頭に響いている。
「何があったんだ。話して」
奈緒の言葉に、日向は眼を真っ赤にして頷いた。

「……大体は分かった。その女医は恐らく御鶴城の姉みたいね。そして遊子と繋がりがある、と」
「復讐のために影を拐ったのかな」
奈緒が奢ったカフェオレを飲んでいる日向の顔色は大分良くなっている。
「さぁ、ね。それは本人じゃないと分からないと思う。……」
「なあ」
「ん？」
「昨日…のこと、だけど」
奈緒はハッとする。そうだ、今日はそのことを話すために日向に会いに来たのだ。
「ほ、本当に、影は…御鶴城を殺した、のか」
日向は憂いと不安がない交ぜになったような表情で顔を伏せる。奈緒は唇を噛み、そんな彼を見つめる。
「嘘、だよな。影が、人を殺す……わけない、そんなわけないんだ…」
兄の、切なる願い。弟が殺人をおかすわけがない、と信じたい。
（九連……）
奈緒は惑う。自分が肯定すれば、日向は信じるのだろうか。信じて、くれるのだろうか。
「なぁ、嘘だって言ってくれよ」

日向は赤い眼の影から、御鶴城を殺したと聞いたという。他でもない弟がそう言ったのに、日向は信じられないー否、信じたくない。性的暴行をされたとはいえ、影が人を殺すなんて。
「なあ嘘だろ、嘘って…嘘って言ってくれよ！」
奈緒はギュッ、と拳を作り、疼く胸を無視して、言った。
「……本当よ」
「！え、」
「殺す瞬間は見てない。でも、死体の前に影が立っているのは見た。あの子言ったよ。自分が殺したんだって……」
「！！」
日向は顔をはねあげて奈緒を見ていた。すがるような眼に、奈緒は無表情で返す。そうでもしないと、決心が鈍ってしまいそうだった。
「信じるかどうかは九連に任せる。…嘘は言ってないけどね」
「……」
日向はなんと言って良いか分からないようだった。呆然と奈緒を見上げている。奈緒は毅然とした視線を返す。
「信じたくないならそれでもいい。虚構に身を浸して、本当のことから眼を逸らしていれば良い」
こんなことを言いたいわけじゃないのに。どうしてあたしはいつもこうなの。
（あの時だってそう。あたしは陽君を突き放した。陽君があたしに助けを求めていることを知りながら）
傷付いた瞳。項垂れた、頼りない体。手を伸ばせば届く場所にいたのに、あたしは手を伸ばさなかった。
（…だって、怖かったから、）
あんなに真っ直ぐに愛情を向けられたことがなくて、怖くなったのだ。もし陽君の手を取って、繋がったとしたら。繋がって、裏切られたら。裏切ることになったら。
（あたしは、きっと弱いんだ）
強く見えるのは、ただのフェイク。本当の蓮本奈緒は、弱い。他人

が、怖いのだ。何を考えているのか、分からない他人が怖い。だからあの時も陽を突き放した。陽が何を考え、奈緒に“あんなこと”を言ったのか、分からなくて。
「……九連、あたしは」
「はす、もと？」
「あんたが思うようにすれば良いと思う。周りがどう言おうが、九連は影を信じたら良い。信じられることは、すごいことだから」

奈緒が泣いている。日向は呆然とそんな彼女を見上げるしかできない。
「蓮本、泣いてるのか？」
バカな質問をしたと自嘲する。涙を流しているじゃないか。なのに泣いてるのか？だと？もっと気の利いたこと言えないのか、うすらバカめ。赤い眼の影がいたらそんなことを言われそうな気がする。
（だって仕方ないだろ…女の涙は苦手なんだ）
焦って何と言ったら良いか分からなくなるのだ。どう言えば相手が泣き止んでくれるのか考えれば考えるほど、うまく話せなくなる。それに、今泣いてるのは奈緒なのだ。毅然とし、憮然とすることはしょっちゅうでも、逍然とすることは殆んどない蓮本奈緒が、泣いている。どうすればいいか余計に困惑する。
「は、蓮本、泣くなよ」
弱々しい声でそう言うしかできない。気の利いた台詞なんて、全く出てこない。自分まで泣きたくなって来て、日向は俯きかける……と、
「……九連、あんた女の子と付き合ったことないでしょ」
「！？」
「あ、図星」
眼の端に涙を浮かべ、奈緒が日向を見て笑う。素直な、優しい笑顔

だった。
「は、蓮本…！」
「泣いてる女一人も慰められないとはね、呆れた」
「うっ、うるさい！！」
「ま、あたしも人前で泣くなんてどうかしてたわ。九連、行くよ」
そう言っていきなり日向の怪我をしていない右腕を掴み、立たせる。
「い、行くって？」
「取られたものは取り返す。あたしはそうやって生きてきた」
眼を白黒させる日向に、斜に構えた笑みを送る。
「遊子のところに行って、あんたの大事な半身をお返しいただくのよ」
それは“屋敷”を逃げ出した蓮本奈緒という少女の、反撃の狼煙が上がった瞬間だった。

## 第五十六話：悲劇への一歩

ガンッ、と頭を壁に打ち付けられ、一瞬意識が飛びそうになる。
「う、」
「訂正しろ、私のことは何も分からないと言えっ！！」
女医の激昂は止まらない。影の脇腹を蹴り上げ、苦悶の表情を浮かべる少年を冷たい床に押し付ける。
「…っ、ごめっ、ごめんなさいっ」
謝罪の言葉は聞き入れられることはなく、ピシャリと頬をはたかれる。
「御鶴城、そろそろ良いだろう。綺麗な肌に、あまり傷を付けたくないから」
折檻を眺めているだけだった遊子がようやく口を挟む。御鶴城を下がらせると、影を引っ張りあげる。
「はっ、はぁ…あっ？」
影の眼が驚愕に見開かれる。遊子がキスして来たのだ。舌があっさりと口内に侵入し、口腔を舐め回す。ゾクッと言い様のない感覚に、影は身を竦ませる。
「んっ、…ん！！」
逃れようと身を捩っても、遊子に肩を掴まれてピクリとも動けない。
（やだ、いやだっ…）
影が必死に耐えていると、始まった時と同様にキスは唐突に終えられた。
「はぁはぁ、はぁっ」
影は荒い息をつきながら後退する。体がやけに熱いけれど、気のせいだろうか。遊子が一歩を踏み出してきて、影は本能的に怯えて身を竦ませる。
「はぁ、はぁ…っ」
風邪をひいた時のように、体が熱を持っている。眼も霞んで来る。

「大分効いてきたみたいだね」
「……え？」
「“薬”。無味無臭だから、入れられても分からなかったでしょ」
「な、なんのこ、っ！？」
心臓がドクンッ、と大きく鼓動する。発作の前触れによく似たそれに、影の不安は膨らみ続ける。「んっ、…っ」
息が苦しい。眼がチカチカと瞬く。
「大丈夫。副作用はないから。ただ……」
「……」
「自分が自分じゃなくなっちゃうけどね」
「！！」

一瞬、更に強く心臓が鼓動する。影は胸を掻き抱き、眼をギュッと瞑る。
（苦しいよ、兄さん。苦しい、）
「次に目覚めた時、君は君であって君ではなくなってる」
「……」
反応を返す力すら残っていない。
「お休み、九連影君」
遊子のその言葉を最後に、影は意識を失った。

奈緒はたじろぐ日向の右腕を掴んで病室を出た。面会時間帯であるが、院内はおかしいくらいに静まっている。足音一つしない。
「は、蓮本何処行くんだよ」
「笹原っていう看護師を探すのよ。九連の話からして、そいつは遊子と関わりがある」
「だ、だけど」
「だけど、じゃない！影が心配なんでしょっ」

影が心配なのに間違いはないので、日向は頷いていた。
「なら話は簡単。御鶴城と一緒に病室に来た笹原って看護師に突撃するだけ！」
「で、でもっ」
「あ、ちょっとすみません！」
日向を無視して、奈緒はナースステーションにいた看護師に声をかけた。
「？どうされました？」
「笹原っていう看護師さんに会いたいんですが」
「ああ、笹原さんなら体調不良で早退されましたけど」
「早退？…分かりました、なら良いです」
奈緒はあっさり納得し、不思議顔の看護師を無視して、日向を引っ張って行く。ナースステーションが見えなくなったところで、
「仕方ない。直接乗り込むか……」
「蓮本？」
「病院出るよ」
「えっ、さすがにそれは」
奈緒ははぁ、と呆れたため息をつき、
「あんたは影、影言うわりには思い切りが足りないわよねぇ」
日向はムッとして奈緒を睨む。
「分かったよ！出てやるよ、幾らでも！」
自棄になって支離滅裂な言葉を吐く。奈緒がふふん、と不敵に微笑み、あ、俺失敗したかも…と日向が思ったのは言うまでもない。

玲治は、少年が気を失って崩れ落ちたのを見た瞬間、部屋に飛び込んでいた。だが御鶴城にあっさり拘束される。
「止めろ、余計な怪我をする気か」
御鶴城の低い声が心を震わせる。

「それでもダメだ！俺みたいな存在を作りたくないっ……」
兄に見放され、“薬”で良いように動かされる。そんな存在は自分だけで十分だ。少年が遊子に抱えられる。玲治は力の限り叫ぶ。
「彼に触るな、遊子っ……！！」
「……」
遊子が少年を抱えて玲治を振り返る。その眼には何の色もない。だが玲治は引かなかった。拳を作り、決して眼を逸らさない。「その子を放せ！」
「ほぅ。飼われている存在のくせに、主人にそんな口を聞くか」
「お、俺は飼われてなんかいないっ！」
「御鶴城、連れて行け。うるさくてかなわん」
「はい」
玲治を羽交い締めにしたまま、御鶴城は後ろに下がる。
「放せ、放せよ！」
それでも拘束をほどこうともがく玲治に業を煮やし、御鶴城は彼の腹に一発ぶちこんだ。
「んっ、ぐ……」
そして痛みに喘ぐ玲治を引き摺って部屋を出ていく。それを見届け、遊子は影を見た。涙の残る頬に舌を這わせ、妖艶に笑う。
「可愛い寝顔ね……」
Ｉｔ' ｓ ｓｈｏｗ ｔｉｍｅ（イッツショウタイム）、と遊子は小さく呟いた。

## 第五十六話：悲劇への一歩（後書き）

さあ影が遊子に捕らわれて大変です。最近出番が少ない上に良いとこなしの日向、頑張れ！って私が頑張らせるのですが……

## 第五十七話：屋敷への道

「なぁ、怒られないか？」
「どうして？あんたは今にも死にそうな重病患者でもないし、他人に害を与えるわけでもない。…それに弟を助けるっていう大義名分もあるんだしね」
奈緒は影の鞄を肩にかけ、日向の前を大股で歩く。看護師が挨拶をして来たので挨拶を返そうとすると、奈緒に更に腕を引っ張られた。あとには不思議そうな看護師が残される。
「な、何だよ」
「馬鹿！誰が遊子と繋がってるか分かったもんじゃないのよっ。ペコペコしてんじゃない！」
先程から奈緒にしてはやけに焦っていた。影のことが心配、と言うのとは少し違う気がする。奈緒は非常階段のドアの前まで来ると、周囲を見回し誰の視線もないことを見とると、ドアを開けて一気に非常階段に足をかける。
「九連、行くよっ！」
「あ、あぁ」
日向はうやむやな想いのまま奈緒に従った。

だが奈緒の足は一階まで行くと止まった。外と非常階段の間のドアの前に、私服姿の女性がいたからだ。二人が非常階段を使うのだと知っていたかのように、ニヤニヤと奈緒と日向を見ている。
「お前っ、」
我に返るのは日向が早かった。いまだに腕を掴む奈緒の手を払い、女性ー笹原に掴みかかる。笹原は胸ぐらを掴まれても、ニヤニヤ笑いを崩さない。

「影を何処にやった！」
「くふふ」
「何がおかしいんだ！」
日向が顔を赤くして怒鳴ると、笹原が急に無表情になって日向の折れている方の腕を叩いた。
「うあっ……」
日向が怯んだのを見計らって、笹原は奈緒に眼をやった。固まっていた奈緒は、ピクッと身動ぎして彼女を見返す。笹原の唇に加虐的な笑みが浮かぶ。
「奈緒…って言ったね」
「……」
「遊子様があんたたちを連れて来ても良いと仰ってたわ」
「…遊子が？」
何かの罠だろうか。だが奈緒とて“屋敷”の場所は知っている。わざわざ笹原を案内役にすることに意味があるのだろうか。
「怖いのかな」
「…何ですって？」
“屋敷”には彼の匂いが残ってるものね」
「っ！」
この女はどこまで知っているのだろう。遊子が話したのだろうか。
「蓮本…？」
腕の痛みに耐えながら、日向は立ち尽くす奈緒を怪訝そうに見る。
奈緒はその視線に
「なんでもない」と応えようとした。だが、笹原の言葉に愕然とすることになる。
「陽は私の実弟よ」
「！？」
奈緒は眼を見張る。嘘だ、と思う。だって陽自身が言っていたから。
僕は天涯孤独の身で、遊子様に拾われたんだ……と。あの言葉は嘘だったのか？奈緒が愕然と笹原を見ると、笹原は悪意たっぷりの笑

みを浮かべた。
「本当よ。まぁ陽は私が姉だとは知らなかったし、自分に姉がいるだなんて思ってなかったけど」
（なら陽君があたしに嘘をついたわけじゃ、ないんだ）
敵前で、弱い面を見せていることに奈緒は気付いていない。
「あんたでもそんな顔をするのね。ー肉親は平気で見殺しにするくせに」
「！！」
笹原は、美緒の死についても知っている。ちらりと日向を伺うと、彼は無防備に突っ立ったまま、奈緒と笹原を半々に見ていた。
「……無駄話は良いわ。連れて行くならさっさとしてー影を返して貰う。あと、九連には手を出さないと約束して」
「分かってるよ。…じゃあ行こうか。車は回してあるから」
笹原が扉を開く。
「九連、行くよ」
「あ、あぁ」
あまり話に付いていけていない日向は、またもウヤムヤな感じで頷くのだった。

御鶴城に拘束された玲治は元居た部屋に戻されていた。ベッドの上で膝を抱え、必死に頭を働かせようとしていた。薬を呑まされ、意識を失った少年をどうやったら助けられるかを、だ。だが浮かぶのは佳那汰の憎悪に満ちた瞳と、遊子の下卑た笑顔ばかり。良い案など、幾ら考えても浮かばない。
（あの子は絶対に助けたい。俺のようにはさせたくない……でも、どうやって、）
己が非力だということは、玲治だって分かっている。分かってはいても、考えるのを止めることはできない。

（必ず突破口はあるはず…。でも、此処は全て見張られているし、）
玲治は机上の携帯電話を見た。玲治専用のものだが、大してメモリは入っていないし、使うこともあまりない。
（奈緒さんの携帯に、電話を）
実は陽の携帯から奈緒の携帯に電話をする時、玲治は保険にと彼女の番号とアドレスを紙にメモしていたのである。奈緒に連絡をしてどうするつもりなのか、玲治には全く考えはなかった。それでも誰かにすがらないと、今の玲治には何も出来そうになかった。
（奈緒さん出て…）
携帯を掛けながら、奈緒に祈った。

奈緒のスカートのポケットから携帯がバイブしている音が日向の耳にも届いているのだが、本人である奈緒は気付いていないのか窓の外を眺めているだけだ。どうも先程の笹原との会話から奈緒の様子がおかしい。一体、彼女は今何を考えているのだろう。
「蓮本」
「……」
「蓮本！」
「えっ、何…？」
まるで夢から覚めたかのように眼をパチクリとさせ、奈緒が日向を見た。普段見ることはまずない奈緒のそんな表情に、ますます不可解な想いを抱く。
「携帯。ずっと震えてる」
「え、本当だ」
奈緒はポケットから携帯を出すと、ろくに相手を確認することなく電話に出た。
「もしもし、蓮本です」
『なっ、奈緒さん！？』

「あんた、玲治？」
運転席にいる笹原の眉がぴくりと動いたが、二人は気付かない。
『良かった、奈緒さんに繋がった……』
「どうしたの。また佳那汰にぃと何かあったの？」
『い、今は違うんだ、男の子が大変なんだっ』
「は？」
『ゆ、遊子に“薬”を呑まされて意識を失ってる。きっと遊子はあの子に酷いことさせるっ』
「…その男の子って、細くて肌が白かった？」
『な、奈緒さん知ってるの？』
玲治は奈緒と、影ー玲治が言う男の子は現状から言って影で間違いないだろうーが知り合いということを知らないのだろうか。
（恐らくあの時は遊子に操られていたから、記憶にないんだわ……）
「あたしは今、そっちに向かってる」
『ほ、本当？』
玲治の声が嬉しげに跳ね上がる。あたしに何を期待しているのだろう、と奈緒は苦笑する。
「本当よ。玲治、あんたはじっとしてるのよ。良いね」
『は、はい』
「切るよ」
『はい』
奈緒は通話を終え、リアシートに背をつけて深いため息をついた。
「蓮本、誰から？」
双子の弟が犯罪に使われたら、この兄貴はどうするのだろう…と思いながら、奈緒は知り合い、とだけ素っ気なく応えた。

## 第五十七話：屋敷への道（後書き）

物語は徐々にクライマックスへ…行けるか不安ですが、頑張ります。
伏線の回収、ほっとんど出来てないなぁ……（「▽」；）

## 第五十八話：屋敷と異変

どうして僕なの。
僕、先生に何もしてない。
授業だって真面目に受けたし、風紀委員だってさぼらずに参加した。
外見のせい？昔からからかわれるたびに、女みたいって言われて来た。だからなの？でも、女みたいな男は僕だけじゃなかったはず。
なのに先生に選ばれたのは僕。どうして、僕じゃないといけなかったの？それを訊きたくても、先生はもういない。だって先生は殺されたから。
僕が…殺したから。
赤い、赤い、赤い海。
ぽっかり開いた穴。
もいだ腕は適当に転がしておいた。
食べようかと思ったけど、さすがに先生のは不味そうだと思った。
僕を凌辱しようとした手が汚らわしかった。僕は、僕の体は僕だけのものだ。なのに先生は僕の体を犯した。だから殺したんだ。僕に触れる者は、誰一人許さない。あ、でも遊子様や兄さんには触られても…良いかなぁ…。あの綺麗な指先で、僕の体を、僕という存在に触って欲しい。僕の体と心は、遊子様と兄さんだけのもの……。

「……」
ここはどこだろう、と日向は思う。最初は見慣れた月舘町の景色が流れていたが、しばらくすると雑木林を眼にすることが多くなった。
「っ、」
一瞬“痣”のあたりに鋭い痛みが走ったが、痛みはすぐに消えた。
「九連、大丈夫？」

奈緒が目敏く気付いて気遣ってくれる。
「…大丈夫、」
ー本当に？
「！？」
誰かの声が聞こえた気がして、日向は眼を見開く。頭の中に直接響いてくるような、そんな、
ーあなたは大丈夫かもしれないけど、半身は？
「影……？」
何だ、凄く嫌な予感がする。影に、何か危険なことが近づいているのではないかという危惧がある。
「九連、酔った？顔色悪いけど……」
「大丈夫、何でもない」
声はもう聞こえない。笹原が笑みを含んだ声で言ってくる。
「もうすぐ着くよ」
日向はえもいわれぬ不安感を圧し殺しながら、顔を上げる。フロントガラス越しに、日向が今まで見たことのないような大きな洋館が見えた。

大崎警部の前で奈緒に携帯をかけてみるが、どうやら電源を切っているようで繋がらない。
「警部さん、奈緒、携帯電源切ってるみたいです」
「そうか…。じゃあまた後で連絡をとってみてもらえるかな。私がいないときで良いから」
「え、良いんですか」
「ああ。君が蓮本さんに訊いてみて、彼女がどういう様子を見せたか教えてくれれば良いから」
それで良いのか、と麻理花は少し意外に思う。
「私が嘘をつく、とは思わないんですか？」

「つくのかい？」
ーこいつ、狸め……。
麻理花は目の前の警部に興味を抱き始めていた。
「蓮本さんにまた会えるの、楽しみにしてる」
大崎は麻理花に仕事用の携帯電話の番号を教えて、そんなことを言った。麻理花はクスッ、と微笑むとはい、と笑った。久しぶりに心から楽しくて笑った気が、した。

影の睫毛がぴくりと動いたのを見て、遊子は眼を細めた。
「おはよう。良い時間だよ」
「う、」
影が呻いて眼を開ける。
「おはよう、気分はどうかな……私のペット」
影は応えず、頭を押さえながら体を起こした。体がひどくだるい。
「……僕は、」
「どう？“薬”の効果は。自分が自分だという認識は、あるかい？」
影は遊子の問いに虚を突かれたような顔をし、次いで顔を青くする。
呆然と、震える両手を見る。
「あ、れ…」
浮かぶ焦りの色。遊子はその様が愉快で仕方ない。早くあの言葉を聞きたい。
「ぼ、くは……、」
「ん？」
「……僕は、誰？」
遊子はニンマリ、と不気味に微笑んだ。

「で、けぇ……」
「そこ。御上りみたいな顔しない」
屋敷の大きさに呆気に取られ、繁々と眺めている日向の頭を奈緒が叩く。影は此処に連れ去られたというのに、何か緊張感が足りない気がする。
「あれ、」
「九連、どうかしたの？」
「何だろう、俺、この家を知ってる気がする……」
「え？」
今何と言った？この家を知ってる？奈緒は眉を寄せて、日向を見詰める。
「他の屋敷と間違ってるんじゃないの？」
「そう…なのかな」
「お二人さん、行くよ」
笹原に急かされて、奈緒と日向は彼女を追った。

重厚な樫の木のドアを開き、笹原が二人を中に誘う。どんな内装なんだろう、と思いながら足を踏み入れた日向は、瞠目する。咄嗟に思ったのは、此処は研究所か何かか？という疑問だった。いきなり銀色の光を放つリノリウムの床が真っ直ぐ伸びている。裸足だと足元から冷気が這い上がってきそうで、日向は上がるのを躊躇う。
「あぁ、この屋敷は土足ＯＫだから、そのままどうぞ」
笹原の言の通り、奈緒はローファーのままで上がっていた。
「九連、行くよ」
「あ、あぁ」
先導はいつの間にか笹原から奈緒に切り替わり、奈緒がこの屋敷に暮らしていたのだと日向に知らしめた。
「影は何処」

歩いて行くほどに研究所の印象が強くなる。左右には鉄製の扉が縦横無尽に並び、たまに薬品のつん、とした臭いが鼻についた。
「……」
奈緒の後を付いていきながら周囲をキョロキョロ見回している日向は、妙な感覚に襲われていた。すわ、自分はこの場所を知っているような、そんな感覚。
「影は最奥……遊子様の寝室にいるよ」
寝室、という単語に奈緒は激しく顔を顰める。悪趣味、と口が象る。
「それにしても広い」
日向は一人呟く。何度か左右に折れたが、景色に変化がないため自分が今屋敷のどの辺りにいるのか全く判断できない。遊子の寝室があるという最奥に本当にたどり着けるのか不安にすらなる。鉄製の扉が不気味で仕方ない。歩いている最中にその一つが微かに開いたように感じたが、止まることは出来ず確認が出来なかった。
「……影？」
三分程は歩いただろうか。
リノリウムの床が急に漆喰のそれになり、壁紙も柔らかなクリーム色に変わった。
張り詰めていた息を吐いたとき、日向の眼にある人物の姿が入った。双子だけど、あまり似ていない。華奢で体があまり頑丈ではない双子の弟。九連影が、ある部屋の前に立っていた。どうやら行き止まりらしく、ここが笹原の言う最奥なのだろう。そして彼女の言の通り、影がいた。じっ、と日向を見ている。
「影！」
影ならば日向の姿を認めればーしかも拉致されたのだー飛び付いて来そうなものなのに、彼はただ突っ立って日向を見ているだけだ。だが日向は影が無事だと分かったことで、他には何も考えられなくなっていた。おかしいと気付いた奈緒が、
「九連、ダメだ、止まれっ！！」
影に走り寄る日向を制止する声を投げる。

「え？」
日向が足を止めて振り返るが、もう遅い。
「……しね、」
影が小さく呟いたのが日向の耳に届いた瞬間、鮮血が散った。

## 第五十八話：屋敷と異変（後書き）

兄弟戦に突入……かも、知れない。日向は屋敷に覚えがあるみたいですが、さてさてどうなるんでしょうか。

## 第五十九話：兄弟の絆（前書き）

日向は影を正気に戻せるのでしょうか…？

## 第五十九話：兄弟の絆

「か、げ…？」
折れていない方の右腕上腕を、何の手加減もなくサバイバルナイフで斬り付けられたのだ。しかも、双子の弟に、だ。
「影、何で…、」
呆然とする日向に、第二撃が襲いかかる。
「バカ九連っ！何ぼけっとしてんの！！」
奈緒に肩口を強く掴まれたことで、我に返った。
「！」
慌てて、しゃがみ込む。コンマ数秒の差で、日向の頭があった場所をナイフの軌道が通る。
「影、やめろっ！」
影の眼は光を反射していない。日向の姿も眼に入っていないような気がする。
「影！」
影は笑いもしなければ泣きもしない。ただ無表情に日向を追い続ける。またナイフが振り被られる。日向も奈緒も慌てて走る。
（これはもしかして、“薬”っ！？）
訳が分からない日向と反対に、奈緒は影の異変の理由に検討がついていた。
恐らく遊子に“薬”を呑まされたのだ。玲治と同じように。（っ、あの女！）
奈緒は遊子の寝室のドアを見た。今にも扉を開いてにやついた顔で姿を現しそうな気がする。
「影、どうしたんだよ、俺だ、九連日向だ！！」
日向が混乱しながらも影に叫ぶ。だが影の攻撃は止まない。
「影！！……うおっ！」
またナイフが振り被られ、日向は仰け反る。ハラリと数本の髪の毛

が刃に切られて舞う。
「ずっと逃げ惑っているつもり？」
背後で笹原がクスクスと悪意のある笑みを溢す。笹原はこうなることを知っていたに違いない。奈緒がキッと彼女を睨み付けると、笹原はますます笑みを深くする。
「影！」
日向の声は影には届かない。だが笹原の言う通り、逃げ惑っているだけでは影を助けられない。日向は決心すると、自分からナイフの間合いに入った。
「九連、何して…っ！」
「近づかねぇと影を止められないだろ！」
「だからって…っ、」
またナイフが振り被られる。日向は少ししか避けず、その結果頬に赤い線が走る。
「九連！」
奈緒の声が遠い。
「っ、」
耳元に伸ばされた影の右手首を掴む。影が逃れようとするが、日向は必死に彼の手を押さえ込む。
「影、頼むからナイフを収めてくれっ！！」
「……」
影は無表情のまま、日向の手を払おうとする。だが日向も圧されっぱなしではない。
「悪い、影！」
とにかく影の眼を醒まさせなければ。日向は影に一言かけると、影の左足を払う。影の体がバランスを崩したのを見計らい、抵抗はあったが、影を床に倒す。
「っ、」
後頭部が床に激突するのを避けるため、頭を腕に抱えてやる。
「影、正気に戻れっ！」

兄の顔が身近に迫っても、影の眼は光を映さない。あまつさえ、日向を完全に敵だと認識したのか、鼻の頭に皺を寄せて威嚇をし始める。
「はな…せ！放せ！」
「俺だ、双子の兄貴の日向だ、何で分からないんだ！」
日向はやりきれない想いで叫んだ。

その悲痛な叫びが奈緒を我に返らせた。奈緒は笹原に近づき、グイッと彼女の襟首を掴み上げる。笹原は笑ったままだ。
「影に“薬”を呑ませたな！？」
「ふふ、何のこと？」
「ふざけるな、早く影を元に戻せ！」
「あんたにしては感情的ね。珍しい」
「あたしのことはどうだって、」
奈緒が更に笹原に怒鳴りつけようとした刹那、
「うあああああっ…！」
日向の苦痛を含んだ絶叫が聞こえて意識が笹原から日向に戻った。
「九連！」
奈緒は眼を疑った。力でも体格でも日向に劣る影が、自分を床に押し倒してきた日向を逆に押し倒しているのだ。しかも折れている左腕を掴み、ナイフを彼の首筋に突き付けている。日向が激痛に仰け反るのを無表情に見詰める影。笹原がははは、と高らかな哄笑を上げる。
「楽しい楽しいね！兄弟同士で殺し合い！！」
「っ…！」
奈緒は笹原を殴り付けたい衝動に駈られたが、今は日向を助ける方が先だ。奈緒は日向と影に走り寄ると、日向の上に馬乗りになっている影を羽交い締めにする。

「影、いい加減にしなさい！！」
「放せ、僕はこいつを殺すんだ、殺すんだ…！」
その言葉が、日向の痛みが浮いた顔に絶望を落とす。あまりの言葉に、心臓が嫌な音を立てて鼓動する。奈緒は影の異変は“薬”が原因と知っているが、日向には全く話していない。影の態度も言葉も本意のように聞こえてしまうかもしれない。日向が気掛かりだった。
「九連、影は…っ、」
「そんなに、…俺は邪魔だったのか、」
起き上がることもないままに日向が発した言葉に、奈緒は息を詰める。違うそうじゃない、と言おうとしても胸に何かがつかえたような感じがして言葉を発せなくなっている。日向はただ影だけを真っ直ぐに見つめている。それを受け、影が奈緒の腕の中で微かに強張ったのを感じた。
（“薬”の効果が薄れて来てる…の？）
「赤目にも言われた…俺がいなければ影はもっと自由、みたいなことを。俺が、邪魔してるって、」
「……っ、」
影の無表情だった顔に、波紋が広がる。羽交い締めにされてもがいていた体がピタリと抵抗を止める。
「……殺して良いよ」
「九連、あんたっ」
「俺を殺して影が自由になれるなら。それで影が楽に、生きられるなら。俺はそれが良いと思う」
「…いさん？」
「今まで、ごめんな。守ってるつもりで、ただ影を甘やかしてるだけだった。たぶん俺は怖かったんだな、影に追いて行かれるのが。俺が必要なくなるのが、怖かったんだ」
影も奈緒も日向の言葉を聞きながら身動ぎ一つ出来ないでいる。だが奈緒は影の気配から鬼気迫るものが消えていきつつあるのを感じていた。“薬”の効力が消えつつあるのか、それとも。

（九連、）
「……俺が、甘えてたんだろうな。影に」
そうだ。影が誰かと親しくして、自分から離れていく気がして怖かったんだ。確かに影に甘えさせていた。でも、一番甘えてたのは自分だったんだ。
「お前が殺したいなら、殺してくれ。それで、影の気が楽になるなら。笑えるなら」
日向は顔を強張らせたままの影に、苦笑を向ける。
「俺を殺したいほど憎んでるなら、」
ナイフを握っている右手を掴む。影がビクッと震える。日向は影を見詰めたまま、
「…殺して良い」
と、言った。影の体がガクガクと震え始める。その様に良くない兆候を感じ取り、奈緒は影の拘束を解いた。影は力なく床に膝を着く。震える手で握ったナイフを、日向の上で刃先を彼に向けて構える。いつでも振り下ろせる、そんな状況。
「影、遠慮なくやってくれ。俺のことは、気にするな」
「……っ、」
何かを断ち切るかのように首を何度か左右に振った後、影は意を決したように呼気を吐き出し、勢いをつけてナイフを日向に、
「今までありがとな。影が家族で、弟で、良かった」
「！！」
その、瞬間。影の手からナイフが滑り落ち、かつんと乾いた音を立てて床に転がった。
「……影？」
日向が呼び掛けると、影は眼を見開いて彼を見返していた。唇は蒼白で、大きな瞳から大粒の涙を零す。
「にい、さん…」
「影！？」
「ぼ、くは……兄さんをころ、そうと……」

「影、お前……」
戸惑っている日向だったが、いきなり影が自分の方に倒れ込んで来て、慌てて小柄なその体を支える。
「影、おいっ、影っ！」
影の体は酷い熱を持っていて、呼吸が荒い。熱がある、と日向は慌てる。日向が呼び掛けても、気を失っているようで、影はぐったりとしたままだ。
「…何とか、なったみたいね」
気が抜けた奈緒は安堵の息をはいたが、飛び込んで来た拍手に音の方向をキッと睨み付けた。「遊子！」
墨のように真っ黒な黒髪の、長身の女。愉快そうに満面の、しかし何処か歪な笑みを浮かべ、拍手をしている。影を抱えたままの日向が敵がい心たっぷりに遊子を見据える。
「いやいや、素晴らしい兄弟愛を見せて貰った。まさか“薬”の効力をそんな下らんもので打ち消せるとは思っていなかったよ。うん、満足だ」
「下らないだと！？影に何をした！」
激昂した日向が怒鳴り付ける。遊子が笑う。
「何もしてないさ。ただ興味があっただけさ」
「興味？」
「影君に、さ。こんな細身の体の“中”にどんな化け物を飼っているのか、とね」
化け物、という言葉に日向が怒りに顔を歪める。
「影は化け物なんかじゃない！」
「怒った顔、良いね。お姉さんは尖った男の子は大好きだよ」
「…っ」
「そして奈緒。昔とは打って変わって随分感情的になったじゃないか。私は嬉しいよ」
日向は奈緒を見る。やはり奈緒と目の前の女は古い知り合いなのだ。でも、どういう？奈緒はこんな研究所みたいな内観の家で育ったと

でも言うのか？こんな、不気味な女と、暮らしていたのか？視線を向けられた奈緒は顔を青ざめさせながらも気丈に遊子を睨み付けている。
「それはどうも」
「ふふっ、ひねくれているのは相変わらず、か。変わってない部分もまた良い」
「どうでも良いけど、もう帰っても良いかしら。あんたの下らない遊びに付き合ってる暇、あたしたちにはないんだけど」
「あぁ、それは困る。まだ遊び足りないから」
遊子がそう言った矢先、奈緒は眼を見開いた。
「玲治、佳那汰にぃ、」
「奈緒、さん…」
日向たちの背後から、佳那汰と玲治、二人の兄弟が現れたのだ。しかも佳那汰は玲治の首に腕を回し、玲治が身動きできないように拘束している。抜き身のナイフを持って。
「あんたたちが帰る素振りを見せた瞬間、玲治はあの世行きだよ？」
遊子の笑いを含んだ声に、奈緒は唇を噛んだ。
「あんたは何処まで……っ！！」
「さぁ、運動をして喉が渇いたでしょう。一服入れましょう」
そして場違いなにこやかな笑みを、その白い顔に刻んだのだった。

## 第五十九話：兄弟の絆（後書き）

……戻せましたね。ひと安心してもまだまだ“屋敷”からは帰れません。波瀾は続きます。

## 第六十話：信じたくない告白

あの人が少年の双子のお兄さんなのか、と思いながら、玲治は喉元に突き付けられたままのナイフの感触を忘れようと努めていた。
（あんまり、似てないんだなぁ……）
「佳那汰にぃ、いい加減玲治を放してやってくれない？」
奈緒の声が何処と無く遠く感じる。玲治は奈緒を見る。“薬”で遊子に操られていたときに会ってはいるが、その時の記憶はないため、玲治は奈緒に久しぶりに会ったことになっている。
（奈緒さん、少し痩せた…のかなぁ……）
「それは出来ん相談だよ、奈緒。玲治を放したら、おまえたちは逃げるだろうからね」
「逃げない」
「信用出来ないね……九連日向君」
ソファーで眠っている弟が心配で椅子に座っていない日向に、遊子の声が掛かる。日向が彼女を睨み付ける。
「何だよ、」
「大人しく座って紅茶でも飲みなさい。話も出来やしない」
「うるさい！誰のせいで影がこんなに傷付いたと思ってるんだっ！！」
「あら、さっきまで弟に殺されそうになって萎れてたのに、いきなり威勢が良くなったわね」
遊子のからかい口調に、日向の顔が赤くなる。思わず飛び掛かりそうになった日向に、奈緒の厳しい声が飛ぶ。
「九連、止めなっ！！」
日向が唇を噛んで奈緒を見る。
「蓮本、何でっ…」
「此処はそいつのテリトリーだからね。下手なことして危なくなるのはあんたや影なんだよ」

「っ、」
「九連、ほら座って。これ以上影を傷付けたくないなら」
日向は遊子を睨み付けたままで奈緒の横の椅子に腰かけた。
「さ…て。改めて、こんにちは。九連日向君…そして蓮本奈緒さん」
遊子は長い指で紅茶を注いだカップを持ち、日向と奈緒を等分に見ながら今さらながらの挨拶をする。
「私がこの“屋敷”の主人にして芦原グループ次期当主、芦原遊子です。以後お見知り置きを……」
「遊子、前置きは良いわ……何が目的なの」
「連れないなぁ。つい最近久しぶりに会ったって言うのに、さ」
「あんたと話す気はないの。ただ玲治に手出しさせるわけにはいかないし……佳那汰にぃを元に戻して貰わないとね……」
遊子が微笑む。紅茶を一口含み、
「元に戻す、ってどういうことかしら？」
「…あくまでもしらばっくれる気なのね」
「ふふ、」
何が可笑しいのか、遊子は微笑んでばかりだ。
「どうやら玲治から色々吹き込まれたみたいね」
佳那汰に拘束されたままの玲治がビクッと身を震わせる。遊子の瞳が玲治に注がれる。玲治が恐怖に竦んで遊子から眼を離せないでいる。「遊子、」
「いい加減玲治は処分したいんだがね……」
遊子が椅子から立ち上がり、玲治に近づいて行く。奈緒が彼女を制止しようと立ち上がりかけるが、
「少しでも動いたら、玲治を刺すように佳那汰には命令してるからね」
という言葉に動きを止める。
「や…だ、来るな、」
「佳那汰の弟でなければさっさと処分してるところなんだがな」
「っ、」

「携帯のことと言い、大事なところで気を失ったり。お前には失望させられてばかりだよ」
遊子はこれみよがしにため息をついてみせ、玲治の頭を掴んだ。
「脳ミソ潰してやっても良いんだよ……？」
玲治の顔が恐怖に歪む。遊子が陰鬱に笑う。
「まぁ冗談だけどな」
頭から手を退けて、遊子は椅子に戻る。奈緒が尖った声を出す。「遊子、早く本題に入ってくれない？あんたの遊びに付き合ってる暇ないのよ」
「せっかちなところは相変わらず……か。全く嘆かわしいことだよ」
遊子は殊更のんびりした口調で言う。「……あんたのそういう人を食ったような態度も相変わらずね」
「ありがとう」
誉めてない、とぼやき、奈緒はダンッ！と机を拳で叩き付けた。
「いい加減にしてくれない？ここの空気吸ってるだけで苛々してくるのに、あんたの戯れ言に付き合ってる暇は、」
「陽のこと、思い出すしね」
挟まれた遊子の言葉に、奈緒の顔が強張る。
「蓮本……？」
蒼白くなる奈緒が気がかりで、日向は気遣わしげな視線を送る。まただ、と思う。陽という名前が出る度に、奈緒の様子がおかしくなる。一体陽とは何者なのか。
「陽君は…関係ない」
「九連日向君が心配そうに見てるよ。まだ陽のこと、話してないのかい？」
奈緒の目線が日向に投げられる。微かに憂いの浮いた瞳を、奈緒はすぐに日向から逸らした。その逸らし方がひどく不自然な気がして、日向は自分でも意識せずに少しムッとしてしまった。
「話す必要はないよ。陽君のことと、九連たちのことは関係ないから」

「ふふ」
遊子は楽し気に微笑み、スーツの胸ポケットから一枚の写真を取り出した。写されているものを悟り、奈緒はガタッと席を立っていた。
「な、んであんたが！」
遊子が見せつけるように、写真を日向の目先に翳す。ー穏やかそうな、顔立ち。柔和に微笑んだ瞳。何処か寂しげな雰囲気も滲んでいる。何より目立つのは、雪のように真っ白な髪。頭から雪を被っているのかとすら思う。華奢なものの、頼りないという感じはない。誰かと手を繋いでいるのか、左手が手らしきものを握っている。相手の体は全く写っていない。…写っていないが、写真の少年が握っている手は、奈緒のものではないかという予想があった。
「何であんたがその写真を……！！」
奈緒が遊子に掴みかかろうとするのを、遊子はあっさりと避けた。
「あたしが燃やしたはずだ、陽君と一緒にあたしが……！」
普段の彼女からは考えられないくらいに、奈緒が動揺していた。だがその様よりも、奈緒が口走った言葉に日向は眼を見開く。
（燃やした…？陽君と、一緒に……？）
「あぁ、簡単なことさ。焼き増ししただけさ。陽が、ね」
「陽君が？」
「陽は不安症だったろ？何でも予備がないと落ち着かなかった……あんたの写真にも同じことが言えたんだろうさ」
奈緒は信じられない、と言った風に眼を見開いている。
「嘘よ、だってこの写真はー、」
……ひどいことを言った日に撮ったものだ。陽君の存在を悪し様に罵り、陽君を蔑んだ日に撮ったものだ。なのに、どうして笑ってるの？あんなに、あなたを否定することを言ったのに、どうして笑えるの？自分を傷付けた人間の横で、どうしてそんな風に笑えるの？
「信じなくても構わんさ。本人がいないから、陽に訊く訳にも行かないしね」
「……蓮本、大丈夫か、」

小刻みに震える奈緒のことが心配で、日向は思わず奈緒の肩を掴んでいた。だがその手はすげなく振り払われる。バチンッという音が、日向の鼓膜を叩いた。
「触らない方が良いよ、あたしには」
俯いたせいで、奈緒の横顔が見えない。だが奈緒が泣いているように、見えた。
「蓮本、」
戦慄(わなな)く唇を一度噛み締め、奈緒は言った。やっぱり来るんじゃなかった、と思いながら。
「あたしは人殺しだから、触ると汚いよ」
「えっ、」
「その写真の子、あたしが殺したの」

大崎警部と別れた後、麻理花はようやく家の中に入った。ダイニングのテーブルの上に、一万円札とメモ書きが置いてある。
「勝手に食べて……か」
メモ書きを持ち、洗面所に行く。洗面台で栓をし、水を溜める。
「いつも同じ文面……紙の無駄だって何で分かんないのかな、あいつらは」
スカートのポケットから、百円ライターを取り出し口元を歪に歪めながら点火する。メモの端に火を点け、紙の焦げる臭いに喜悦を感じる。だがその喜悦はあっという間に霧散し、顔がすぐに無表情になる。手を放し、静かに燃える紙を溜めた水に落とす。
「詰まらない、」
麻理花は小さく呟き、握ったままだったライターを鏡に向かって投げ付けた。だが強化ガラス仕様の鏡は割れることなく平然と麻理花を映し出していた。

「蓮本、今何て……」
奈緒の言葉は聞こえた。だが、認めたくなかった。ただの悪い冗談だと思いたかった。
「聞こえなかった？その写真の子を殺したって言ったの」
「な、何こんなときに変な嘘吐いてるんだよ、」
動揺を隠せない日向に、奈緒が顔を向ける。相手を蔑むそれに、日向はたじろぐ。
「な、何だよ」
「本当のことだと言ってるでしょう。あたしの言葉を否定出来る程、九連はあたしのこと知ってるの？」
その言い方に、日向は思わずムッとする。
「なっ、何だよその言い方っ…！俺はただ、」
「ただ、何？」
日向はぐっ、と詰まる。見ていた遊子がクスッと笑う。奈緒は日向から顔を逸らし、冷めた瞳で彼女を見返す。
「そう、その眼だ。あんたにはその眼が似合う」
「それはどうも。で、陽君の写真を持ち出してあんたは何がしたいの？影を拉致したことと何か関係があるの？」
「……赤い眼、」
遊子が漏らした言葉に、日向が反応する。ビクッと肩を震わせ、ソファーで眠る弟に眼を遣る。
「少し話したよ。実に興味深いー君も何故自分の半身があんな“化け物”を内に飼っているのか気になるだろ？」
「そ、それは」
「しかも赤い眼の影の出現には本人の危機と、“痣”が関係あるようだし」
日向は思わず“痣”のある場所を押さえた。遊子が笑う。
「……そうか、君にもあるのか」

「な、」
今まで玲治にナイフを突き付けていた佳那汰がいきなり動いた。突き放された玲治が床にへたり込み、苦しそうに喘いで呼吸を整える。
「なにすっ、」
佳那汰は日向を羽交い締めにすると、いきなりシャツをたくしあげてきた。無遠慮に素肌を撫でられ、日向は気持ち悪さに身を捩る。
「んっ、止めろよっ…」
「佳那汰、ストップ」
遊子に制止され、這い回っていた佳那汰の手が止まる。遊子が近付き、しゃがみこんで日向の“痣”に触れた。右の肋骨の近くにある、不定形の“痣”。
「っ、」
ぞわっ、と言い知れぬ寒気が背筋を駆け上がり、日向は身震いした。
「君には別人格は居ないようだな……」
感慨深げに遊子は言いながら、“痣”に舌を這わせてきた。ねっとりと舐められ、日向は悲鳴を上げる。
「やっ、止めろよっ！」
「くすくす、経験のない女の子みたいな反応だな」
かあっ、と顔が赤くなるのを止められない。
「おや、なかなか格好良いから盛んなのかと思っていたが、意外に経験がないのかな」
何故か奈緒を見ながら、意味深な口調で。奈緒は相変わらず冷たい瞳で、日向を見るともなしに見ている。拘束されている日向を助けてくれそうな気配はない。
「……あたしが手取り足取り教えてるとでも思ってた？」
「蓮本っ……！」
「男の方が可愛い反応するわね。……女は不感症か」
「俺と蓮本はそんな関係じゃない……！！」
だんだんと自分が置かれている状況に苛立ちを感じ、日向は怒鳴った。腕を払い、佳那汰の手から逃れる。そしてソファーで眠る影を

揺すって起こそうとする。
「影、帰るぞ！起きろ！！」
影がうっすら眼を開け、日向はホッと息を吐く。だが、
「っ！！」
「この“屋敷”の主人は私だ。勝手な真似は、許さんよ」
今までになく気迫のこもった遊子の声を聞きながら日向の意識は闇に呑まれて行く。消えゆく意識の片隅で、あぁ俺は殴られたんだとやけに冷静に悟っていた。

## 第六十話：信じたくない告白（後書き）

奈緒は本当に人殺しなんでしょうか？そして意識を失った日向は……。

## 第六十一話：閉塞感（前書き）

影が少しあれな声出してるかも……知れません（汗）

# 第六十一話：閉塞感

「九連！！」
日向が遊子に後頭部を殴られ倒れ込んだのを見た瞬間、装っていた“冷静”という仮面が剥がれた。奈緒は椅子から立ち上がると、日向に駆け寄る。
「九連、九連っ！！」
「何、少し頭に衝撃を与えただけさ。すぐに眼を覚ますさ」
軽い口調で言う遊子を、奈緒は睨み付ける。
「兄さん……？」
代わって、呆然と日向を見つめる少年が一人。日向の呼び掛けに眼を覚ましてしまったのだろう、ソファーから身を起こしている。
「兄さんっ！！」
兄が意識を失っていることをはっきりと認識したのだろう、顔を蒼白にしてソファーから下りる。奈緒に、
「は、蓮本さん……兄さんは、」
「影、」
「っ、」
ぐらっ、と小柄な体が揺れて奈緒は慌ててそれを支えた。
「影、大丈夫！？」
「は、はい、」
息遣いが荒く、まだ体は熱い。眼は黒いが、いつ赤い眼になるか不安になる。日向が危害を加えられ意識を失っていることが、影響を与えはしまいか。奈緒は影を安心させるように肩を抱いてやる。
「大丈夫、九連もあんたもあたしが助ける。だから、落ち着いて。大丈夫だから」
笑える、と思う。他人を、陽を殺しておいて何が助ける、だ。そんな力も、資格もないくせに。

「……僕、兄さんを殺そうとした、」
「！」
その記憶はあるのか。奈緒は思わず影の肩を抱く腕に力を込める。そうでもしないと影が舌を噛み千切ってでも自分を殺しそうな気がしたからだ。影が息を呑む気配。
「は、蓮本さん、」
「あれはあんたのせいじゃないから！」
「で、でも、僕は、」
「あんたのせいじゃない。あんたが九連を殺す訳がないってこと、あんたが九連を大切に想ってること知ってるから。あれは、あんたの本心じゃない」
奈緒が矢継ぎ早に言うのを、影は半ば呆然と聞いていた。奈緒が熱心に何かを伝えようとする姿が意外なのだろう。
「蓮本さん、ありがとう」
抱く力が強すぎたらしく、影が苦し気に声を発する。奈緒はハッと慌てて影を解放する。
「ご、ごめん力が入り過ぎた……」
「大丈夫…です。蓮本さんが一生懸命なのが分かったから……」
影はそう言って微笑むが、その笑顔は弱々しい。やはりまだ引っ掛かるものがあるのだろう。
（それもそうか……。影は兄貴大好きだし、あたしと違ってマトモな神経してるから）
他人を殺そうとして平気でいられるはずもないだろう。しかも半身である双子の兄を殺そうとしたのだから。奈緒は少し息をはいて、影にソファーを示す。
「取り敢えず、座って落ち着いて。あんたに何かあったら、九連が起きた時に哀しむから。ね？」
影は素直に頷いて、ソファーに座り直す。日向に心配気な視線を送ったまま。
「ほう。奈緒も人間らしくなったな。他人の心配をするなど」

「うるさい、黙れ」
遊子には冷たい反応を返す。じろじろと興味深そうに影を見る遊子から彼を守るように、二人の間に立つ。
「蓮本さん、」
不安げに奈緒を呼び、奈緒のシャツの裾を掴む姿は迷子になった幼子のようだ。
「あらあら、嫌われてしまったようだわ」
ビクッ、と影は身を震わせて俯く。奈緒はもう一度大丈夫、と言ってやる。
「遊子。本当にいい加減にしてもらえるかしら」
奈緒は日向を起こし、ソファーを背に座らせる。
「兄さん、」
息をしていることが確認できたのだろう、影は不安げながらも良かった、と小さく呟いた。
「……遊子、あんた一体何がしたいの？他人を弄んで、楽しい？」
「人殺しに言われたくないな、それ」
「！？」
影が背後で息を呑む気配がしたが、奈緒は怯まなかった。
「それは失礼」
日向と影がこちらがわに戻り、幾分か余裕が出来たのだろうか。ちらり、と玲治を見る。玲治の件があるが、あれこれ成し遂げようとすれば所々に綻びが出来ることを、奈緒は長くはない人生の中でいやという程体感し、実感していた。それに、
（おそらく玲治は、“薬”からも佳那汰にぃからも離れられなくなっている。無理に引き剥がすのは危険過ぎる……）
それに佳那汰は玲治曰く記憶のブレがあるらしい。そのブレと、佳那汰の中に未だにあるであろう実弟への愛情に期待するしかない。
「強気になったね。呼吸にも乱れがない」
「それはどうも」
遊子の眼はまだ影がいる位置から離れない。歪に歪んだ口元が、奈

緒に警鐘を鳴らす。嫌な予感がじわり、と沸いてきた瞬間、
「うんっ……！？」
「影！？」
いきなり影が呻き声を上げ、胸を抱えてソファーの上で体を丸めた。
「はっ、はっ、…はぁっ……！！」
息がおかしいくらいに荒く、顔が蒼白い。
「影、どうし……あつっ！？」
影の肩に手をやった瞬間、手のひらが焼きごてが当てられたかのような熱を感じた。
「蓮本さ、……苦しっ、はぁっ……！？」
ビクッ、と影の体が大きく痙攣する。
「影、影っ！！」
奈緒は遊子をギロリとねめつける。
「あんた、影に何をした！！」
「“薬”は絆などには負けないということだよ」
「！まさか、」
「どうやら効き目が完全になくなったわけじゃなかったようだな？」
「くっ、」「ふぁっ……、あぁっ……！」
汗がびっしり浮いた顔が苦痛に歪み、真っ白になった手が兄の手を掴んでいる。
「兄さん、苦しっ……ううっ、」
まずい。このままだと、また影は日向を殺そうとしてしまう。そうなれば、影の自我は壊れるかも知れない。
「九連、起きろ！！」
今ならまだ間に合う。影の自我がある内に、日向を起こして声を聞かせれば。
「弟がピンチなのよ、起きなさいっ！！」
胸ぐらを掴んで揺さぶっても、日向はぐったりしたままだ。
「あっ、はぁっ……」
「九連、しゃきっとしろ！」

焦りも相まって、手が出た。
「今度こそ守ってみせなさいっ！！！」
往復ビンタを見舞う。ばちん！と派手な音が響き渡る。
「おやおや、必死ね」
遊子が笑いながら影に歩み寄る。
「！」
影がその気配に気付いて兄にしがみつく。まだ、間に合う。
「九連！！」
「いっ、」
起きた。そう思った瞬間、
「遅かったね、奈緒？」
影が再び遊子に捕らわれていた。歩み寄っていたのは気付いていたのに、と奈緒は愕然とする。目と鼻の先に、まるで幽霊のように接近されていることに背筋が凍る。起き抜けの日向は状況を呑み込めないらしく、呆然と捕らわれた弟を見ている。
「うっ、にっ…さ、」
兄を呼ぼうとした影の口を遊子が手で塞ぐ。
「！影、」
立ち上がろうとするが、目眩を感じたらしくソファー戻る羽目になる。頭を殴りられたのだから無理はない。
「少し遊ぼうかなぁ。お姉さん、少し暇してたからぁ」
「遊子っ！！」
「……冗談じゃない。怖い顔しないでよ」
そうは言いながら、遊子の手が影のシャツの胸元から入り込んで、
「っ、ぁ」
微かに動いている。
「お遊びはこのくらいにしておこうか。ねぇ、お前も辛いだろう……憎い兄貴を殺せなくて、」
「っ！！」
「遊子！九連も座ってないで、影を助けてみせなさいよっ！！」

「っ、」
日向は立とうとしているが、力が入らないらしい。
「っ！」
手を伸ばせば、影に届く。日向が無理な以上、自分が動くしかない。
「奈緒、動いたら玲治は死ぬよ？」
「っ！！」
何だ、この閉塞的な空間は。誰かを切り捨てなければ、この状況からは逃れられないのか。
（陽君、あたしはどうしたら良いの？）
（また、あたしは人を殺してしまうの……？）
ちらつく陽の笑顔。美緒の笑顔。赤い、
「……」
赤い、眼。奈緒は日向を見る。影を助けたいと顔には書いてあっても、足が萎えているらしく立てずにいる。奈緒は玲治を見る。また佳那汰に捕まり、ナイフを突きつけられている。心的に疲れがあるらしく、ぐったりと俯き顔を上げない。
「……、」
影がビクビクと細かく痙攣するが、日向に手は伸ばしたままだ。
「起きろ、」
「？」
遊子が眉を寄せる。奈緒は怒鳴る。
「あんたの宿主がピンチなのよ、九連はヘタレで戦力にならないから、あんたが起きて戦いなさい！！！」
ヘタレ、と言われた日向は世にも情けない顔になる。九連ごめん、と心中で謝り、影を見遣れば、口元が不敵に笑んでいる。開いた口から、低く淀んだくくくという笑い声が漏れる。
「……随分乱暴な起こし方だな、蓮本奈緒」
赤い眼の影が、遊子に捕らわれたままで不気味に笑った。

## 第六十一話：閉塞感（後書き）

赤い眼バージョンの影、登場！遊子に一矢報いることが出来るのでしょうか？

## 第六十二話：固執の理由（前書き）

お久しぶりの投降。屋敷の中での話が続きます。

## 第六十二話：固執の理由

赤い眼の影に会ったら、訊きたいことがあった。お前は本当に御鶴城を殺したのか。そして、お前は誰なんだ、と。影だと主張するが、お前は本当に影なのか。ただ影の中に住み着いているだけの、本当は名もない存在ではないのか。そんなことを訊きたいのに。

「……くそっ、」

殴られたのであろう頭がまだズキンズキンと鈍く痛む。足が萎えて、言うことをきかない。

「いい加減汚いこの手を離せよ、マゾ女」

影は不敵に言い放つと、遊子の腕に触れた。

「！？」

たったそれだけでじゅうっ、と何かが焦げるような音と臭いがして、影以外の人間が眼を見張った。

「文字通り俺に触れたら火傷するぜ状態だな」

軽口を叩き、遊子の腕から逃れる。驚いていた遊子だが、すぐに余裕を取り戻してふぅん、と感嘆の声を上げた。

「凄いね、人の体に穴開けるだけじゃなくて、燃やすことも出来るんだ」

その言葉に反応したのは、影本人ではなく、日向だった。体をビクッと震わせ、影を見る。赤い眼が細まって、自分を見ているのが分かるとえもしれぬ恐怖が沸き上がってきて、日向は弟から視線を逸らした。影が一瞬顔を歪めるが、それには気付けなかった。

「そうか、日向のほうはいまだに影が御鶴城を殺したことを信じきれてないんだね？」

舌舐めずりせんばかりの勢いで遊子が言い、活路を見い出したかのように日向に焦点を結んだ。

「！日向には手を出すなって言っただろ！」

遊子の目論見に気付いたらしく、影が怒鳴る。遊子はそれに対して、

「それはお前が私に素直に従った場合に了承したことだ」
と都合の良いことを口にした。影がいきり立つ。
「っ、てめえ、狡いと思わねぇのか！！」
「思わないさ。自分の目的成就のためには何だってする……それだけだからね」
呆れた奈緒も眉を顰めて遊子を睨む。
「それに、お前がやけに日向に拘ることも気になってね……兄弟云々以外の何かがある気がするんだよねぇ」
思わせ振りな発言に、日向は影を再び見遣った。影は憤怒の表情で遊子を睨み付け、どう動くか思案しているように見えた。つまり、遊子から日向を守るため、こちらに来ようか迷っているのだと。
「……あったとしてもてめえには関係ないだろ、」
「大有りだ。お姉さんは楽しいことが大好きなんだ」
「自分でお姉さんっていう奴ほど痛い奴はいねぇよ」
「痛くて結構。生きたいように生きて、したいようにするさ」
ああ言えばこう言う状態の遊子に、影は呆れを通り越して感心すらする。
「素直に教えてよ。君が日向にそんなに拘る理由は何？兄貴だから大事にしたいってのはあるだろうけどさ、それ以外に」
日向がじっと自分を見ていることに、影は気付く。
「理由はそれだけだ・・・他には何も、」
「嘘だね」
はっきりと断定されて、影は詰まる。遊子がニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる。
「そう言うことで、私の興味が日向に行かないようにしたいんだろう？残念、そうは問屋が卸さないよ」
「・・・・・・どうしても日向に手を出す気か」
「それはお前の出方次第だよ。あんたが素直に私に身を任せてくれるなら、手は出さない。それは約束する」
影はギュッと拳を握り、何かを決意したかのような顔になる。それ

に気付き、日向は慌てて声を上げていた。
「影！！」
ビクッと影の体が震える。他者の体に穴を開けることが出来、人の体を燃やす力を持っている人間が、無力な少年の呼びかけに怯えている。
「・・・・・・・何」
「影、お前変な事考えてないよな？」
「・・・・・・・・」
沈黙が答えだった。日向はぐらつく頭を押さえ、ふら付く足で立ち尽くす影に近付いて行く。だが影の前に立った瞬間に、眩暈を感じて蹲ってしまった。
「日向っ・・・・・・」
自分もしゃがみこんで、倒れそうになる日向を抱える。腕の中で、日向が呻くように低い声で言う。
「・・・俺のために自分を犠牲にするなんて言い出したらお前でもぶん殴るぞ」
「・・・・・・・・・！」
「お前が何なのか、俺もよく分からない。でもな、その体は影のなんだ！俺の大事なたった一人の弟の、影の体なんだ！！粗末に扱ったら絶対に許さないからなっ・・・・・・・・・・！」

影は呆然と、日向の声を聞いていた。自分の中の“影”が、胸を震わせているのを感じる。
「・・・俺の安全なんか、気にしなくて良い。俺は、影が無事ならそれで良いから」
「日向、お前・・・・・」
どれだけ弟煩悩兄貴なんだよ、と小声で毒づく。けれど、日向がそうまで“自分”を思ってくれていることが何故か気恥ずかしい。
「昔っからだ。放っとけ」

そう苦笑すると、疲れたのか日向は影の腕の中でぐったりと頭を垂れてしまった。遊子に殴られた辺りが熱を持っている。
「・・・・・・と、いうわけ。俺はこの体を粗末に扱っちゃいけないんだと」
影は遊子を睨みつけ、言う。
「だからさっさと此処から帰らせてもらう。蓮本奈緒も、ちゃんとついて来いよ」
今まで置いてけぼりを食らっていた奈緒は、慌てて頷く。今日はとことん自分のペースが乱される日だ、と思いながら。
「玲治はどうするの」
「・・・・・・・あんたも分かってるだろ。そいつは兄貴と離れて過ごすことは出来なくなってるって。この屋敷から出て行くことが出来なくなってるって」
「それは、」
「最低暴力を受けるとしても、最悪殺されることは無いだろうしな」影も気付いているようだ。玲治は遊子にとって重要な“駒”なのだと。殺してはいけない。とことん使ってやるのだと。
「そうね。・・・今はあんたたち兄弟の安全が最優先だわ」
「そういうこと」
影は遊子を見ると、
「というわけで、俺たちは此処から一端おさらばするぜ。・・・変なことして俺を怒らせるなよ？」
鋭い口調で言う。
影と日向のやり取りを見ているだけだった遊子は、ええ～？と眉を寄せる。
「気色悪い声を出すな・・・・・・・気持ち悪い」
「失礼な子どもだぁ。・・・・・・私が嫌だって言ったらどうするの？」
「決まってる。そこにいる“駒”の兄弟の体に穴を空けて使い物にならなくしてやるよ」

今の影ならやりかねない。奈緒は思った。
「う～ん、それは困るかな。あの二つは私が手塩にかけて育てた“機械”だからねぇ。壊させるわけにはいかないな」
遊子は仕方ない、と呟くとずっと控えていた笹原を呼んだ。
「お呼びですか、遊子様」
「このお三方を丁重にお返ししてくれ」
笹原は一瞬憮然とした顔になったが、すぐに、
「・・・・・・・はい」
と頭を下げたのだった。

## 第六十二話：固執の理由（後書き）

はっきりとした理由はまたいずれ語ります。三人は何とか屋敷から出ることが出来そうです。

# 第六十三話：帰宅

後部座席には影とぐったりしたままの日向、助手席には奈緒が座る。
「じゃあ奈緒、またね」
微笑み手を振る遊子に、奈緒は憮然とした表情で吐き捨てる。
「・・・・・もう会いたくない」
「またすぐに会えるよ」
「嬉しくない」
「違いない。じゃあ笹原、頼んだよ」
「はい」
車はゆっくりと走り出し、来た道を行く。屋敷は木々に覆われすぐに見えなくなった。
「・・・・影、九連の様子は？」
「まだぐったりしてる。早く広いとこで寝かせないとな」
「だね」
影の眼はまだ赤いままだが、鬼気はなく穏やかな顔で日向を見下ろしている。普段ならお目にかかれない光景だ、と奈緒は思う。
「しっかし、九連のことは弟煩悩だと思ってたけど、影も結構な兄貴煩悩だね」
「う、うっせえ！」
影が顔を赤らめて怒鳴る。可愛いもんね、と奈緒は苦笑する。
「・・・・仕方ねぇだろ、こいつと居るとどうも調子が狂うんだから・・・・」
ぶつぶつと文句を垂れる影。それでも顔は日向に向いており、彼を心配しているのがよく分かる。
「とにかく良かった。ちゃんと屋敷を出れて」
もし陽のようにあの屋敷で茶毘に付されるようなことがあれば、自分は平静を保てないのだろうと、奈緒は何処か他人事のように思ったのだった。

ようやく咽元からナイフの切っ先が離れ、安堵に玲治は深い息をついた。
「・・・・・・・・・」
「佳那汰ご苦労だった、少し休め」
佳那汰は玲治をかえりみず、遊子の言葉に頷いて部屋を出て行く。
遊子の寝室に、玲治と部屋の主である芦原遊子が残される。
「さて玲治」
「！」
「貴様にはほとほと失望させられる。何か言いたいことはあるか？」
玲治は首を横に振るのが精一杯で、声を出す事が出来ない。
「そうか。それは結構」
残忍な遊子の笑顔が、玲治に絶望を連れて来る。
（・・・・・・・・・もう、疲れた、）
誰にも届かない心の中、玲治はそう思った。

ご丁寧にも車は九連家に横付けされ、その親切さに奈緒は何か魂胆があるのではないかとすら思った。
「何だ、その目は」
笹原が奈緒を睨みつける。
「別に・・・・・影、降りるよ」

「あぁ」
奈緒が先に下りてドアを開けてやると、影は日向の腕を肩に回して彼を支えながら車から降りた。
「確かに送り届けたからな」
「ご苦労様。遊子に、もう手を出すなって伝えといて」
奈緒の言葉を、笹原は笑う。
「伝えるが、無理だろう」
「・・・・・・そうね」
笹原はにやりと笑うと、車を発進させた。
「蓮本奈緒、少しうちで休んでいくか？」
「あら、いいの？早く二人っきりになりたいんじゃないの？」
奈緒のからかい言葉を、影が鼻で笑う。
「止めろ。昔の恋物語じゃあるまいし」
「ふふ・・・・・そうね、お言葉に甘えていい？」
「ああ」
誰かと一緒にいたいと思うのは久しぶりな気がするなぁ、と思いながら、奈緒は影に従った。

影は意外と優しい手つきで日向をソファに横たえさせると、
「蓮本奈緒、何か飲むか？」
奈緒はぼんやりと周囲を見回す。日向と影が仲たがいの状態になったときに来たが、あの時はゆっくり中を見る余裕はなかった。だが今日は少しゆとりがある。
「蓮本奈緒！聞いてんのか？！」
赤い眼の影が苛立ったようにもう一度訊く。

「何か飲むかって訊いてるだろっ！」
「えっ、あ、あぁ・・・何があるの？」
スリッパの音をぺたぺたと鳴らしながら、奈緒はキッチンに立つ影の横へ歩いた。
「・・・・大抵あるけどな。紅茶にコーヒーにお茶に牛乳にジュースに、」
「あんた紅茶淹れられるの？普段の影ならお似合いだけど、あんたには相応しくないような気がするんだけど」
紅茶缶に手を伸ばしかけた影の手が引っ込み、尖った眼で奈緒を睨み付ける。
「てっきり紅茶が良いって言うのかと思っただろうが」
「あたし紅茶苦手だし。簡単に水道水で良いわ」
「簡単すぎるだろ。しかも冷水じゃなくて水道水って」
影は呆れたように言うが、ガラスコップに水道水を注ぐあたり素直だ。奈緒はありがと、と軽く言って一気に飲み干す。
「・・・・・・どれだけ咽渇いてたんだよ、蓮本奈緒」
「このくらい、よ。・・・いい加減普段の影に戻ったら？赤い眼になる時間が長いほど、体への負担は大きいんじゃないの？」
「・・・・まぁね。蓮本奈緒って、日向だけかと思ったけど、影のことも心配してくれてるんだな」
「何よ、その言い方。それにその“蓮本奈緒”っていう長ったらしい呼び名、どうにかしてくれない？」
「じゃあ何て呼べば良いんだよ。奈緒様？」
奈緒はがっくりと項垂れる。
「何でいきなり敬称になるのよ？蓮本か奈緒で良いわよ」
影は赤い眼を奈緒に据えていたが、不意に顔を背けたかと思うとプッと噴き出した。奈緒が噛み付く。
「何笑ってるのよ、あんた！」
「・・・いや、別に」
「・・・・・・・・・」

奈緒は影の足を蹴った。
「いでっ・・・！何しやがる！」
「うっさいうっさい！さっさと元の影に戻れ！！」
何故か顔を赤くしてさらに蹴ろうとする奈緒を慌てて制止する。
「分かった、分かったから暴れるな！」
「暴れてない！！」
影は眼を閉じて、何事かを口の中で呟く。
「・・・・・・・・う、ん」
そのときソファに横たわっていた日向が微かに声を漏らした。
「九連？」
赤い眼から普段の黒い眼に戻りつつある影をそのままに、奈緒は日向の下へ急いだ。
「九連！大丈夫！？」
日向は苦しげに呻きながら眼を徐徐に開いていった。顰められた眼が、奈緒を捉える。
「・・・はす、もと・・・？俺、」
「大丈夫？ここ、あんたの家よ・・・ちゃんと戻って来れたの」
日向はしばらく状況確認を出来ずにいたらしい。だがすぐ我に返る。
「蓮本、影は・・・影はどうしたんだ！？」
影なら無事よ、と言おうとした奈緒より先に影本人が兄に声をかけた。
「兄さん・・・僕なら、こっ」
しかし影の言葉は全て発される前に途切れた。何故なら、
「に、兄さん苦しい、」
日向が影をギュッと抱き締めたからだ。
「良かった、無事で・・・良かった・・・！」
影は戸惑い顔だったが、嬉しげに頬を緩めた。そして御鶴城たちに拉致されたことを思い出したのだろう、緩んだ頬が強張った。白い頬に伝う透明な雫。
「こわか、った」

堤防が決壊するかのように、黒く戻った瞳から涙がブワッと溢れ出した。
「本当に、恐かった・・・殺されるかと、思った・・・・・！」
日向は震える影を安心させるように、影の頭を抱え、腕に力を込めた。
「ごめんな、ちゃんと守ってやれなくて・・・・本当にごめんな」
「そんな、ことっ・・・・ない、兄さんは、僕を、ちゃ、ちゃんと守ってくれ、」
それ以上は言葉にならなかったらしい。影は大声を上げて泣き始めた。
日向は影が泣き止むまで、影が落ち着くまで抱き締めているつもりだった。
（・・・・・・・色々あったけど、とりあえず戻って来られただけでも感謝しなきゃ、な）
奈緒は双子の兄弟が互いに支えあう姿を、ただ黙って見守っていた。

## 第六十三話：帰宅（後書き）

ようやく自宅に戻れ、日向に会えて安心した影は大声を上げて泣き、兄である日向はただ影を抱き締めます。そんな二人を、奈緒は亡き姉の姿を重ねて見守っていました。

## 第六十四話：明日への決意

「蓮本もサンキュ。すっげえ助かった」
奈緒はテレビを観るともなしに観ていたが、日向の独白のような言葉に彼の方を見た。日向は膝で眠る影の額を慣れた手つきで撫でている。
「・・・・・・」
「きっと蓮本が居なかったら俺たちどうにかなってたと思う」
テレビの音が完全に聞こえなくなる。日向の横顔から眼が離せなくなる。
普段の飄々としたものとは違う、穏やかながらに真摯な瞳。
（麻理花は、九連の眼が好きだと前に言っていた、）
麻理花が好きなのは今奈緒自身が見ている眼のことだったのだろうか。
「・・・・・何だよ、変な顔して」
日向が奈緒の凝視に気付いたらしい。眉を寄せて彼女を見返す。
「変顔で悪かったわね、馬鹿九連」
「いちいち舌鋒鋭い奴だな」
苦笑する日向。我儘な妹を見守る兄のようだ。
「・・・・訊かないの？」
意図して訊こうと思ったわけではない。なのに、そんな言葉がぽろりと口をついて出て来た。
「え？」
「あの家のこと。遊子のこと。・・・遊子と、あたしの関係。知りたいでしょ？大事な弟を傷つけたあいつらとあたしが何か関係を持ってるか、訊かないの？もしかしたらあたしもあいつらの仲間かも知れないよ！！」
自分が何を言いたいのかもう分からない。不安と焦燥がない交ぜになって奈緒の心を覆い尽くす。

「蓮本、」
「あたしはあんたにお礼を言われるようなことは何もしてないっ・・・・・！！」
影が日向の膝の上で身動ぎする。起きてしまうだろうか、という気遣いは全く出来そうにない。「お礼なんて言わないで、言わないでよ……っ」
今も耳について離れない、好きだった人の言葉。
『ありがとう。奈緒ちゃんに出逢えて、奈緒ちゃんと一緒にいられて、とても楽しかった。幸せだった。本当に、ありがとう』
お礼を言われるようなことなんてしてない。なのに、どうしてそんなに穏やかな笑顔を見せてくれるの？こんな、あたしに。
「俺は、蓮本がどんな人生を歩んで来たのか……全然知らない。蓮本が言わない限り、知ることは出来ないと思う」
静かに日向が話し出す。奈緒は耳に意識を集中させる。
「蓮本は何かに苦しんでるだろうことは、あの屋敷での様子や今の状態から考えて分かる」
「……」
「でもあの屋敷で蓮本がいなかったら、俺と影がどうなっていたか……本当に分からない。蓮本が俺を支えてくれてたのは、間違いない事実だし……あのときの蓮本は純粋に俺たちを助けようと、無事に家に帰えそうとしてくれてたしな」
「九連、」
「確かにあの遊子っていう女と蓮本は知り合いなんだろうってのはあのやり取りから分かった。あの女と対立してるのも分かった。蓮本たちが手を組んでるようには見えなかった」
「演技だったかも知れないじゃない」
「蓮本を女優だと思ったことは一度もないよ」
日向は慈愛に満ちた瞳で影を見下ろす。兄の手が気持ち良いのか、影は幸せそうな寝顔をしている。安らかな寝息が奈緒の強張った心を解すように感じる。

「・・・・・何よその遠まわしの否定方法は」
ありがとう、という素直な言葉が出ない自分が心底嫌になる。
「・・・・・・・蓮本」
「な、何よ」
「一つだけ、一つだけ訊きたいことがある」
奈緒はギュッと拳を握り締め、日向の言葉を待つ。どんな問いが来るか。
「・・・・・・影は、また狙われる、のかな」
その問いにこもるは、否定を望む気持ちと、そうなのだろうな、という諦観。奈緒としては否定したいが。
（遊子は執念深い・・・・・・）
「・・・・と、思う。だから、しっかり守ってあげなよ」
影の“赤い眼”は遊子の好奇心を捉えて放さないだろう。だから影から手を引くなどあの女にはあり得ない。謎を解明しない限り、ずっと影は安全とは言えないだろう。
だから奈緒は頷いた。この場の感情で、取り繕うべきではないと思ったから。
「そうか……」
予想出来た答えなのだろう、日向は大して動揺はしなかった。
「なぁ、」
「何」
「また、助けてくれるか？」
他人に助力を求められたことは、奈緒にはあまりない。他者との関わりを避けてきたから。持ちつ持たれつの関係が嫌いだったから。
でも、
「泣いて頼むならね」
こいつなら、九連日向になら素直になれそうな気がする。こいつの笑顔を守る為なら、余計な虚飾を剥がせそうな気がする。
「……何だよそれ」
不服そうに日向が唇を尖らせる。奈緒は子供じみたその様子に苦笑

する。
「ごめんごめん……あたしで良ければ何時でも力になるから、さ」
「・・・・・・本当かよ」
「本当も本当」
嘘偽りない本音だ。
奈緒が何度も頷くと、日向はそっか、と軽く微笑む。その笑顔に、一瞬ドキッとする奈緒である。
（な、何・・・今のドキッって・・・・・・）
陽と初めて出会った時のような感覚に、混乱する。慌てて顔を逸らすと、日向が怪訝そうな声を発する。
「蓮本？顔赤いけど、大丈夫？」
「だ、大丈夫よっ」
「変な蓮本」
「う、煩いわね」
ぎゃあぎゃあ言っていると、日向の膝の上の影が小さく呻いて薄っすらと眼を開いた。どうやら起きてしまったらしい。
「・・・・・ん、」
「あ・・・蓮本が煩いから起きちまっただろうが」
「あ、あたしの所為じゃないわよ！人が目覚めるのは自然の摂理よ！！」
なんだか無償に恥ずかしくなった奈緒が喚くと、身を起こした影がクスリと微笑んだ。
「何か夫婦喧嘩みたい」
「んなわけあるか！！」
と双子の兄とクラスメートの少女に異口同音に怒鳴れビクッと体を震わせた影だったが、だがすぐ顔を綻ばせる。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
やっと戻った影の本来の笑顔に、日向も奈緒もプッと吹き出す。
「な、何で笑うの？」

不思議そうな影の頭を軽く撫でて、
「いや、何となく・・・・・・な」
「・・・・・・だね」
「なんなの、二人して」
拗ねる影だったが、二人が楽しいなら良いかと思い直す。
少し前まで恐かったり哀しい想いしかしていなかったのに、不思議なものだ。
「ちゃんとベッドで寝るか。体疲れてるだろ」
影はこくん、と頷いて立ち上がる。
「蓮本は少し待ってて・・・・影を寝かせてくるから」
「ぼ、僕は大丈夫だよ」
「ダメだ。まだ少しふらついてるからな。これ以上影に何かあったら耐えられないし」
影は渋々、といった風に頷き、
「・・・・・蓮本さん、本当にありがとう。おやすみなさい」
赤い眼の時とは全く違う、穏やかで愛らしい笑顔。この笑顔が消えるようなことがあったら、日向はどうなるのだろう。考えるだけで暗い気持ちになる。
「ん。ゆっくり休みなよ」
「うん」
「じゃあ蓮本、待ってて」
「あ、良いよ。あたしも帰るから」
「もう少しゆっくりしていけよ。折角だから飯でも、」
「良いから。九連だって疲れてるだろうから、ゆっくりしなよ。兄弟水入らずで、さ」
「最近はずっと兄弟水入らずなんだが・・・まぁ蓮本がそこまで言うなら」
「水も美味しかったよ、有難う」
影に言えば、彼はキョトンとしている。
そうだ。赤い眼のときの記憶はないんだった、と奈緒は一人苦笑す

る。
「じゃ、そういうことで」
「あぁ」
奈緒はソファから立ち上がると、見送る兄弟に手を振って九連家を辞した。

（あたしは、屋敷に戻るべきなのかもしれない）
陽との思い出を清算しなければならない時機が来たのかもしれない。姉の幻影から逃れるべき時が来たのかもしれない。そして、遊子と対決すべき時が来たのかもしれない。
奈緒は、九連家を見上げる。陽の次に好きになった人を瞼の裏に焼き付けながら、奈緒は静かに歩き出した。

「蓮本さん、何か吹っ切れた顔してたね」
パジャマに着替えてベッドに潜り込みながら放たれた影の言葉に、日向は窓の外から眼を影に戻した。日向は立ち去る奈緒の後ろ姿が何となく気になって窓から見送っていたのである。
「え？」

「僕の気のせいかもしれないけど・・・・・・・」
「俺も、そう思った」
「兄さんも・・・？」
すぐにうとうとし始める影の額を撫でながら、
（そういえば病院に戻らなくて良いのか・・・・・・？）
確か病院で遊子の手下に拉致されたのである。今頃患者の消えてしまった病院内はおおわらわになっているのではないだろうか。
（・・・・よく分からんが、まぁ良いか）
どうしてか、放っておいても大丈夫だろうという気がして、日向は内心で不思議に思う。
正常な神経は焼き切れてしまったのだろうか。
「なぁ、影」
「・・・・・何？」
「・・・・・最近、恐い想いばっかりさせてるな」
悄然とする日向に、影がクスッと笑う。
「大丈夫、兄さんや蓮本さんが居てくれてるから。恐いけど、恐くないよ」
「でも、全然影を助けて遣れてない」
「そんなことない。兄さんも、蓮本さんも・・・・・・一生懸命してくれてるって、僕、分かってるから。それに兄さんが傍に居てくれたら、大丈夫」
やっぱり依存しているな、と思う。少し前にも感じたこの想い。だが、今はまだこれでいいのだろう。影も、日向（自分）もまだまだ子どもだ。今は、このままでいい。そう思いたい。
「お休み、影」
「うん、おやすみなさい」
影が眼を閉じる。長い睫が白い頬に影を落とす。
精神的疲労が祟ったのか、また少し痩せたな、と思う。これ以上負担をかけるわけにはいかない。
（影は絶対に俺が守る。何に代えても、絶対に・・・・・・・）

日向は誓う。双子の弟である影を、何に代えても守ろうと。
あらゆる苦痛から。あらゆる悲しみから。あらゆる恐怖から。
自分を、犠牲にしてでも。
「今日は、ゆっくり休め」
影が笑うこと、影が幸せであること。それが日向の生きる糧になる。
影の笑顔を。幸福を。
それを願いながら、日向は影に添い寝をする。腕の痛みはもうない。
折れているのに、痛くない。そのことすら気付けないほどに、日向の意識はまどろみの中にあっさりと落ちて行った。

～第一部・完～

## 第六十四話：明日への決意（後書き）

伏線の回収を一切出来ないままに第一部完結です。
というか完結にしました（最初は～部とか分ける予定はありませんでしたっ）。本当にこんな終わり方でごめんなさい・・・・（汗）。
第二部はいつから開始になるか国府神自身にも未定ですが、もし開始いたしましたら読んで下さるととても嬉しいです。それでは、また。第一部を御覧いただき、誠にありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1909f/

切れない絆

2011年2月3日09時12分発行